

国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

上野原遺跡

第2分冊

(第2～7地点：縄文時代早期編2)



2002年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

第 2 分冊 目次

第 2 分冊本文目次

第 5 章 縄文時代早期 (2・3地点) の調査

第 4 節 遺物	2
(1) 土器	2
(2) 土器加工品	165
(3) 石器	167

第 2 分冊挿図目次

第 1 図 1 a 類土器出土状況図	2
第 2 図 1 b 類土器出土状況図	3
第 3 図 1 類土器 (1)	4
第 4 図 1 類土器 (2)	5
第 5 図 2 類土器出土状況図	7
第 6 図 2 類土器	8
第 7 図 3 類土器出土状況図	9
第 8 図 3 a 類土器出土状況図	10
第 9 図 3 a 類土器出土状況分割図	11
第 10 図 3 a 類土器 (1)	12
第 11 図 3 a 類土器 (2)	13
第 12 図 3 b 類土器出土状況図	15
第 13 図 3 b 類土器出土状況分割図 (1)	16
第 14 図 3 b 類土器出土状況分割図 (2)	17
第 15 図 3 b 類土器 (1)	18
第 16 図 3 b 類土器 (2)	19
第 17 図 3 b 類土器 (3)	20
第 18 図 3 b 類土器 (4)	21
第 19 図 3 c 類土器出土状況図	23
第 20 図 3 c 類土器出土状況分割図 (1)	24
第 21 図 3 c 類土器出土状況分割図 (2)	25
第 22 図 3 c 類土器 (1)	26
第 23 図 3 c 類土器 (2)	27
第 24 図 3 c 類土器 (3)	28
第 25 図 3 c 類土器 (4)	29
第 26 図 3 d 類土器出土状況図	31
第 27 図 3 d 類土器出土状況分割図 (1)	32
第 28 図 3 d 類土器出土状況分割図 (2)	33
第 29 図 3 d 類土器 (1)	34
第 30 図 3 d 類土器 (2)	35
第 31 図 3 d 類土器 (3)	36
第 32 図 3 d 類土器 (4)	37
第 33 図 3 d 類土器 (5)	38
第 34 図 3 d 類土器 (6)	39
第 35 図 3 d 類土器 (7)	40
第 36 図 3 e 類土器出土状況図	42
第 37 図 3 e 類土器 (1)	43
第 38 図 3 e 類土器出土状況分割図 (1)	44
第 39 図 3 e 類土器出土状況分割図 (2)	45
第 40 図 3 e 類土器 (2)	46
第 41 図 3 e 類土器 (3)	47
第 42 図 3 e 類土器 (4)	48
第 43 図 3 e 類土器 (5)	49
第 44 図 3 f 類土器	50
第 45 図 3 f 類土器出土状況図	51
第 46 図 3 類土器胴部・底部片出土状況図	53
第 47 図 3 類土器胴部・底部片出土状況図 (掲載分)	54

第 48 図 3 類土器胴部 (1)	55
第 49 図 3 類土器胴部・底部片出土状況分割図 (1)	56
第 50 図 3 類土器胴部・底部片出土状況分割図 (2)	57
第 51 図 3 類土器胴部 (2)	58
第 52 図 3 類土器胴部 (3)	59
第 53 図 3 類土器胴部 (4)	60
第 54 図 3 類土器胴部 (5)	61
第 55 図 3 類土器胴部 (6)	62
第 56 図 3 類土器胴部 (7)	63
第 57 図 3 類土器胴部 (8)	64
第 58 図 3 類土器胴部 (9)	65
第 59 図 3 類土器胴部 (10)	66
第 60 図 3 類土器胴部 (11)	67
第 61 図 3 類土器胴部 (12)	68
第 62 図 3 類土器胴部 (13)	69
第 63 図 3 類土器胴部 (14)	70
第 64 図 3 類土器胴部 (15)	71
第 65 図 3 類土器胴部 (16)	72
第 66 図 3 類土器胴部 (17)	73
第 67 図 3 類土器胴部 (18)	74
第 68 図 3 類土器胴部 (19)	75
第 69 図 3 類土器底部 (1)	76
第 70 図 3 類土器底部 (2)	77
第 71 図 3 類土器底部 (3)	78
第 72 図 3 類土器底部 (4)	79
第 73 図 3 類土器底部 (5)	80
第 74 図 3 類土器底部 (6)	81
第 75 図 3 類土器底部 (7)	82
第 76 図 3 類土器底部 (8)	83
第 77 図 3 類土器底部 (9)	84
第 78 図 3 類土器底部 (10)	85
第 79 図 3 類土器底部 (11)	86
第 80 図 4 類土器出土状況図	88
第 81 図 4 類土器 (1)	89
第 82 図 4 類土器 (2)	90
第 83 図 6 類土器出土状況図	91
第 84 図 6 類土器 (1)	92
第 85 図 6 類土器 (2)	93
第 86 図 6 類土器 (3)	94
第 87 図 6 類土器 (4)	95
第 88 図 7 類土器出土状況図	96
第 89 図 7 類土器	97
第 90 図 8 類土器出土状況図	98
第 91 図 8 類土器	99
第 92 図 9 類土器出土状況図	101
第 93 図 9 a 類土器出土状況図	102
第 94 図 9 a 類土器 (1)	103
第 95 図 9 a 類土器 (2)	104
第 96 図 9 b 類土器出土状況図	105
第 97 図 9 b 類土器 (1)	106
第 98 図 9 b 類土器 (2)	107
第 99 図 9 d 類土器出土状況図	108
第 100 図 9 d 類土器	109
第 101 図 9 e 類土器出土状況図	110
第 102 図 9 e 類土器 (1)	111

第103H	9e 類上蓋 (2)	112	第161H	石蓋出土狀況圖 (2)	172
第104H	9e 類上蓋 (3)	113	第162H	石蓋 (4)	173
第105H	9e 類上蓋 (4)	114	第163H	石蓋 (5)	174
第106H	9e 類上蓋 (5)	115	第164H	石蓋出土狀況圖 (3)	175
第107H	9類上蓋底部出土狀況圖 (陶甕分)	116	第165H	石蓋 (6)	176
第108H	9類上蓋底部	117	第166H	石蓋 (7)	177
第109H	10類上蓋出土狀況圖	119	第167H	石蓋 (8)	179
第110H	10a 類上蓋出土狀況圖	120	第168H	石蓋 (9)	180
第111H	10a 類上蓋 (1)	121	第169H	石蓋 (10)	181
第112H	10a 類上蓋 (2)	122	第170H	石蓋 (11)	182
第113H	10a 類上蓋 (3)	123	第171H	石蓋出土狀況圖 (4)	183
第114H	10a 類上蓋 (4)	124	第172H	石蓋 (12)	184
第115H	10a 類上蓋 (5)	125	第173H	石蓋 (13)	185
第116H	10b 類上蓋出土狀況圖	126	第174H	石蓋 (14)	186
第117H	10b 類上蓋	127	第175H	石蓋 (15)	187
第118H	10c 類上蓋出土狀況圖	128	第176H	石蓋 (16)	188
第119H	10c 類上蓋	129	第177H	石蓋 (17)	189
第120H	10d 類上蓋出土狀況圖	130	第178H	石蓋 (18)	190
第121H	10d 類上蓋	131	第179H	石蓋 (19)	191
第122H	10e 類上蓋出土狀況圖	132	第180H	石蓋出土狀況圖 (5)	192
第123H	10e 類上蓋	133	第181H	石蓋 (20)	193
第124H	10e · 10f 類上蓋	134	第182H	石蓋 (21)	194
第125H	10f 類上蓋出土狀況圖	135	第183H	石蓋 (22)	195
第126H	10類上蓋側部 (1)	136	第184H	石蓋 (23)	196
第127H	10類上蓋側部 (2)	137	第185H	石蓋 (24)	197
第128H	10類上蓋側部 · 底部	138	第186H	石蓋 (25)	198
第129H	10類上蓋底部	139	第187H	石蓋 (26)	199
第130H	11類上蓋出土狀況圖	140	第188H	石蓋 (27)	200
第131H	11類上蓋	141	第189H	石蓋 (28)	201
第132H	12類上蓋出土狀況圖	142	第190H	石蓋出土狀況圖 (6)	202
第133H	12類上蓋 (1)	143	第191H	石蓋 (29)	203
第134H	12類上蓋 (2)	144	第192H	石蓋 (30)	204
第135H	12類上蓋 (3)	145	第193H	石蓋出土狀況圖 (7)	205
第136H	13a 類上蓋出土狀況圖	146	第194H	石蓋 (31)	206
第137H	13a 類上蓋 (1)	147	第195H	石蓋出土狀況圖 (8)	207
第138H	13a 類上蓋 (2)	148	第196H	石蓋 (32)	208
第139H	13b 類上蓋出土狀況圖	149	第197H	石蓋 (33)	209
第140H	13b 類上蓋 (1)	150	第198H	石蓋 (34)	210
第141H	13b 類上蓋 (2)	151	第199H	石蓋 (35)	211
第142H	14類上蓋出土狀況圖	152	第200H	石蓋 (36)	212
第143H	14類上蓋	153	第201H	石蓋出土狀況圖 (9)	213
第144H	15類上蓋出土狀況圖	154	第202H	石蓋 (37)	214
第145H	15 · 16類上蓋	155	第203H	石蓋出土狀況圖 (10)	215
第146H	16類上蓋出土狀況圖	156	第204H	石蓋 (38)	216
第147H	16類上蓋 (2)	157	第205H	石蓋出土狀況圖 (11)	217
第148H	16類上蓋 (3)	158	第206H	石蓋 (39)	218
第149H	16類上蓋 (4)	159	第207H	石蓋出土狀況圖 (12)	219
第150H	17類上蓋出土狀況圖	160	第208H	石蓋 (40)	220
第151H	17類上蓋	161	第209H	石蓋出土狀況圖 (13)	221
第152H	18類上蓋出土狀況圖	162	第210H	石蓋 (41)	222
第153H	18類上蓋 (1)	163	第211H	石蓋出土狀況圖 (14)	223
第154H	18類上蓋 (2)	164	第212H	石蓋 (42)	224
第155H	上蓋加工品	165	第213H	石蓋 (43)	225
第156H	上蓋加工品出土狀況圖	166	第214H	石蓋出土狀況圖 (15)	226
第157H	石蓋出土狀況圖 (1)	168	第215H	石蓋 (44)	227
第158H	石蓋 (1)	169	第216H	石蓋出土狀況圖 (16)	228
第159H	石蓋 (2)	170	第217H	石蓋出土狀況圖 (17)	229
第160H	石蓋 (3)	171	第218H	石蓋 (45)	230

第4節 遺物

(1) 土器

2・3地点の主体をなす土器は、3類が最も多く9類・10類がそれに続く。土器の出土状況は、Ⅵ層からⅩ層上面にかけて出土する。これらは、第4章で述べたように層ごとの単独出土は見られない。これらの土器の平面分布は、各類ごとに提示し、遺物の観察表は第3分冊の巻末に一括して掲載した。

1類 (第3図1～第4図30)

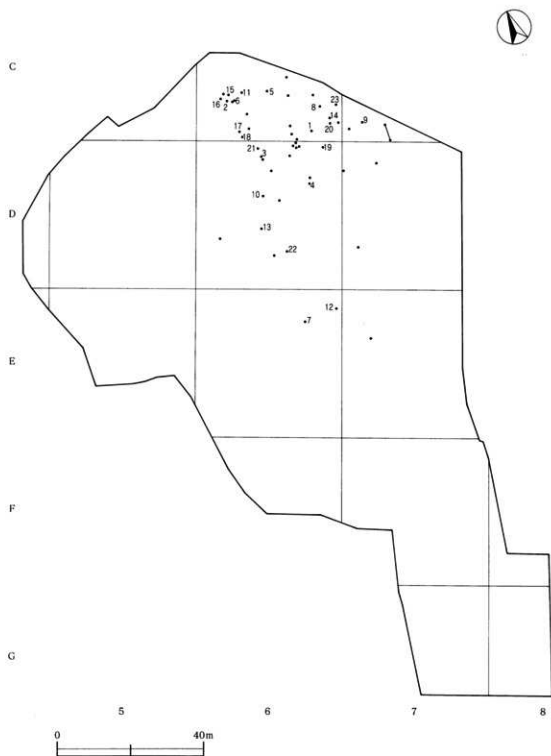
総出土点数は62点である。30点を図化し掲載した。いずれも破片が多く脆い。全体の器形を知る資料は出土していないが、口縁部から底部へかけて直線的に移行する円筒形土器であろうと思われる。文様は、口縁部に縦位の貝殻刺突文を施しその下に横位の貝殻刺突文をめぐらせ、胴部には貝殻条痕文を斜位に施す。貝殻条痕文はやや太めで粗い印象があるが、中には細くてシャープなものもある。前者を1a類、後者を1b類と細分した。分布は、C・D-6区を中心に出土し、E-6・7区でもわずかに出土している。

1a類 (第3図1～13・第4図14～23・29・30)

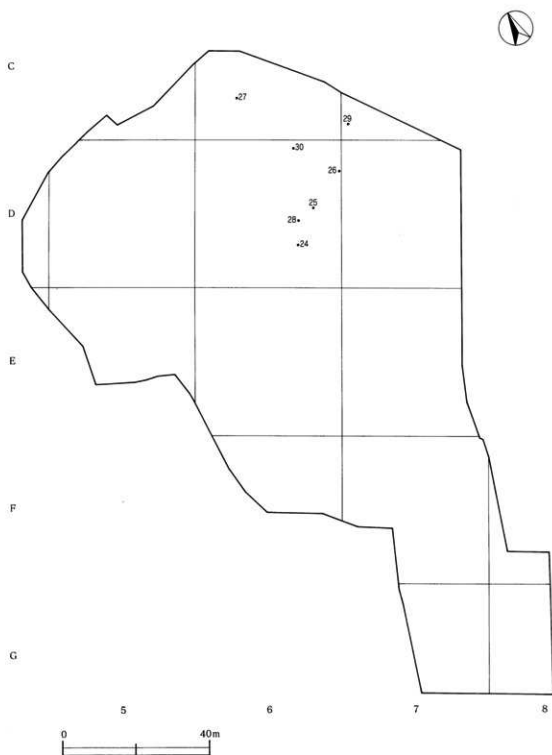
分布はC・D-6区に多く出土しており、これらの区は調査区北側に位置している。1は口縁部片である。風化しているが口唇部は平坦面を有している。口縁部に縦位の短い貝殻刺突文を施し、その下に横位貝殻刺突文をめぐらせる。胴部は横位に近い貝殻条痕文を施している。2～23は、胴部片である。いずれも傾きははっきりとしない。7の胎土中には軽石の混入が見られる。22の内面調整には貝殻条痕文が施されている。外面の貝殻条痕文も他と比べてより斜位であり、焼成も他より硬質な感じである。1類以外の土器である可能性も考えられる。29・30は底部片である。両者ともに横位の貝殻条痕文が施されている。

1b類 (第4図24～28)

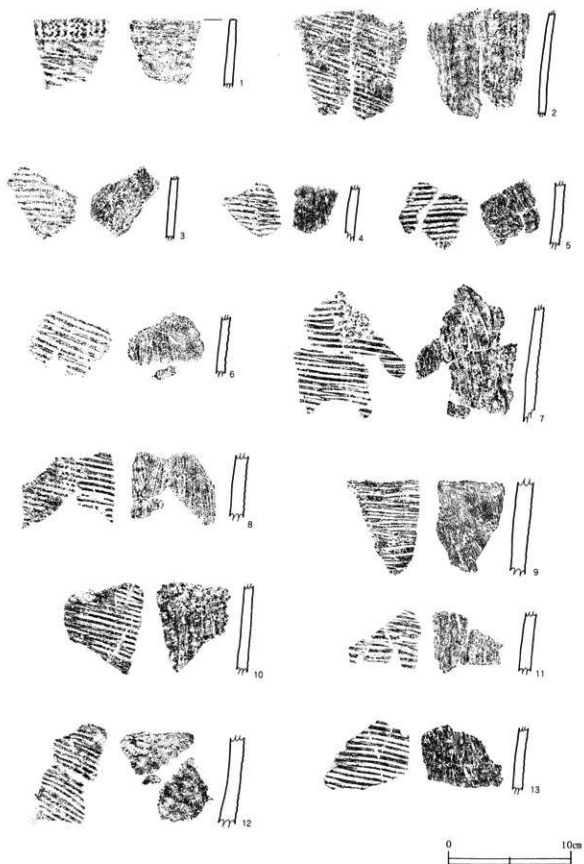
5点を図化した。24～28はすべて胴部片である。分布はC・D-6区を主に出土している。1a類と比べ貝殻条痕文が細い。口縁部資料は見いだせず、色調や胎土、内面調整等は1a類と大差なくここに分類し掲載したが不明な点も多い。



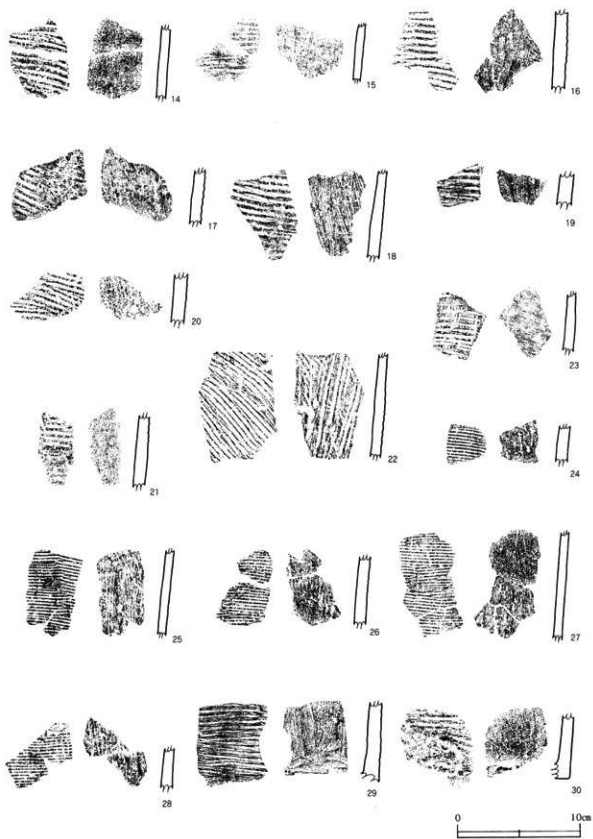
第1図 1 a類土器出土状況図



第2図 1b類土器出土状況図



第3図 1類土器 (1)



第4圖 1類土器(2)

2類 (第6図31~42)

総出土点数は21点である。12点を図化し掲載した。1類土器と同様に小破片で脆いものが多い。円筒形と角筒形の2種類の器形が存在するが、全体の器形を知る資料は出土していない。各部位片から、両者ともに口縁部が直行し平底の底部へと直線的に至るものと思われる。角筒形は、口縁部で4つの波頂部を有し胴部では角部の形成がやや曖昧なものとなっている。

分布は、D-6区を中心として出土している。1類と同様に調査区の北側に位置している。

31~41は円筒形の器形である。31は唯一の口縁部資料である。平口縁と思われるが一定していない。口縁部に縦位の貝殻刺突文が施される。この部分は、刺突手法の為であろうかやや肥厚している感がある。胴部は、横位の貝殻条痕文が施され縦位の貝殻条痕文が部分的に重ねられていると思われる。また、補修孔が見られ外面からの擦り切りによる縦長穿孔である。32は外面の貝殻条痕文がやや不規則に施されている。焼成はよい。他の2類土器と比べるとやや違和感のある資料で、2類以外の資料である可能性も考えられる。37は、風化が激しい胴部片である。他の資料が、重ねられる貝殻条痕文が縦位に近いものであることに対して流水文である。38~41は底部片である。同一個体と思われるが接合できなかった。38の底面には白色付着物が見られる。40・41は底部内面に貝殻条痕文が見られ、これは製作時に底部から胴部立ち上がり部分にかけて調整した痕跡と思われる。さらに、立ち上がり部分に関しては横位に調整が施されている。

42は角筒形である。他の資料が道跡1周辺からの出土であることに対して、この土器は、道跡2の西側からの出土である。分布域に先の資料と差が認められる。口縁部から胴部にかけて全面に貝殻条痕文が施されている。その上に、口縁部では縦位の短い貝殻刺突文が施され、胴部では、面に対して3列の貝殻刺突連点文が施されている。また、この貝殻刺突連点文は角部にも施されているが、角部であるためであろうか刺突の入り具合が浅い。

3類 (第10図43~第79図672)

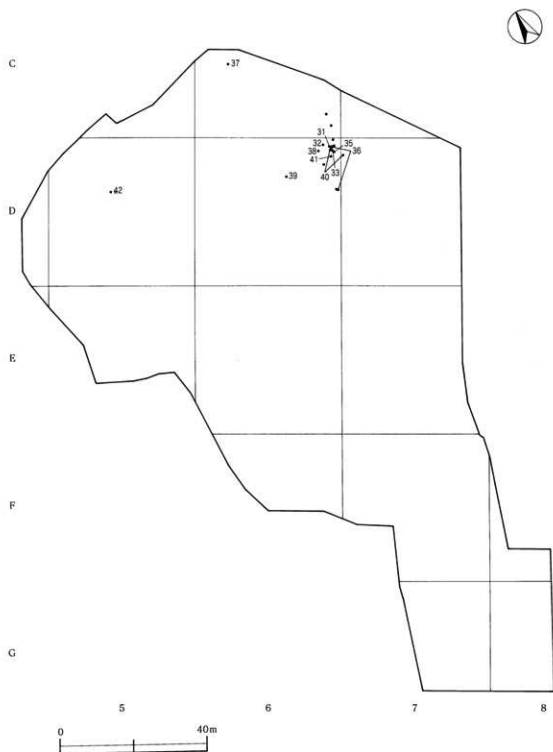
当道跡の縄文時代早期段階で最も遺物量が多く、バリエーションも豊富な土器である。総出土点数は2688点である。

器形は、従来の円筒形と角筒形の他に口縁部の上面観がレモン状を呈するものがある。3類としたものに共通する文様構成は、口縁部に貝殻刺突文を施し胴部は貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ね、口唇部と底部には刻目を施している。

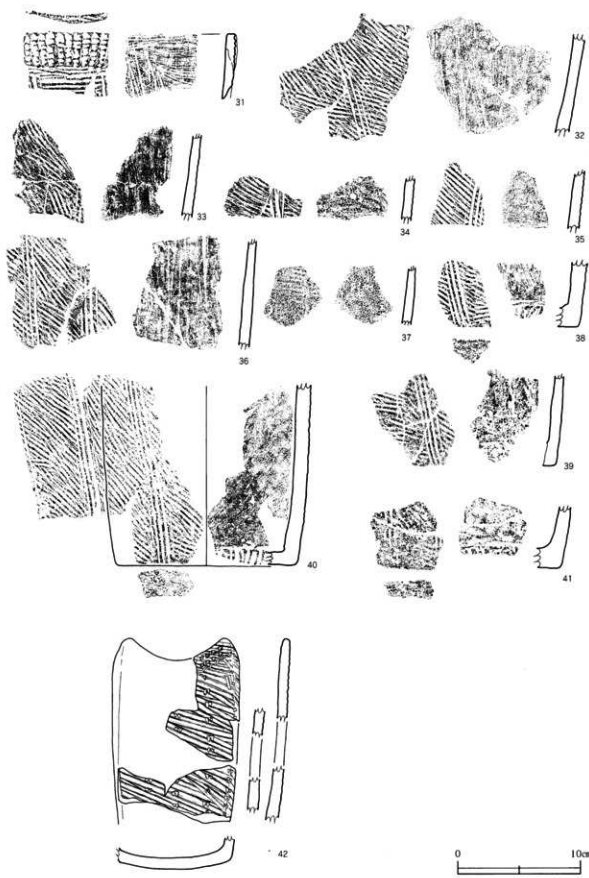
内面調整は、胴部に下から上への縦方向のケズリ調整が見られ、口縁部では入念な横方向の工具によるケズリもしくはミガキが見られるものが多い。口縁部には、貼付文が見られるものもあり、その形状から分類が可能であった。色調は、赤茶褐色や黄茶褐色を呈するものも多く、胎土には雲母を含む資料も若干見られる。また、小軽石を含むものも出土している。底部接地面には、白色付着物が観察されるものもある。この成分については現在のところ不明である。

3a類 (第10図43~第11図50)

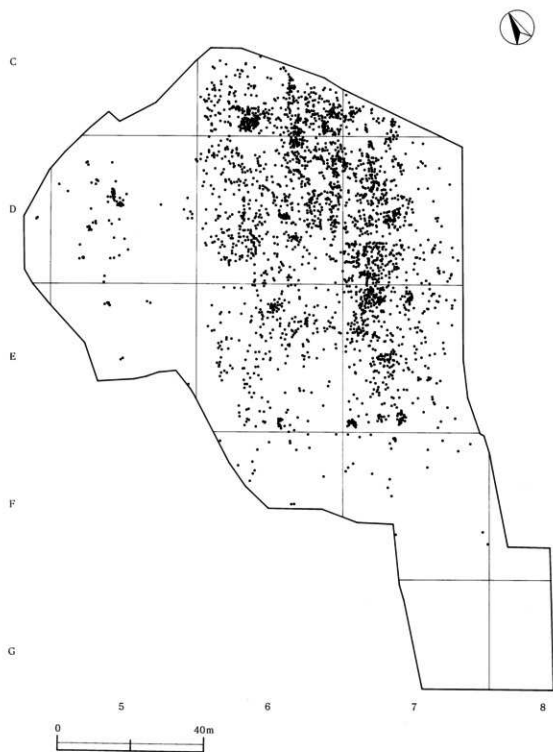
3a類としたものは、口唇部は平坦で口縁部が直行する筒形の器形で、円筒形のものと同角筒形のものがある。確認できた総出土点数は11点である。文様は、口唇部に刻目を施し口縁部は短



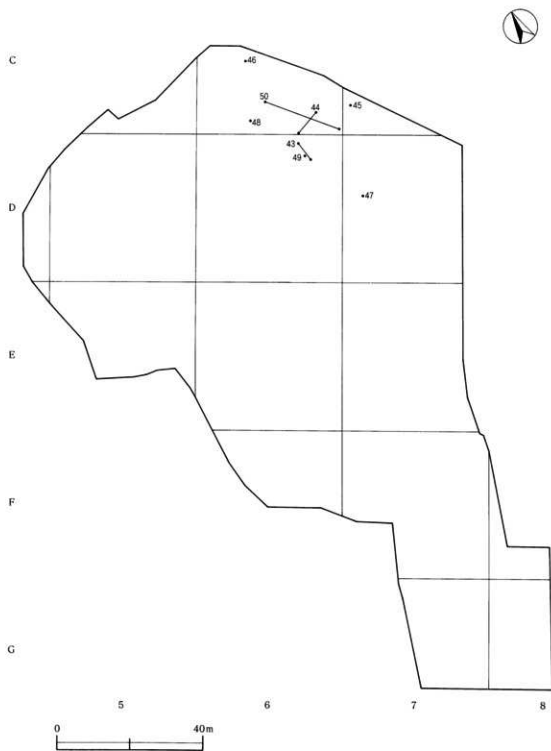
第5図 2類土器出土状況図



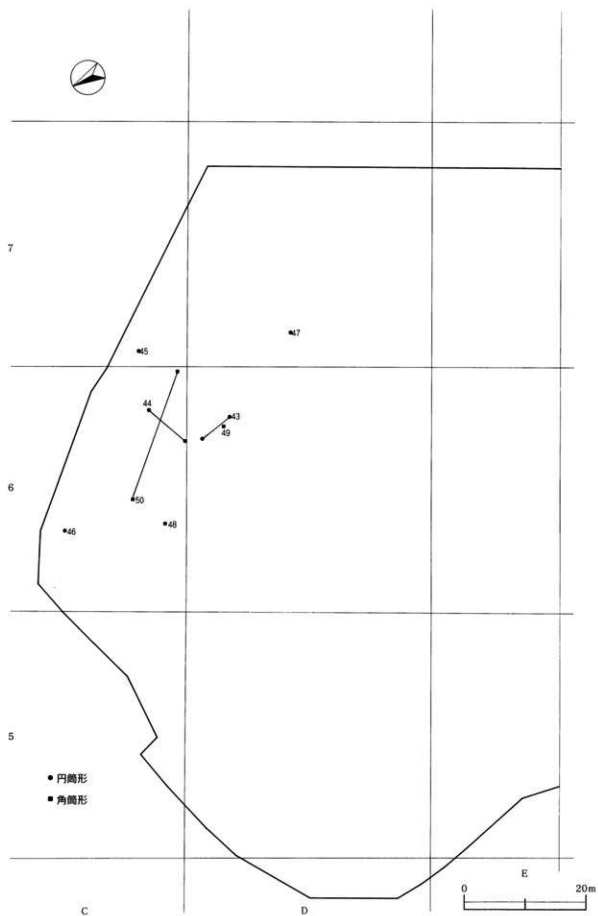
第6圖 2類土器



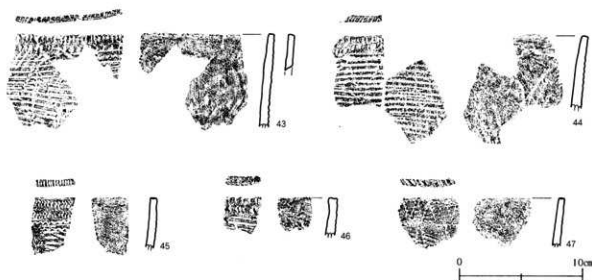
第7図 3類土器出土状況図



第 8 図 3 a 類土器出土状況図



第9図 3a類土器出土状況分割図

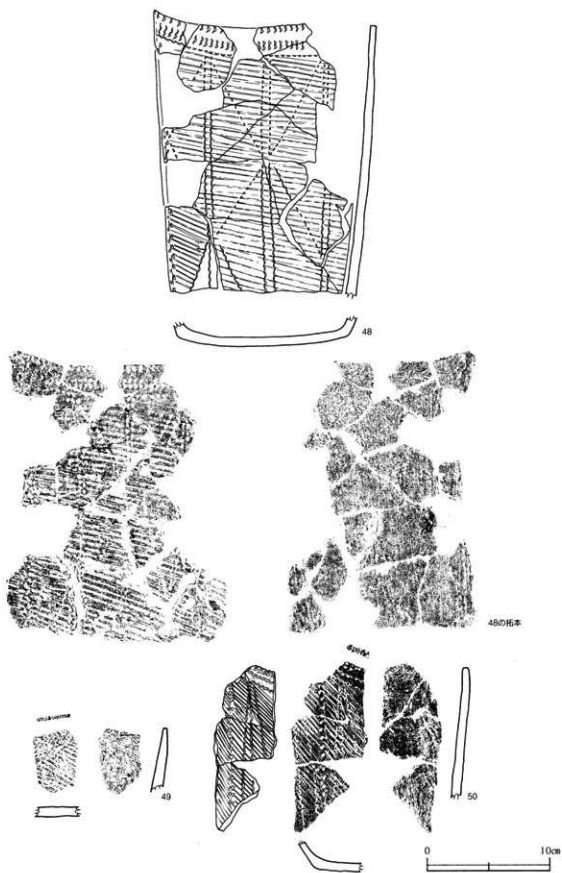


第10図 3a類土器(1)

い縦ないし斜位の貝殻刺突文が施され、その下に横位の貝殻刺突文がめぐる。胴部は、略横位の太めの貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が施される。この貝殻刺突文は、縦位の貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文が施され、縦位のものには2本1組を意識したものも見られる。底部には沈線状の刻目が施されている。口縁部内面の調整はケズリを基本としており、ミガキは見られない。分布は、C・D-6・7区に出土する。

43~47は円筒形の器形である。43は口縁部に縦位の短い貝殻刺突文を施し胴部は横位の貝殻条痕文の上に間隔の広い貝殻刺突文を施す。なお、大半を欠くが補修孔が見られ外面からの縦長擦り切り穿孔であると思われる。45は、口縁部に縦位の短い貝殻刺突文の下に横位の貝殻刺突文が2条施されている。口縁部は安定しておらず、平口縁であるか波状口縁であるのかはっきりとしない。46は、口縁部内面がわずかに内傾して見えるが、これは内面のケズリ調整のためであると思われる。47は、口縁部に短い貝殻刺突文を鋸歯状に施し、その下に横位の貝殻刺突文をめぐらせる。なお、口縁部では貝殻条痕文をナデ消している。

48~50は角筒形の器形である。48は大型の角筒形である。全体的に風化が激しく器面の剥落が激しい。口縁部に縦位の短い貝殻刺突文が施され、その下に横位の貝殻刺突文がめぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文が2本1組で3列施され、その間に貝殻刺突文が斜位に施される。角部には貝殻刺突文が施されている。内面は、縦位の調整痕が見られ口縁部付近では横位を基本としつつ角部へ向かって調整が施されている。49の口縁部に施されている縦位の短い貝殻刺突文は、斜位の貝殻条痕文をナデ消した後に施文されている。50は口縁部に肋2条の縦位貝殻刺突文が施され、その下に横位貝殻刺突文が2条施されている。角部形成は、48程明瞭ではなく外面の角は開き気味であることに對し内面は角部を明瞭には形成していない。しかし



第11図 3a類土器(2)

ながら、内面調整は角部へ向かう調整が施されており、内面も外面同様に角部形成に関し意識はしているものと思われる。

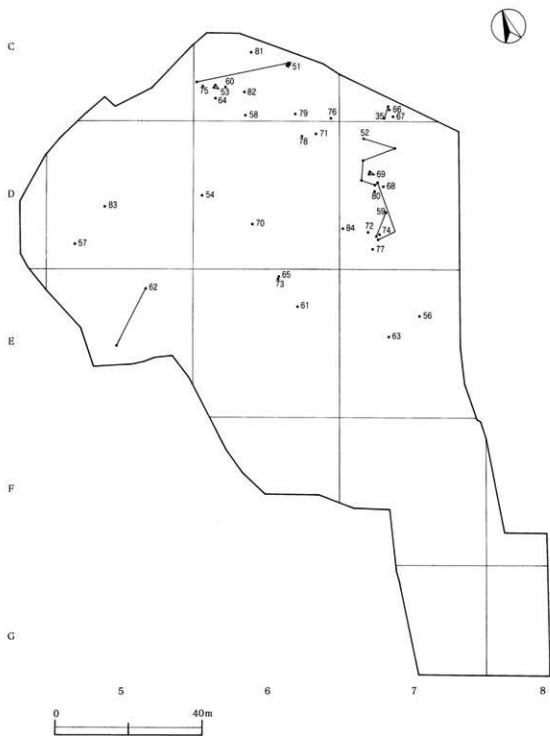
3 b 類 (第15図51～第18図84)

3 b 類としたものは、口縁部に横位の貝殻刺突文のみをめぐらせ、胴部は斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねるもので、この貝殻刺突文は間隔が広く縦位の列が明瞭なものと縦位の貝殻刺突文のみで構成されるもの・斜位の貝殻刺突文のみで構成されるもの3タイプに分けられる。底部には、刻目が施されている。口縁部内面の調整はケズリ・ミガキ共に見られる。

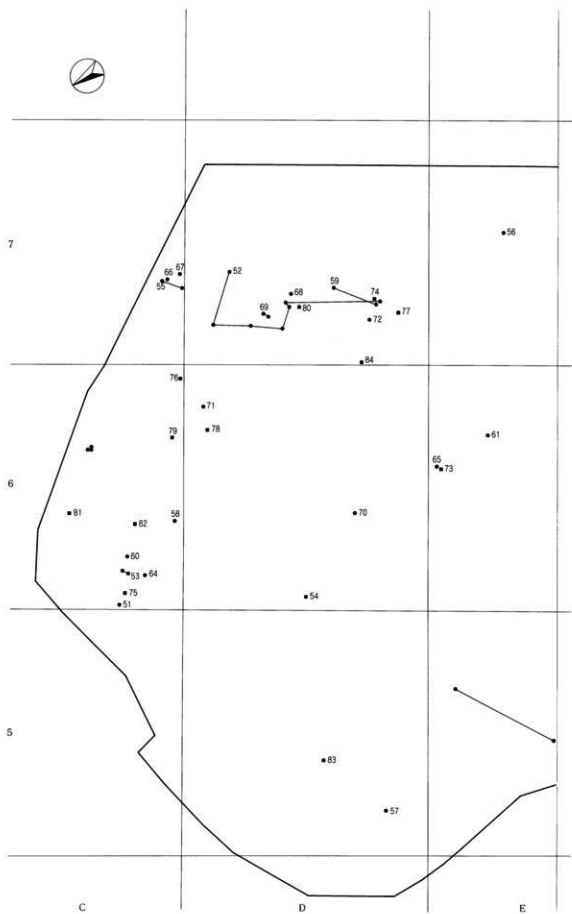
分布は、C・D-6・7区を中心にE-5～7区、D-5区でも出土している。確認できた総出土点数は41点である。

51～72は円筒形である。51は全体形を知り得る資料である。口唇部は平坦で口縁部から底部へ直行し平底へ至る。文様は、口縁部上端が風化のためはっきりとしない。部分的に3 a 類のような短い縦位の貝殻刺突文らしき痕跡も見られるが、確認が得られなかったためにここに分類した。口縁部は、横位の貝殻刺突文が2条めぐり、胴部は横位に近い貝殻条痕文を施し、その上に2本1組の貝殻刺突文が縦位に施され、その間にも同様な貝殻刺突文がX字状に施される。風化のため、これら文様の切り合い関係は確認できなかった。底部外周には沈線に近い長くて太めの刻みが施される。52は口縁部に横位の貝殻刺突文が4条めぐり、胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に2本1組の縦位の貝殻刺突文が施され、その間に斜位の貝殻刺突文が施される。結果、菱形文を呈する。この胴部の貝殻刺突文は、文様の切り合い関係から縦位の貝殻刺突文を施文した後に斜位の貝殻刺突文が施されている。また、それぞれは上から下を基本として施文されている。さらに、わずかに口縁部文様とも切り合っており、口縁部施文→胴部貝殻刺突文施文という順に施文された可能性が高い。この他に粘土接合面も観察でき、幅広の粘土帯による輪積み法で製作されている。53は口縁部に未貫通の補修孔が見られる。外面からの擦り切りによる縦長穿孔である。また、口縁部の貝殻刺突文は貝殻条痕文をナデ消した後に施されており、文様の切り合いから反時計回りで施文されている。

54は貝殻条痕文をナデ消したのち、口縁部の横位貝殻刺突文を施しており、施文順序は左から右への反時計回りと思われる。59・60は貝殻条痕文の上に方形刺突文を重ねている。斜位の貝殻刺突文は見られず、縦位の貝殻刺突文のみである。62は口縁部に横位貝殻刺突文を4条施す。施文順序は、左から右への反時計回りと思われる。胴部は、貝殻条痕文の上にV字状の貝殻刺突文を施した後、その下に縦位と斜位の貝殻刺突文を施している。内面調整は極めて入念なケズリ込みがなされており、胴部は左上がりに、口縁部では横位である。また、工具のアタリ痕も観察できる。断定はできないが、ハマグリなどの2枚貝の貝殻縁を用いた場合に生じる特徴を有している。なお、口縁部内面にはミガキは観察されない。64の貝殻刺突文は用いられる施文具の肋が大きい。65は貝殻条痕文がやや浅めに施されている。口縁部文様は、貝殻条痕文をナデ消した後施文されている。胴部の横断面の厚さが一定しておらず、口縁部の一部は直線的に面を形成しているところもあり、円筒形ではなく口縁部上面観がレモン状を呈するものである可能性も考えられる。66は、口縁部に未貫通の穿孔が見られ、外面からの縦位の擦り切り穿孔による補修孔であると思われる。内面調整はミガキに近い工具ナデである。67は内面調整がミガキに近い工具ナ



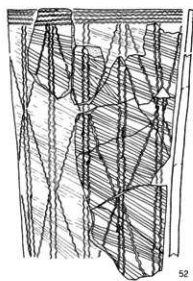
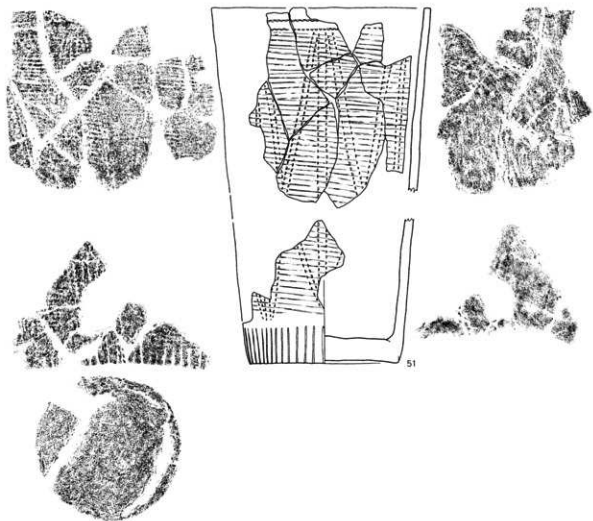
第12图 3b類土器出土状況図



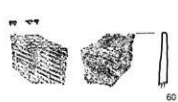
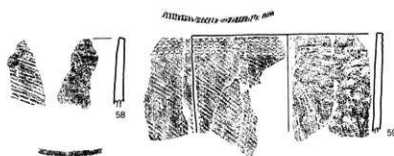
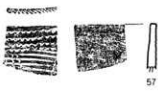
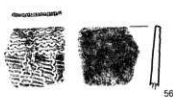
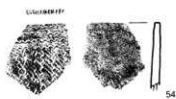
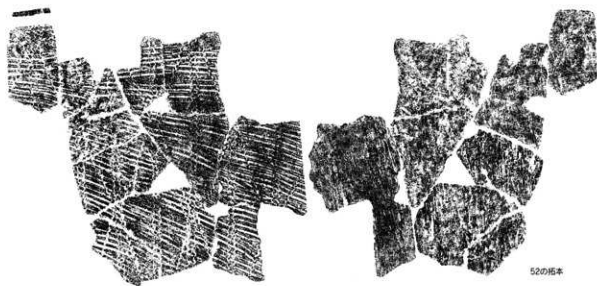
第13圖 3 b類土器出土狀況分割圖(1)



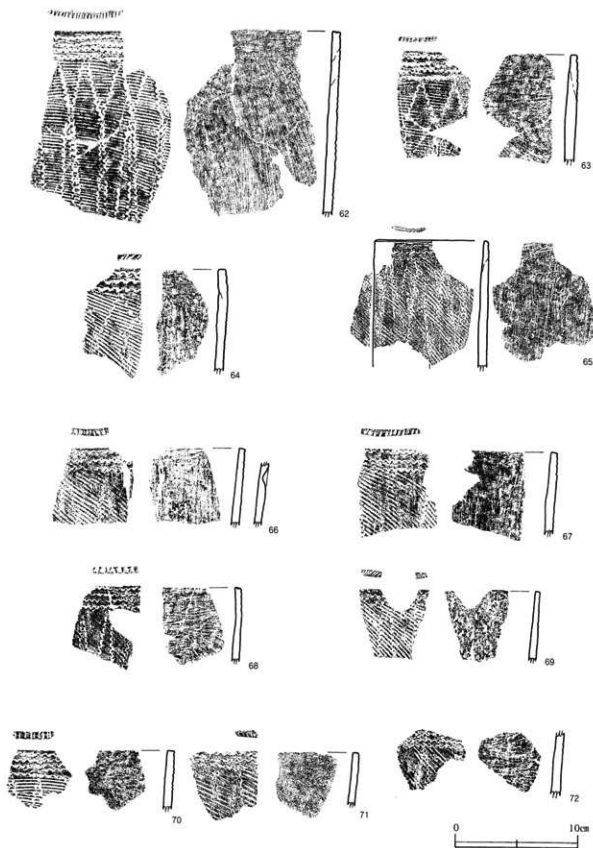
第14図 3 b 類土器出土状況分割図 (2)



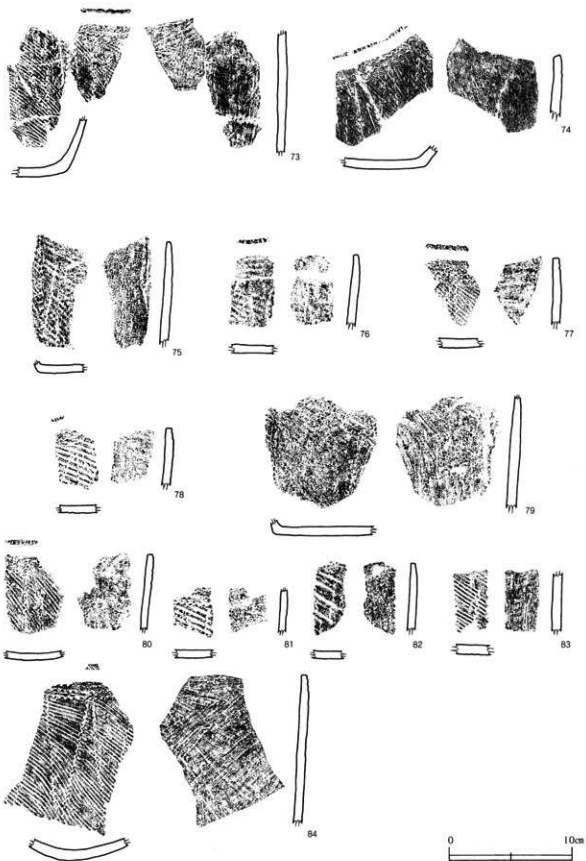
第15圖 3b類土器(1)



第16図 3b類土器(2)



第17圖 3b類土器(3)



第18図 3b類土器(4)

デである。69は、口縁部内面に炭化物の付着が著しい。

73～83は角筒形である。73の胴部の貝殻刺突文は1度V字状のものを施した後に、その上から再度長めのV字状の貝殻刺突文を施している。76は口縁部がやや内傾している。78の貝殻条痕文はやや太めである。

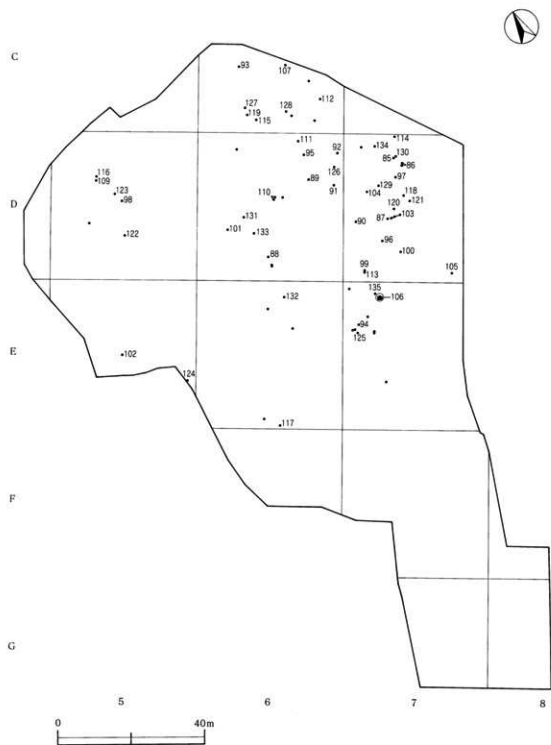
84は口縁部上面観がレモン形を呈する土器である。口縁部は、横位の貝殻刺突文が4条めぐり胴部は斜位の貝殻条痕文の上に斜位の貝殻刺突文が間隔を持って施されている。縦位の貝殻刺突文が見られないことから、X字状を呈しているものと思われる。内面調整は、工具ケズリである。胴部では斜位に、口縁部では横位に施されている。

3c類 (第22図85～第25図135)

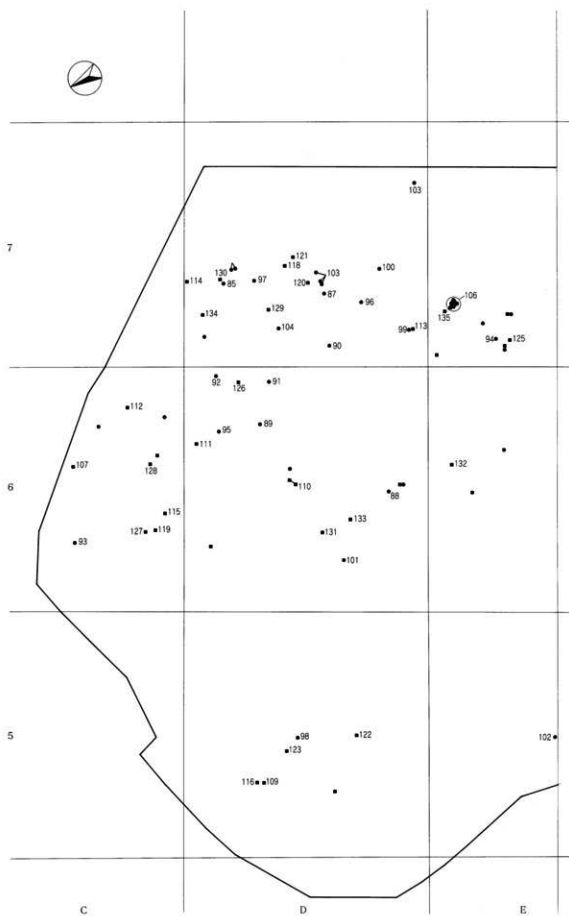
3c類は、胴部の貝殻刺突文がやや密になったものである。内面調整は、ケズリの他ミガキが口縁部に観察されるものもある。また、貝殻条痕文をナデ消す資料なども見られる。分布は、C～E-5～7区にかけて出土し、F区以南には見られない。確認できた総出土点数は79点である。

85～105は円筒形の器形を呈する。86は入念な内面調整が見られる。幅4mm程度の工具ケズリが胴部では縦位に、口縁部では横位に施され胴部では下から上へとケズリが施されている。88は、口縁部に横位の貝殻刺突文が4条めぐり、胴部は、横位に近い貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が施されている。なお、口縁部文様は左から右へ施文が切り合っており、反時計回りに施文されていたものと思われる。89の貝殻刺突文は2本1組を基本として施文されている。93は横位に近い貝殻条痕文で資料の多くが左上がりであることに對しやや右上がりである。94は胴部の貝殻刺突文が口縁部の横位貝殻刺突文を切っており、大半の資料がこの逆であることを考えるとやや特異である。96は胴部に貝殻条痕文を施した後浅くナデ消され、その後貝殻刺突文が施されている。98は口縁部に横位の貝殻刺突文を4条施している。施文の切り合いは、左から右である。99の胴部に見られる条痕は、貝殻ではなく木口状工具のようなものによる条痕文の可能性が高い。100～102は胴部に方形刺突文が施されている資料である。100・101は、胴部の貝殻条痕文の他に口縁部の横位貝殻刺突文もナデ消されている。102は、口縁部に横位の貝殻刺突文を施し、部分的に6条になっている。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文が施されている。103～105は、胴部の貝殻条痕文が縦位に施されているものである。いずれもD-7区に出土している。105は、口縁部がやや肥厚して見える。

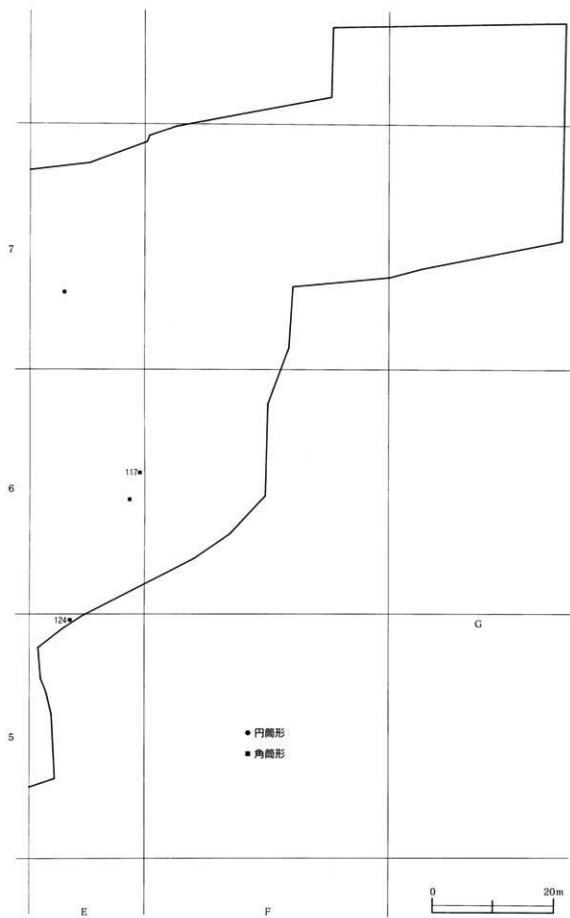
106～135は角筒形の器形を呈する。いわゆる口縁部上面観がレモン形を呈するものは見られなかった。106は口縁部に横位の貝殻刺突文を4条めぐり、胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる。貝殻刺突文は縦位間に斜位の貝殻刺突文を施すことで菱形文を呈している。内面は工具ケズリである。108も106と同様の施文パターンである。口縁部内面にミガキ痕が観察される。110は胴部の貝殻条痕文の施文がやや粗で、口縁部が内傾している。111は太めの貝殻条痕文が施されているが、風化が激しく詳細は不明である。113は口縁部下位に未貫通の補修孔が見られる。内面調整は胴部でケズリ痕が見られ、口縁部ではミガキ痕が観察される。116・119～121は地文としての貝殻条痕文がはっきりとしない。125も貝殻条痕文が見られず、胴部では縦方向のナデが、口縁部では横方向のナデが見られる。133は角筒形に分類したが、はつき



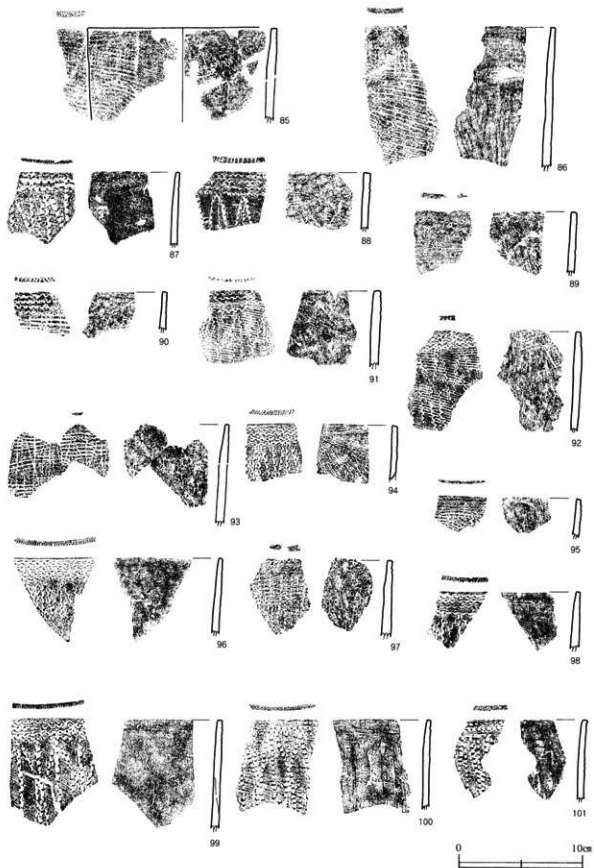
第19圖 3c類土器出土状況圖



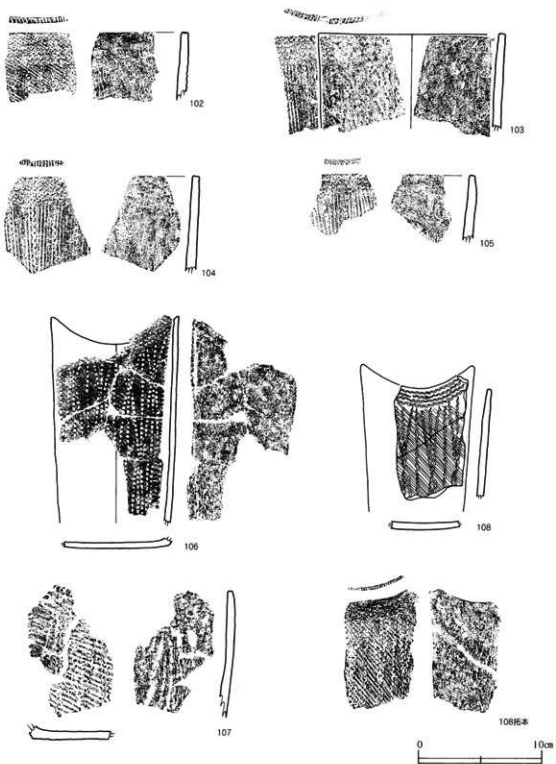
第20图 3c類土器出土状況分割図(1)



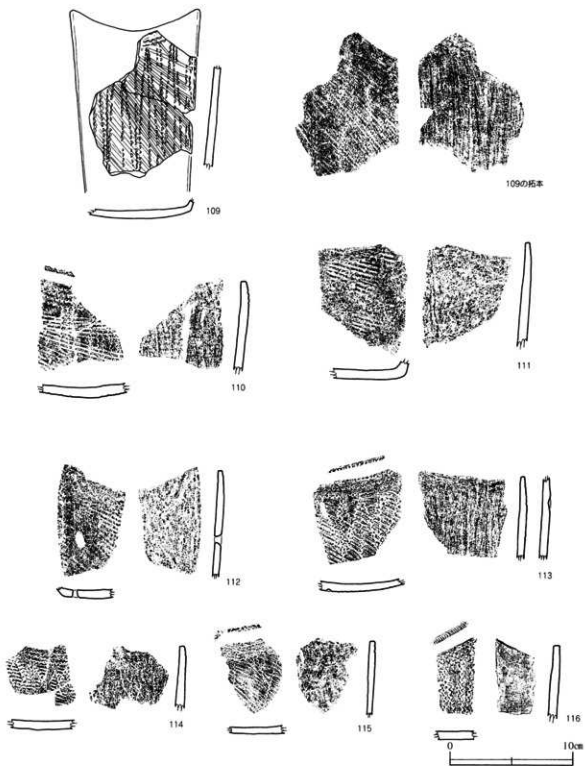
第21図 3c類土器出土状況分割図(2)



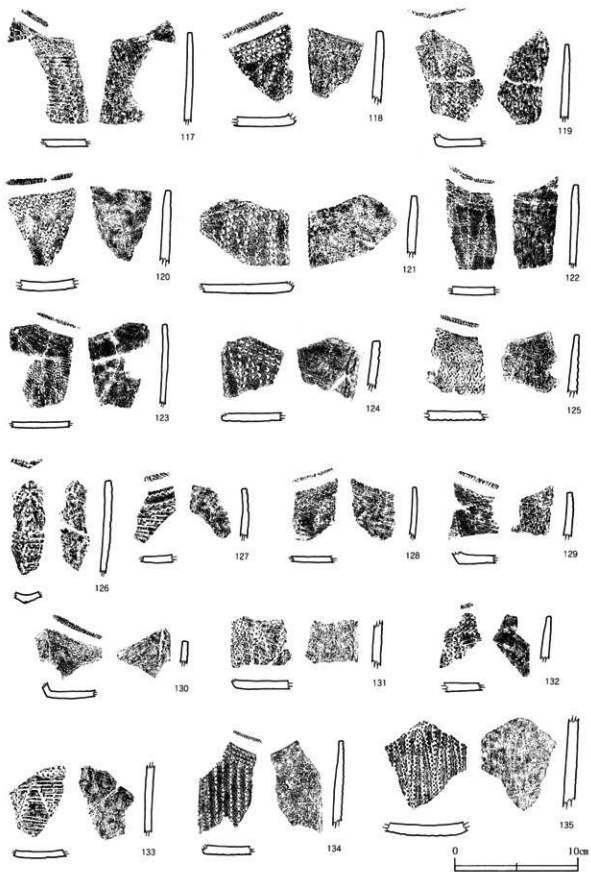
第22図 3c類土器(1)



第23圖 3c類土器(2)



第24図 3c類土器(3)



第25図 3c類土器(4)

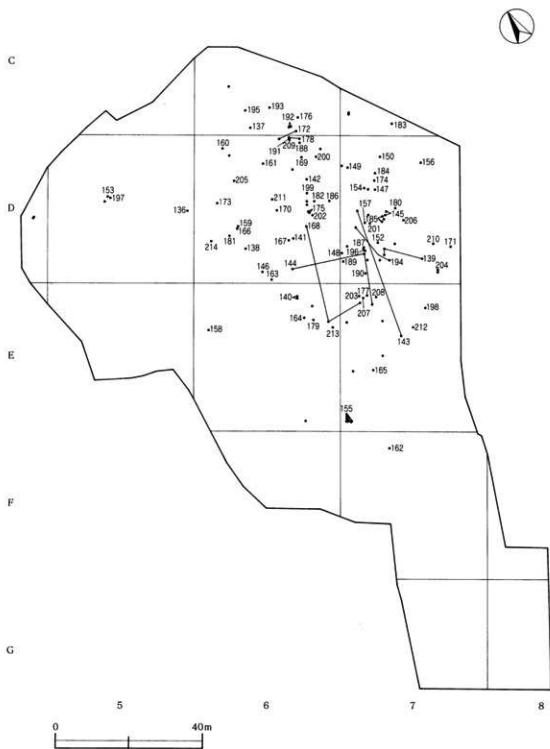
りとはせずに円筒形である可能性も考えられる。134は浅い貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文のみを施している。135は縦位の貝殻条痕文をナデ消し貝殻刺突文を施文している。

3d類 (第29図136～第35図214)

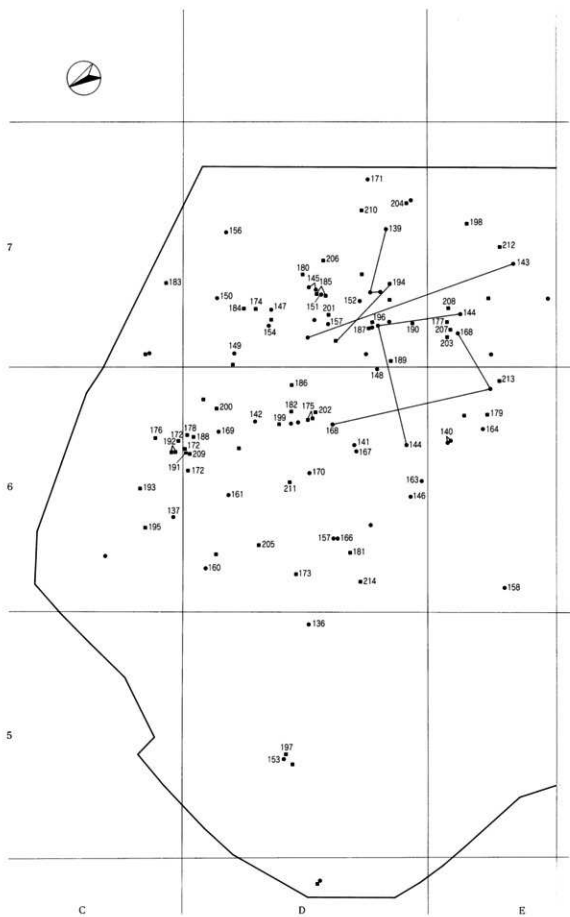
3d類は、基本的な文様構成や内面調整は3c類と同様であるが、粘土紐貼付文が施されるものである。粘土紐貼付文としたものは、粘土紐を貼り付けその周辺を櫛状工具ないし貝殻、あるいはナデにより接着するものである。断面観は、中央が膨らむものや上半部が膨らむものもあり、後者は3e類のクサビ形貼付文に近い。

分布は、全面調査区のF-7区以北に広く分布している。出土量も3e類と共に多い。確認できた総出土点数は124点である。

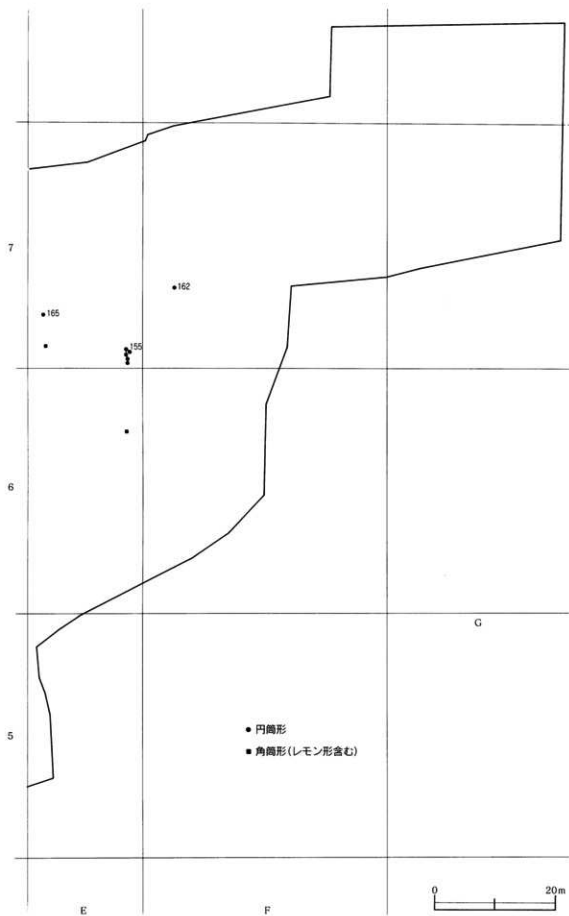
136～171は円筒形の器形を呈する。136はやや小型の土器である。口縁部に横位の貝殻刺突文をめぐらせ、胴部には斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が重ねられている。さらに、この上やや太めの粘土紐が3段施されている。粘土紐の接合は脆く、部分的に剥落している。なお、胴部の貝殻条痕文は2本1組の縦列間に斜位の貝殻刺突文を施しており、施文は他の資料と比べてやや粗い感じである。137の粘土紐貼付文は、側面を貝殻刺突文によって貼り付けられている。胎土に雲母を含む。138は胴部の貝殻条痕文をややナデ消した後に貝殻刺突文を施している。139の粘土紐貼付文は斜めに貼付されている。140はやや大型の土器である。141は胴部の貝殻条痕文が縦位に近い。また、貼付文は溝を彫り込んで貼り付けている。内面調整にはケズリが見られ、口縁部ではミガキが施されている。141～144の胴部に見られる貝殻条痕文は横位に近い。貼付文は縦位の貝殻刺突文の上を意識して貼り付けている。143の口縁部文様は横位の貝殻刺突文で反時計回りに施文されている。なお、胎土に雲母を多く含んでいる。144は口縁部がやや反している。胎土にはカクセン石が見られる。146は貝殻条痕文をナデ消しやや密に貝殻刺突文を施している。この貝殻刺突文は密接化しているが、縦位の貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文が施されている。なお、口縁部がやや内傾している。147は141と同様に貼付文を貼り付ける手法として器面に浅いU字状の溝を彫り込んでいる。149は貝殻条痕文がナデ消されているが浅く残っている。155は口縁部が直直し口唇部は平坦である。文様は、口唇部に刻みを施し口縁部には貝殻刺突文が3条めぐり。これらは文様の切り合いから、左一右へ反時計回りに施文されている。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文が施され、その間に斜位の貝殻刺突文は見られない。この縦位の貝殻刺突文は上から下へ施文されている。貼付文は、紐状を呈し外周を櫛状工具で刺突されて貼付されている。なお、口縁部には横方向のナデが見られ、胴部の貝殻条痕文施文後に口縁部周辺をナデ消して横位の貝殻刺突文を施している。その後に、胴部の貝殻刺突文が施文されており、施文工程のわかる好資料である。156は口縁部の横位貝殻刺突文がやや不規則である。また、胴部には補修孔が見られ外面からの縦長擦り切り穿孔である。157～171は胴部上端片である。粘土紐貼付文が見られたためにここに掲載している。ただし、資料によってははっきりとしないものもあり3e類も混入しているかもしれない。158は、胴部の貝殻刺突文が縦位のみのものである。161は縦位の貝殻刺突文が2本1組で施文されている。163・164・166の貼付文は、クサビ形貼付文に近い。また、166は横断面がやや直線的であり角筒形の可能性も考えられる。168～171は方形刺突文を施す



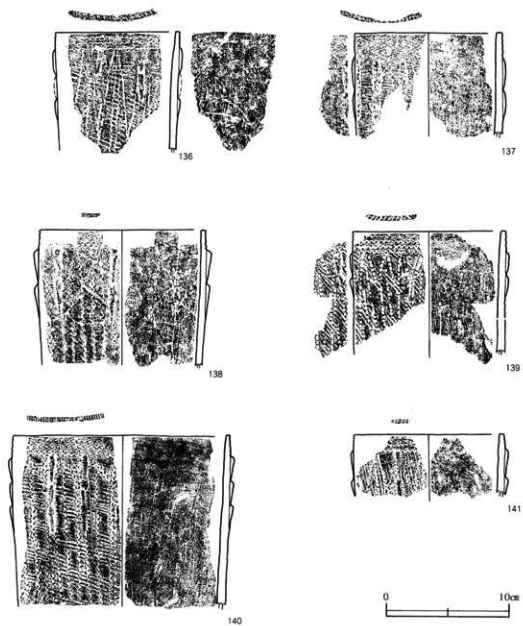
第26图 3d類土器出土状況图



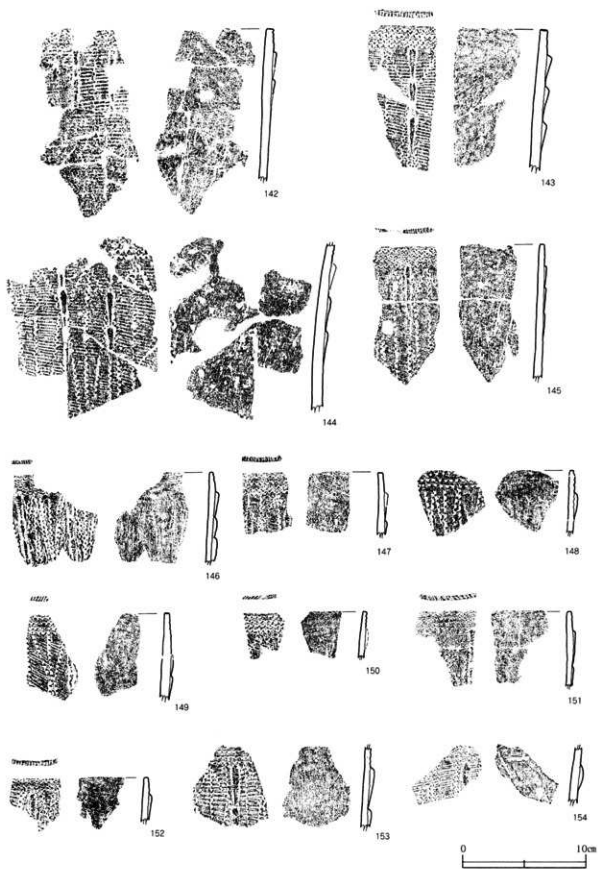
第27图 3d类土器出土状况分割图(1)



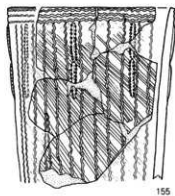
第28図 3d類土器出土状況分割図(2)



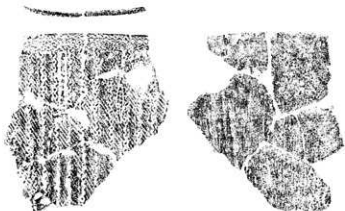
第29図 3d類土器(1)



第30図 3d類土器(2)



155



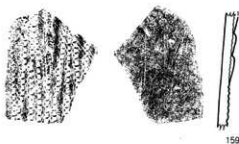
155の拓本



156



157



159



158



160



161



162



163



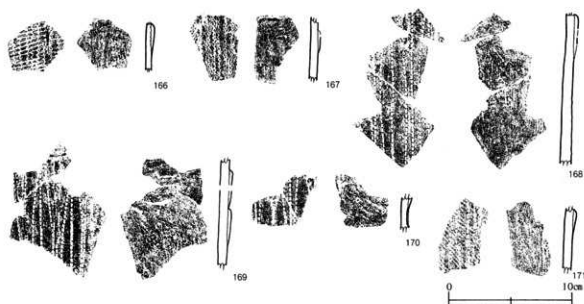
164



165



第31図 3d類土器(3)

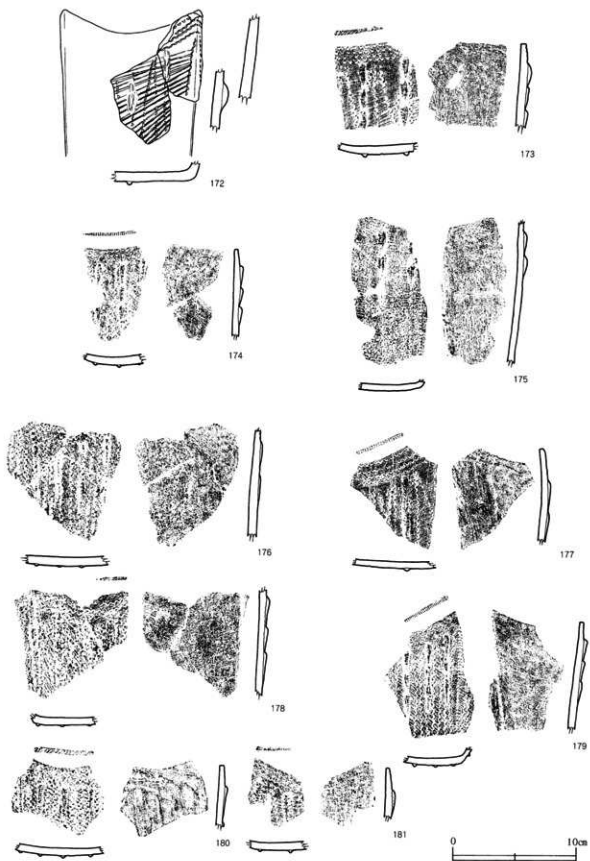


第32図 3 d類土器 (4)

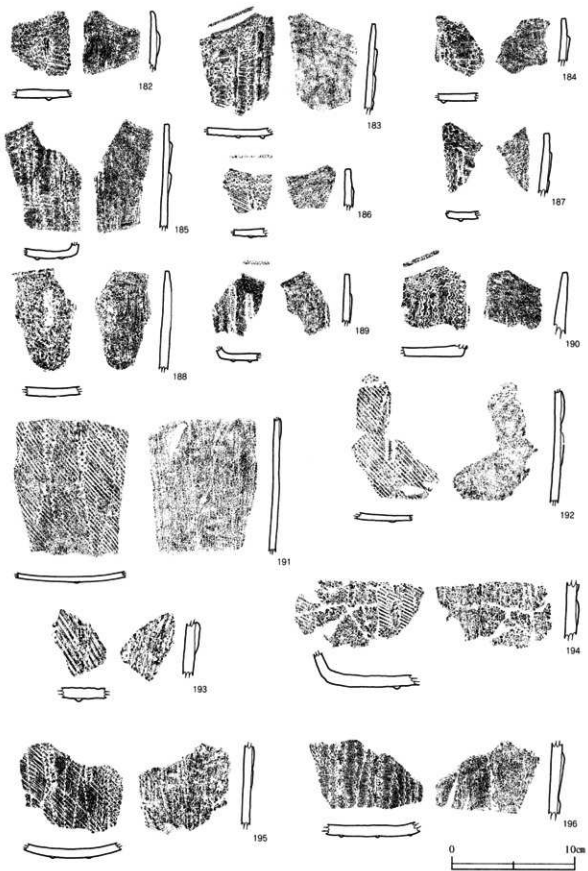
もので、168～170は同一個体かと思われる。168は貝殻条痕文をナデ消した後に方形刺突文が施されている。169は貼付文を貼り付ける前にU字状の溝を器面に彫り込んでいる。

172～214は角筒形である。172は口縁部に横位の貝殻刺突文が4条めぐる。胴部は右上がりの貝殻条痕文が施され、その上に縦位の貝殻刺突文と斜位の貝殻刺突文とが施されている。縦位の貝殻刺突文は1面に対して中央と、中央と角部間にそれぞれ1列ずつの3列が施されていたと想定される。なお、この縦位貝殻刺突文の上に貼付文が施されていることや、縦位貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文が施されていることなどから、面を分割して施文を整えているものと思われる。なお、貼付文は太めの粘土紐状であり、つまみ上げるように貼付し外周をナデによって接着している。173は、口唇部に刻目を施し口縁部には横位の貝殻刺突文が4条めぐる。胴部は、右上がりの貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が重ねられ、さらに粘土紐貼付文が施されている。内面調整は工具ケズリ及びびミガキ痕が見られる。横断面観がレモン形に近く感じられたが、はっきりとしなかったためにここに掲載してある。176は風化が激しい。貼付文は、縦位の貝殻刺突文の上に施されている。177は貝殻条痕文が胴部では縦位に、口縁部では横位にナデ消されている。その後、口縁部には横位の貝殻刺突文が4条、胴部には縦位・斜位の貝殻刺突文と粘土紐貼付文が施される。183は炭化物の付着が見られる。なお、貼付文は貼り付ける際に器面にU字状の溝を彫り込んで貼付されている。184も内面に炭化物が付着している。

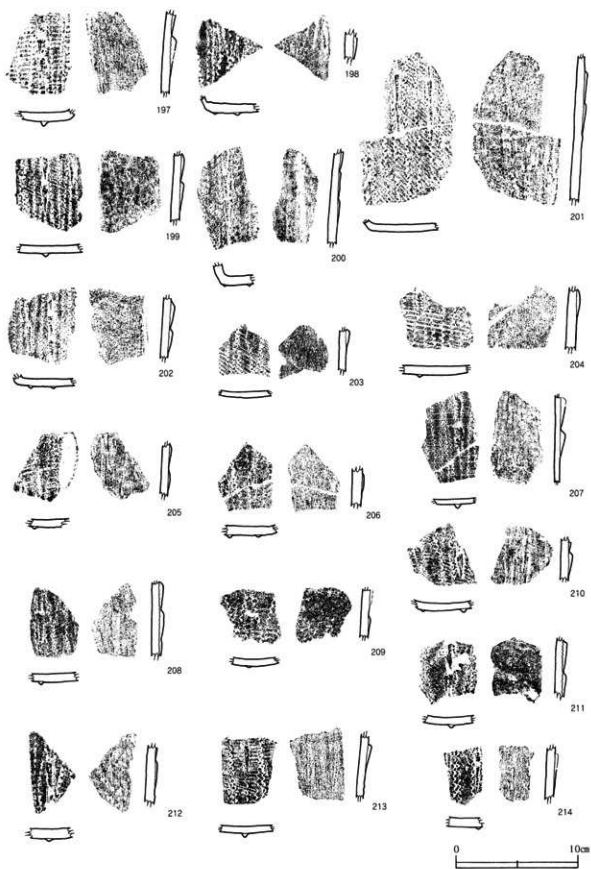
191～214は胴部上端片である。粘土紐貼付文もしくはその可能性があるものをここに掲載した。191は貝殻条痕文の上に間隔の広い貝殻刺突文をX字状に施文し、中央に貼付文を貼り付けている。風化が激しいが、器壁は比較的薄い。192も191と同様の施文パターンを有し、貼付文は2段施されている。193はやや太めの貝殻条痕文が見られ、貼付文は幅5mmと太めである。194は、部分的に貼付文に貝殻刺突文が施されている。197の貝殻刺突文は横位に近い。200は、角部片である。貼付文は片面のみに施されている。205は、胎土中に黒曜石の小片を含んでいる。



第33図 3d類土器(5)



第34図 3d類土器(6)



第35圖 3 d類土器 (7)

208は貝殻条痕文を施した後に貝殻条痕文を縦位にナデ消し貝殻刺突文を施している。210も208と同様に貝殻条痕文をナデ消している。

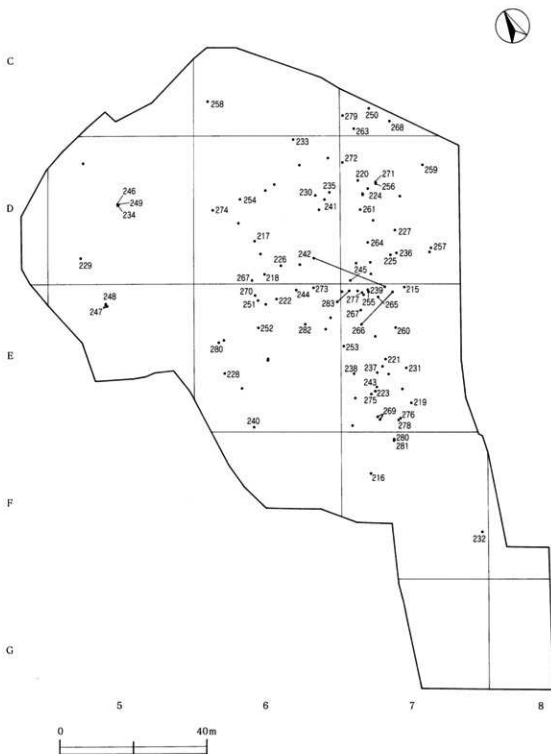
3e類 (第37図215～第43図284)

d類の粘土紐貼付文が、上面を面取りすることでクサビ形を呈するものである。口縁部が外反する資料も見られる。内面調整は、口縁部に関して大半のものがミガキ手法を用いている。確認できた総出土点数は107点である。

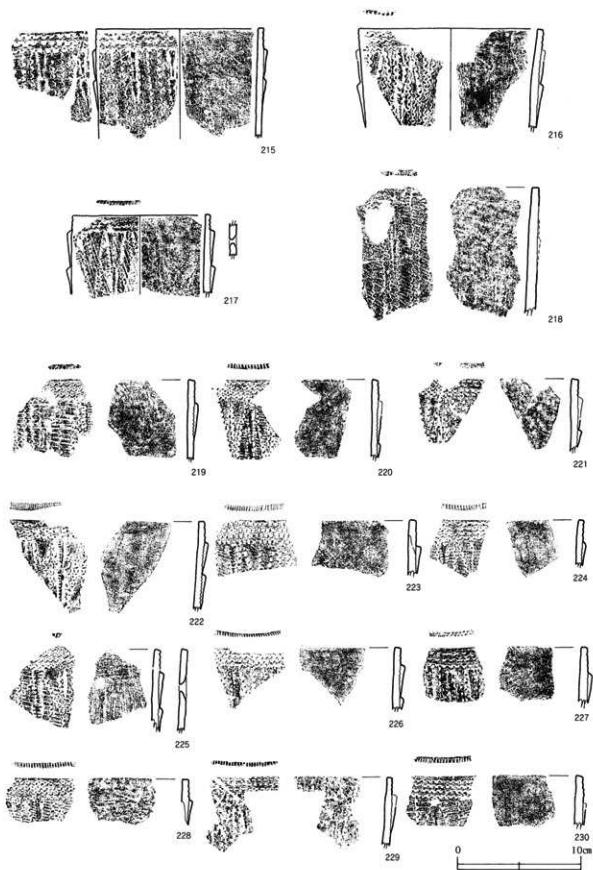
215～238は円筒形の器形を呈する。215は風化が激しいが、口縁部に横位の貝殻刺突文を3つめぐらせ胴部は縦位の貝殻刺突文を施す。その上からクサビ形貼付文を貼り付けている。216のクサビ形貼付文は側面を貝殻で刺突している。217の貝殻条痕文は縦位に近い斜位で、補修孔が観察される。222は口縁部に横位の貝殻刺突文が3条めぐる。胴部は貝殻条痕文ではなく、横方向の調整痕が見られる。225には補修孔が見られ、外面からの縦長擦り切り穿孔である。227は口縁部の横位の貝殻刺突文やクサビ形貼付文が水平に施文されておらず、円筒形に分類したが角筒形になる可能性もある。228は粘土接合ラインで剥離している。これで見ると、粘土の接合は接合部を細くすることで接合面を広く取り、より接着するようにしていたことが考えられる。230は貼付文の上端が欠損しており厳密にクサビ形を呈するかは不明である。232～237は方形刺突文が施される土器である。232は口縁部が直行する。口縁部には方形刺突文が横位に4条施され、胴部は斜位の貝殻条痕文の上に縦位と斜位の方形刺突文が施される。クサビ形貼付文は縦位の方形刺突文の上に貼り付けられる。234は口縁部がやや外反する。口縁部には方形刺突文が横位に4条めぐる。胴部は、貝殻条痕文の上に縦位と斜位の方形刺突文が施される。235は胴部の貝殻条痕文を入念にナデ消し、その後縦位の方形刺突文が施される。236は口縁部には貝殻刺突文を胴部には方形刺突文をそれぞれ用いている。

239～252は胴部上端片である。器面にクサビ形貼付文もしくはその可能性が考えられるものについてここに掲載した。239の内面調整は、縦位のケズリの後斜位のケズリを部分的に施している。このような調整痕は角筒形に多く見られ、円筒形では珍しい。240は貝殻条痕文がやや粗に施されている。241は横位に近い貝殻条痕文が施され、貝殻刺突文は肋が大きい貝殻を用いている。242は2点が接合したもので、接合の距離は約20mである。246～252は方形刺突文が施されるものである。246～249は同一個体と思われる。略横位の貝殻条痕文の上に縦位と斜位の方形刺突文が施される。クサビ形貼付文は縦位の貝殻刺突文上には施されず、斜位貝殻刺突文間に施されている。

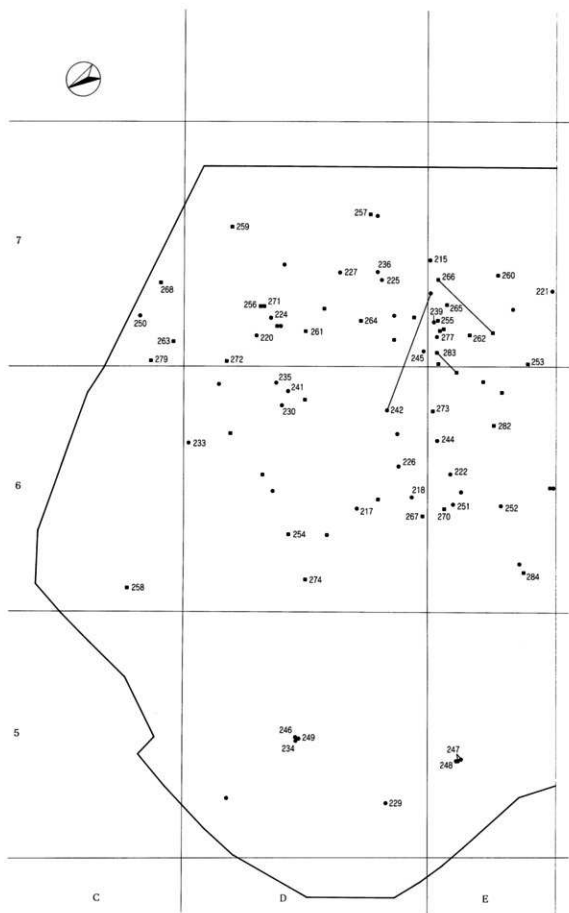
253～282は角筒形の器形を呈する。253はクサビ形貼付文が残存しているだけでも4列見られ、1面あたり7列程度施されていた可能性が考えられる。254は面によって器壁の厚さが違っている。



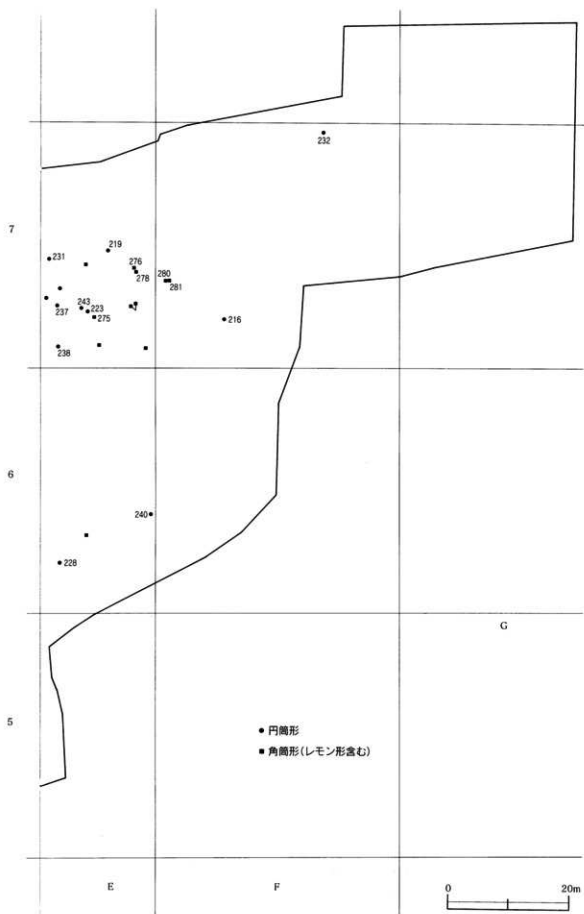
第36図 3e類土器出土状況図



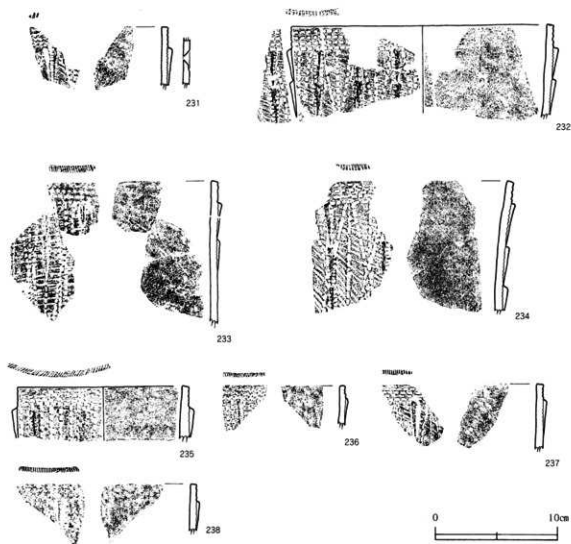
第37図 3e類土器(1)



第38图 3 ● 類土器出土状況分割図(1)



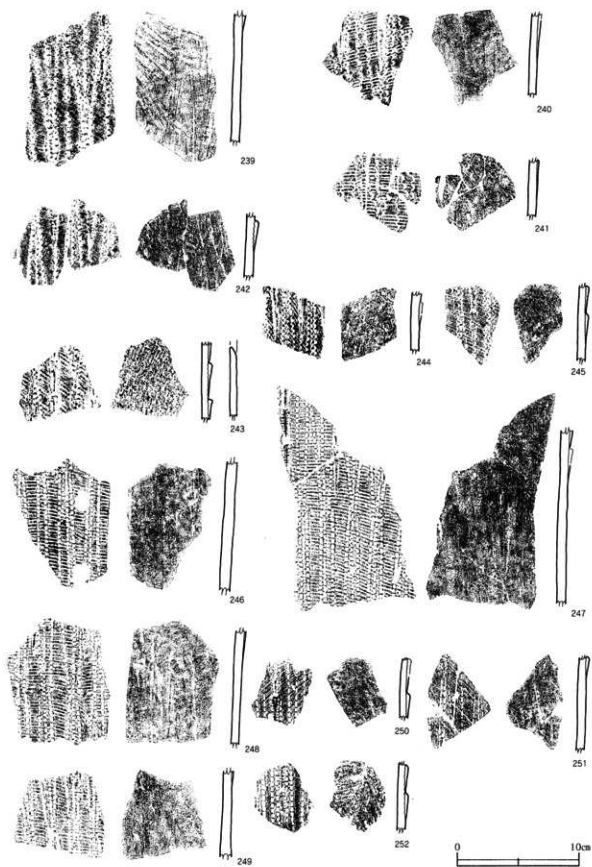
第39図 3e類土器出土状況分割図(2)



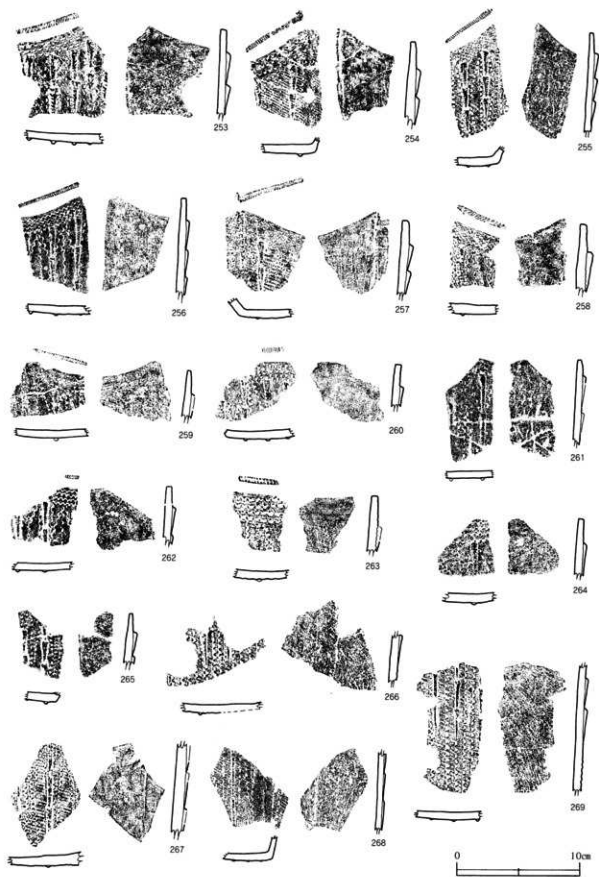
第40図 3㉓類土器(2)

257は角部が他の資料と比べて開き気味である。259の貼付文は、粘土紐の可能性も考えられる。266～276は胴部上端片である。クサビ形貼付文が見られることからここに掲載した。268は、クサビ形貼付文が片面にのみ施されている。271は貝殻条痕文をナア消し、その後には貝殻刺突文が施されている。277～279・282は方形刺突文を施すものである。278・279・282は口縁部に貝殻刺突文を横位に施し、胴部のみ方形刺突文が施されている。280・281は貝殻刺突文であるが、方形刺突文に近い。283は口縁部は平口縁であるが胴部の横断面の厚さが一定しておらず、レモン形の可能性も考えられる。

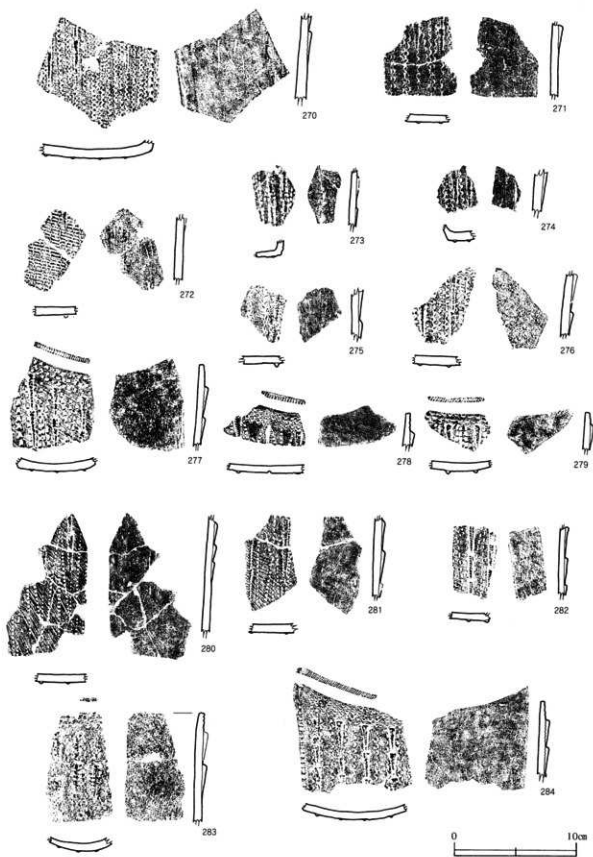
284はレモン形を呈する。口縁部には、貝殻刺突文が横位に4条施される。胴部は斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が施され、その上からクサビ形貼付文が施されている。



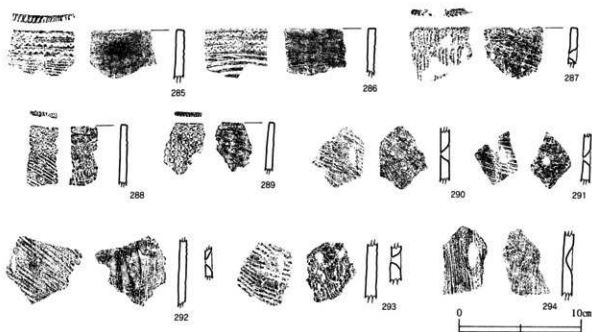
第41圖 3e類土器 (3)



第42図 3e類土器(4)



第43圖 3e類土器(5)



第44図 3 f 類土器

3 f 類 (第44図285～294)

a から e 類に分類できなかった口縁部片・口縁部付近片の中から特徴的なものをピックアップしたものである。

287は口縁部に密で短い縦位の貝殻刺突文が施され、胴部は縦位に貝殻条痕文が施されている。289は口縁部に貝殻刺突文が2条施されている。290～294は補修孔が見られる口縁部付近片である。いずれも外面からの縦長擦り切り穿孔によると考えられる。294は未貫通資料である。外面からの擦り切りを施している。

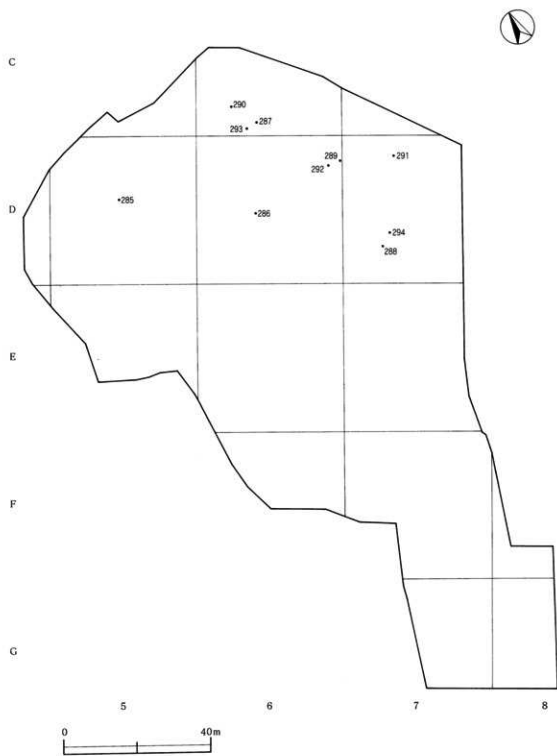
3 類の胴部 (第48図295～第68図570)

3 類土器の胴部片を一括した。大半の資料が内面調整は縦位である。色調や胎土等は口縁部片と大差ない。

295～417は円筒形の器形を有する。

295～308は、貝殻条痕文が横位に近く、貝殻刺突文の間隔が広いものである。3 a 類もしくは3 b 類に該当すると思われる。296の胎土中には黒曜石の小片が混入されている。

309～347は先の資料より貝殻刺突文の間隔がやや狭くなったものである。やはり3 a 類～3 c 類のいずれかに該当するものと思われる。309・314は横断面の厚さが一定していない。316は風化が激しいが、内面には入念なケズリ痕が観察できる。333～338・343はX字状を呈する貝殻刺突文である。貝殻条痕文はややシャープな感じである。



第45図 3 f 類土器出土状況図

348～393は貝殻刺突文がやや密になる胴部片である。3c類～3e類のいずれかに該当するものと思われるが、はっきりとはしない。353・354は同一個体と思われる。2本1組の貝殻刺突文間にさらに縦位の貝殻刺突文を施し、その間に斜位の貝殻刺突文を施し菱形を呈している。内面調整は入念なケズリ痕が見られる。353は横断面の厚さが一定していない。369は、縦位に近い貝殻条痕文が施されている。

394～397は密接な貝殻刺突文である。

398～411は方形刺突文を施す胴部片である。

方形刺突文は、菱形文を意識しているものも見られるが、限りなく縦位に近いものが大半を占める。401と407は同一個体化と思われる。409の内面調整はケズリ痕が見られ、工具の当たり痕が認められる。当たり痕は直線的であり、ハマグリやアサリなどの貝殻縁を用いた場合に生じる痕跡に類似している。412～417は縦位の貝殻条痕文を施すものである。413は、横断面の厚さが一定していない。417は、内面に炭化物が付着している。

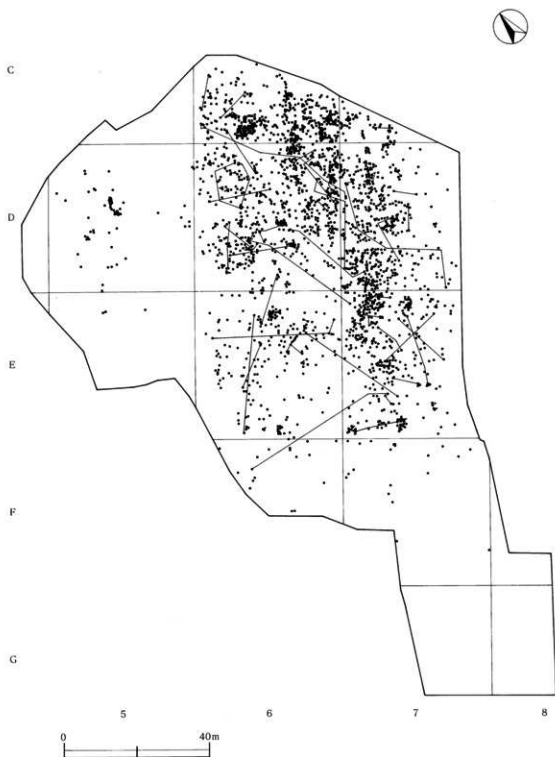
418～567は角筒形の胴部片である。

色調は赤茶褐色ないし黄茶褐色を呈する資料が多く、内面調整は縦位のケズリ痕が見られるものが多い。角部に関しては、横位の貝殻刺突文が短く施され、内面調整は角部へ向かうような調整痕が見られることから、角部を意識しているようである。

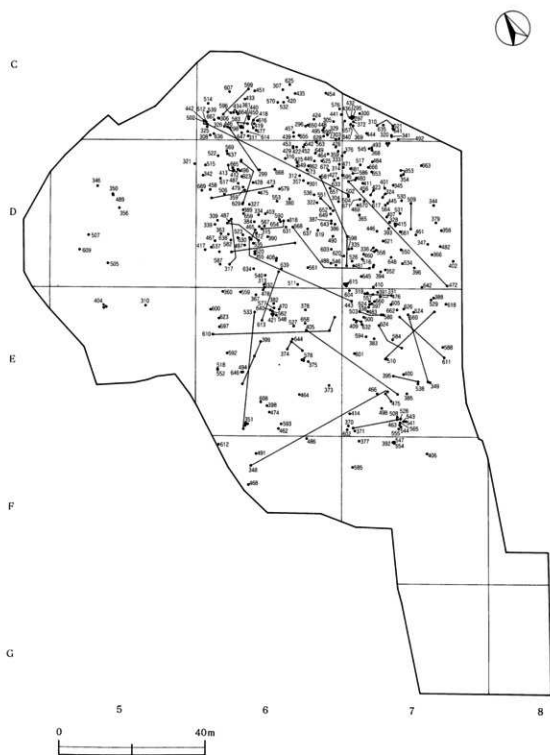
418～461は貝殻刺突文の間隔がやや広いもので、3a～3c類に属するものと思われるが、一部3d類の胴部片も混入している可能性も考えられ、厳密に区分できなかった。418・419は、横位に近い貝殻条痕文の上に2本1組の縦位の貝殻刺突文を3列施し、その間に斜位の貝殻刺突文を施して菱形文を呈しているものである。これらの特徴から、48と同一個体になる可能性が高い。422は角部近くに補修孔が見られる。429・431は角部が外へ開き気味である。430は、面によって器壁の厚さに違いが見られる。453は斜位のシャープな貝殻条痕文の上に間隔の広い貝殻刺突文を施すことでX字状を呈している。角部は外へ開き、外面では角を形成しているが内面では丸味を帯びている。

462～567は3d・3e類に属するものと思われる。

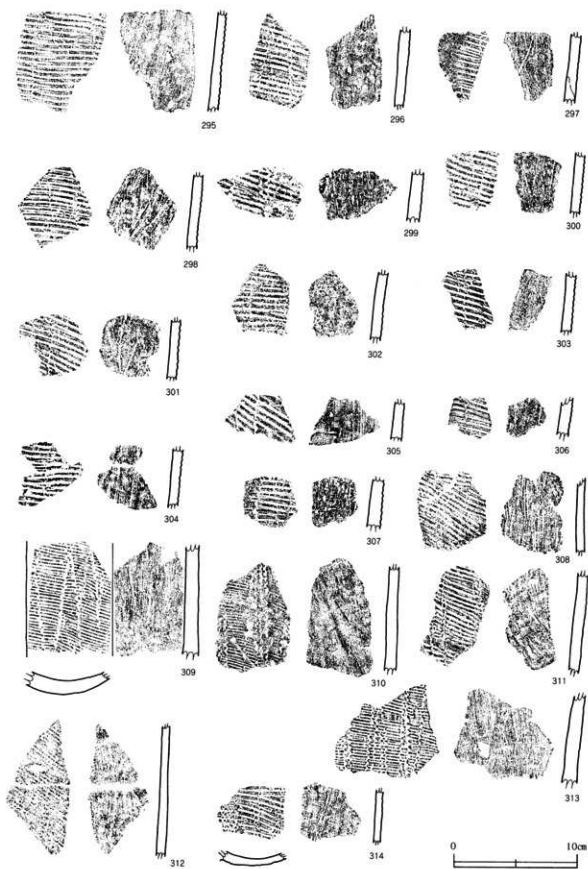
463は内面に入念なケズリ痕が観察される。470は、斜位の貝殻条痕文の上に密接した縦位の貝殻刺突文が施されている。473は縦位の貝殻刺突文が2本1組に施されているが、整然さに欠ける。482の角部形成は、外面では稜を形成するのに対し内面ではやや丸味を呈している。518は角部が開き気味である。537・538は貝殻条痕文が見られない。540は貝殻条痕文が見られず、密接した貝殻刺突文が施されている。541～558は方形刺突文を施す土器である。544は明瞭な角部を形成せず内外面ともに丸味を呈している。このような丸味は、レモン形に多く見られる特



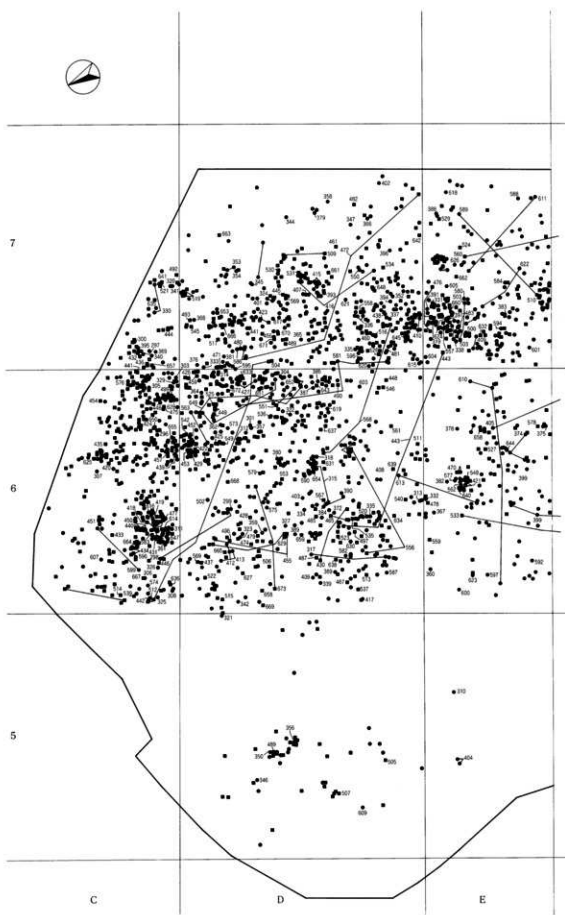
第46図 3類土器胴部・底部片出土状況図



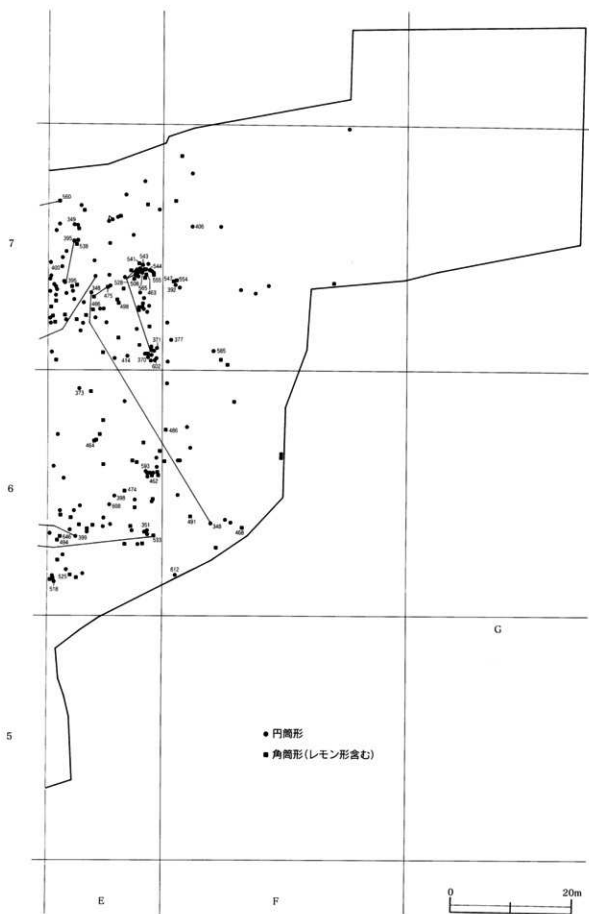
第47図 3類土器胴部・底部片出土状況図(掲載分)



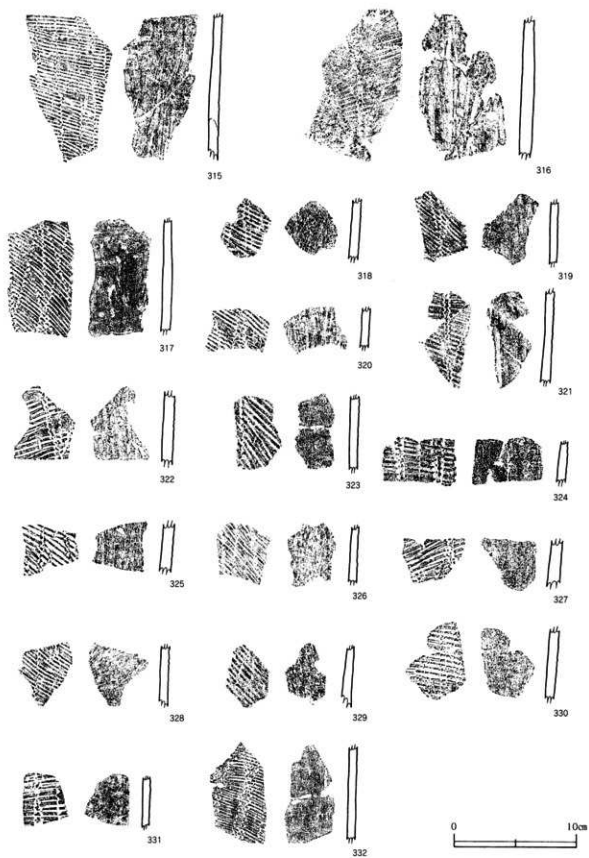
第48図 3類土器胴部(1)



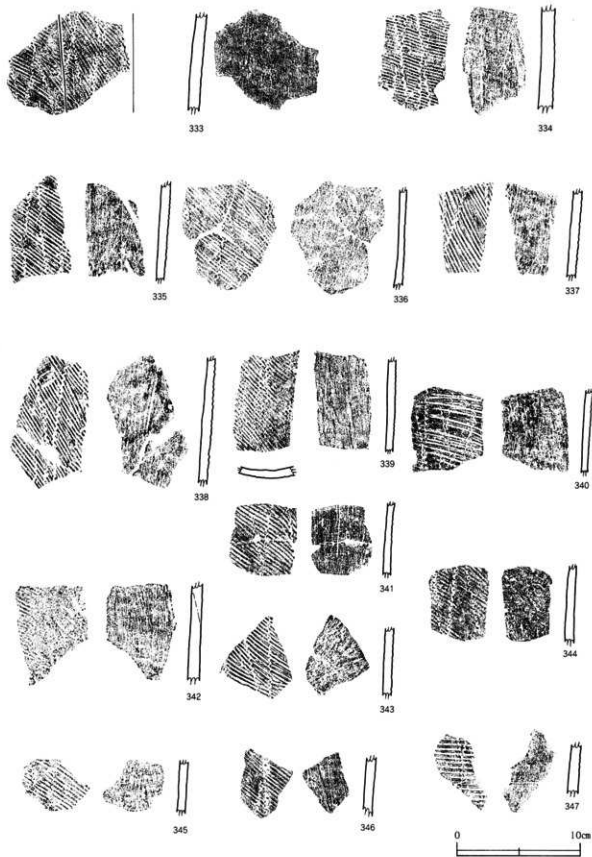
第49圖 3類土器胴部・底部片出土状況分割圖(1)



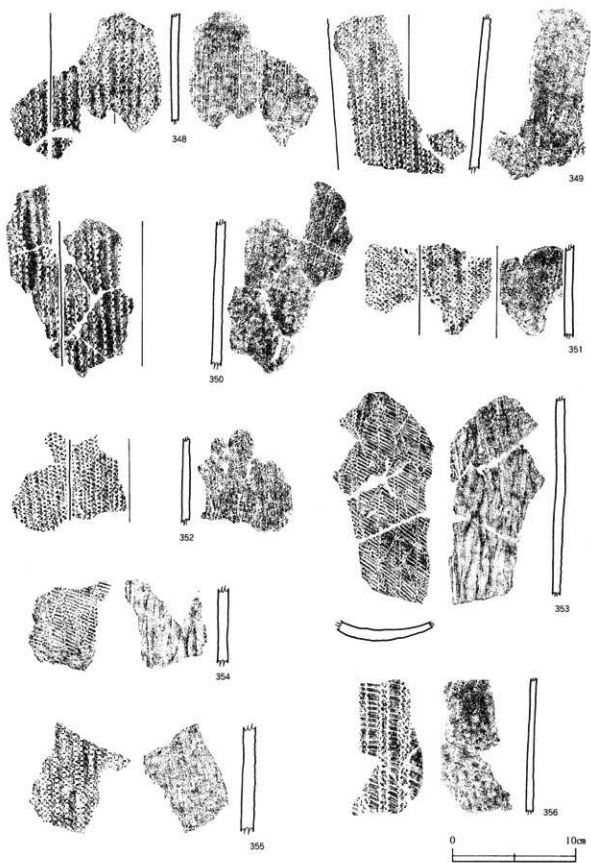
第50図 3類土器胴部・底部片出土状況分割図(2)



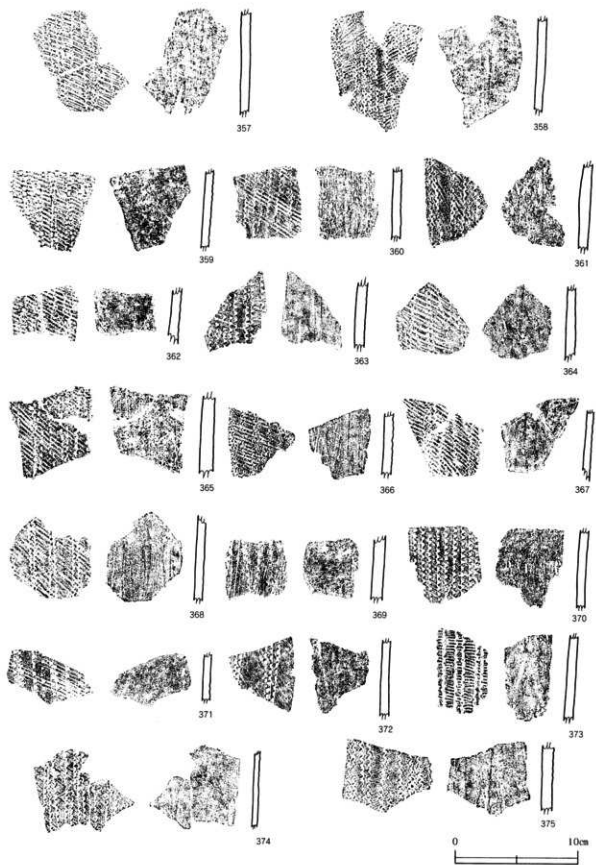
第51図 3類土器胴部(2)



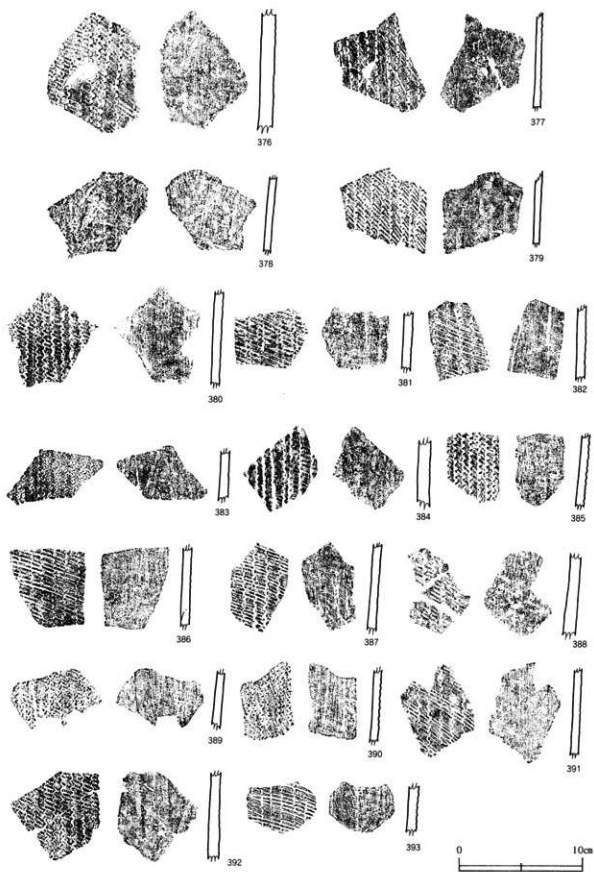
第52図 3類土器胴部(3)



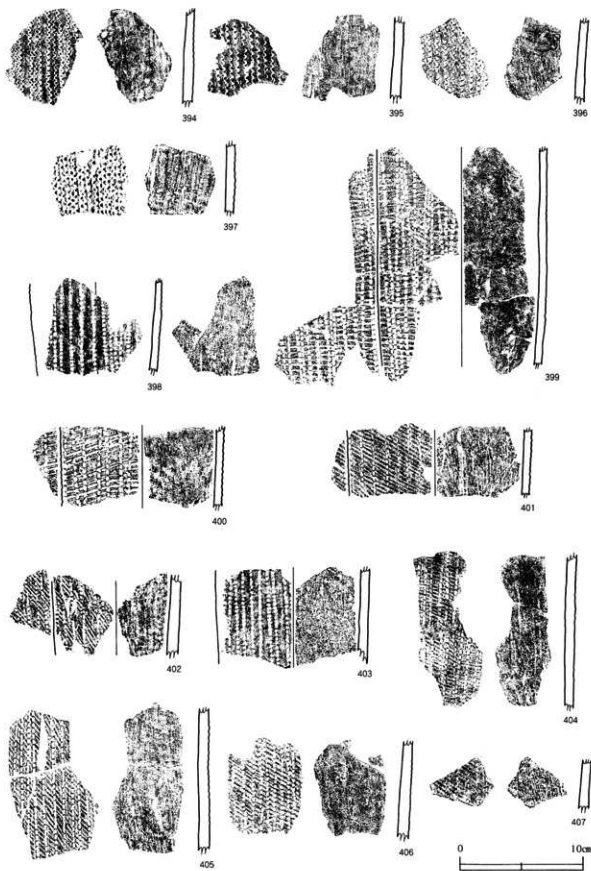
第53図 3類土器胴部(4)



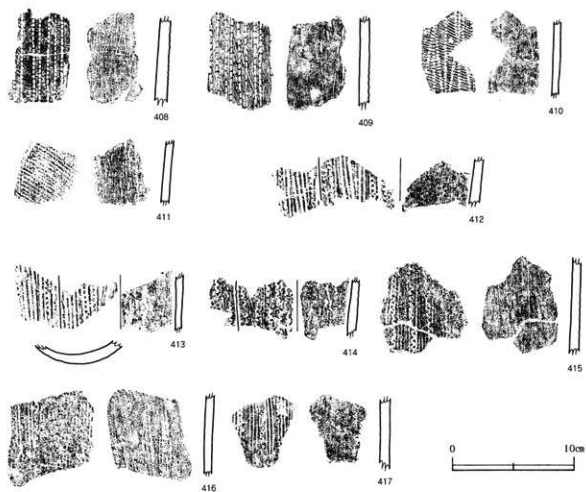
第54図 3類土器胴部 (5)



第55图 3類土器胴部(6)



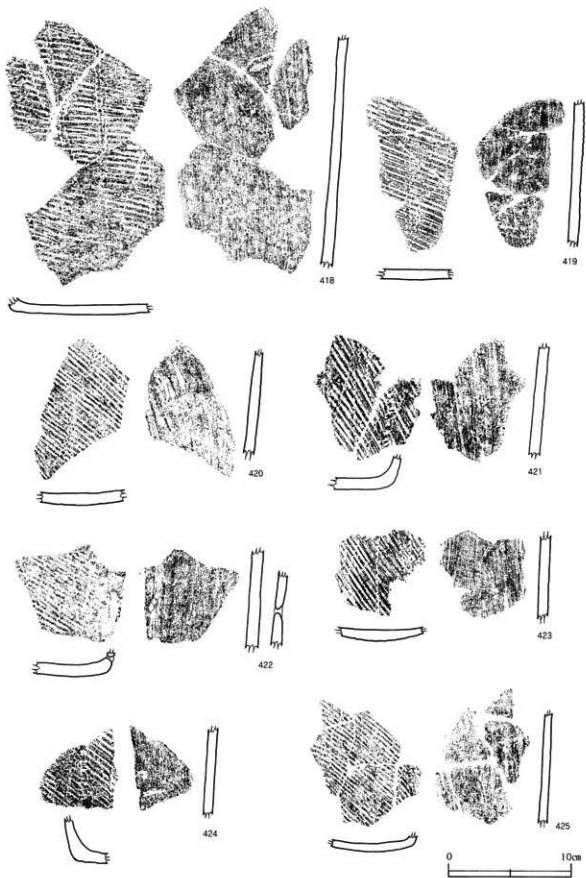
第56図 3類土器胴部 (7)



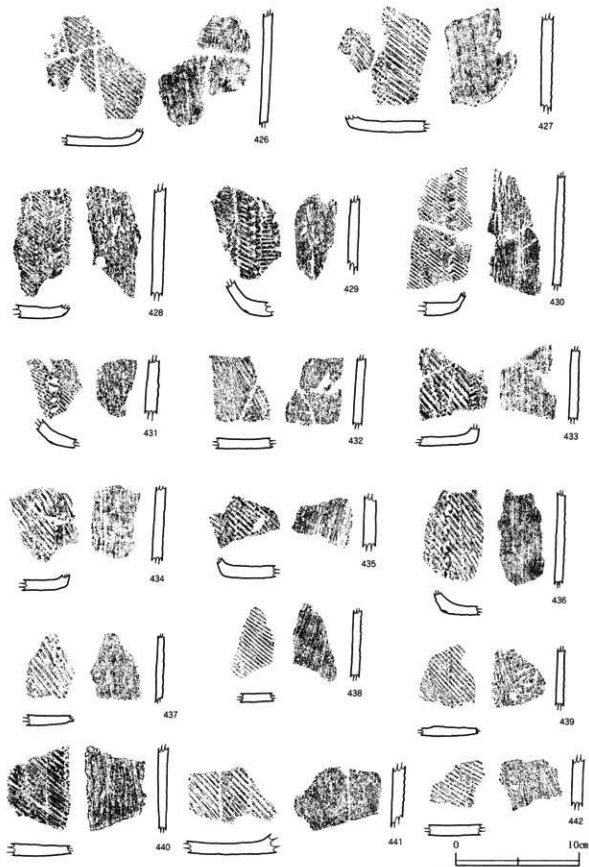
第57図 3類土器胴部(8)

徴であるが、判断できなかったためにここに掲載した。550・553・554は貝殻条痕文が見られない。559・560は縦位の貝殻条痕文を施している。561～567はわずかに貼付文が見られるものである。566は方形刺突文が施されている。

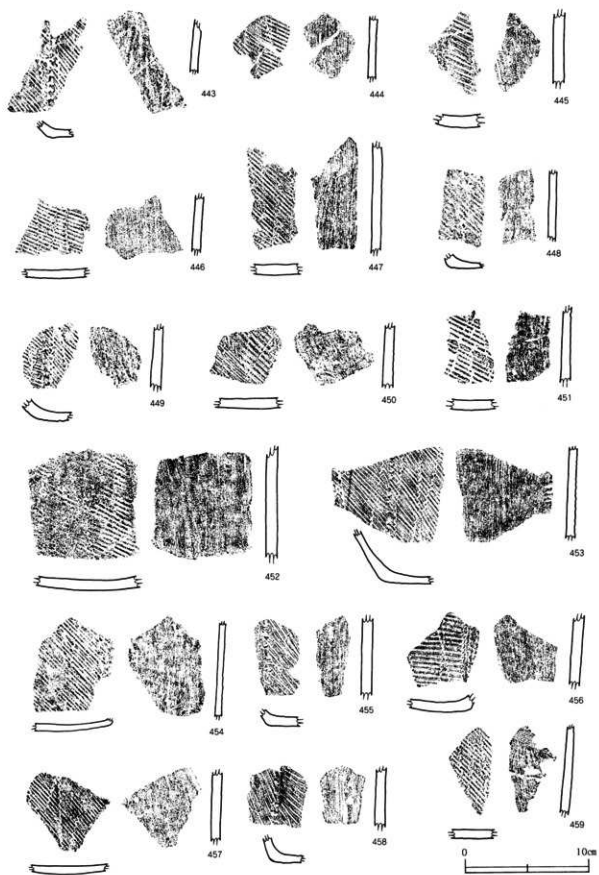
568～570はレモン形の胴部片である。いずれも急な弧状部を有する。568はややシャープな貝殻条痕文を斜位に施し、貝殻刺突文を斜位にX字状に施文している。内面はケズリ痕が観察される。



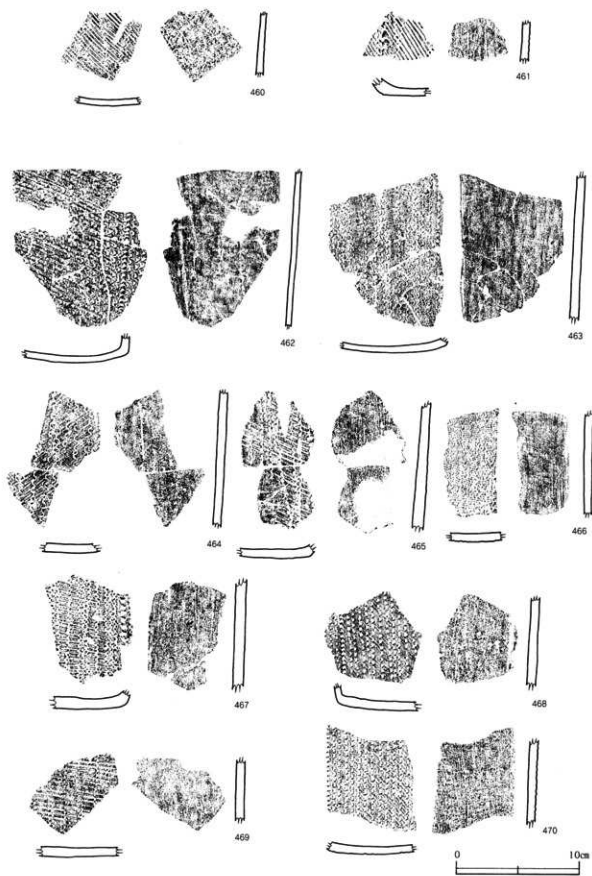
第58図 3類土器胴部(9)



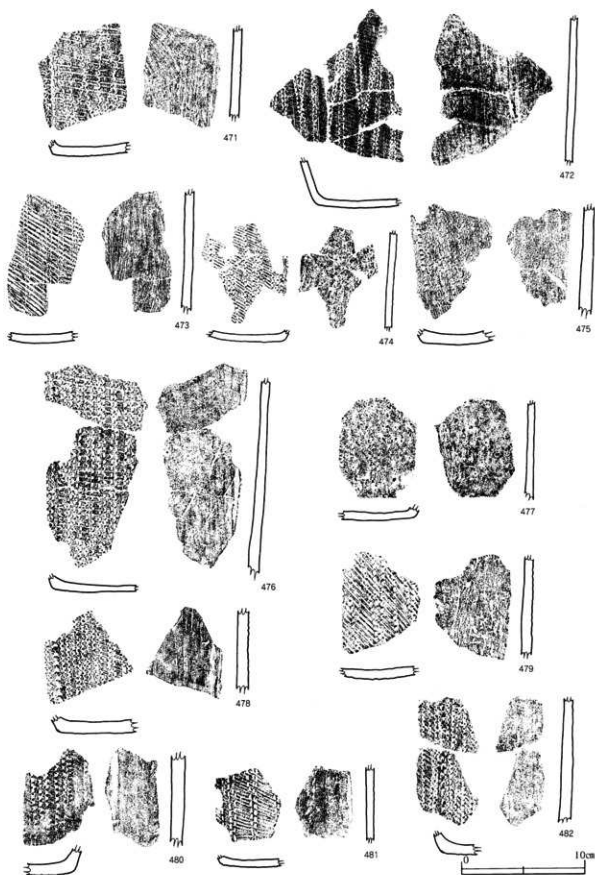
第59圖 3類土器胴部 (10)



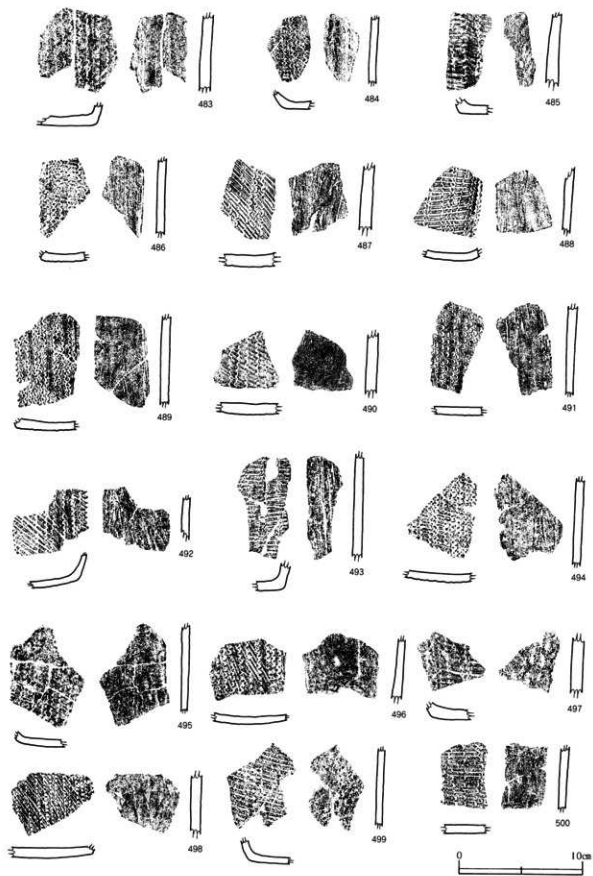
第60図 3類土器胴部 (11)



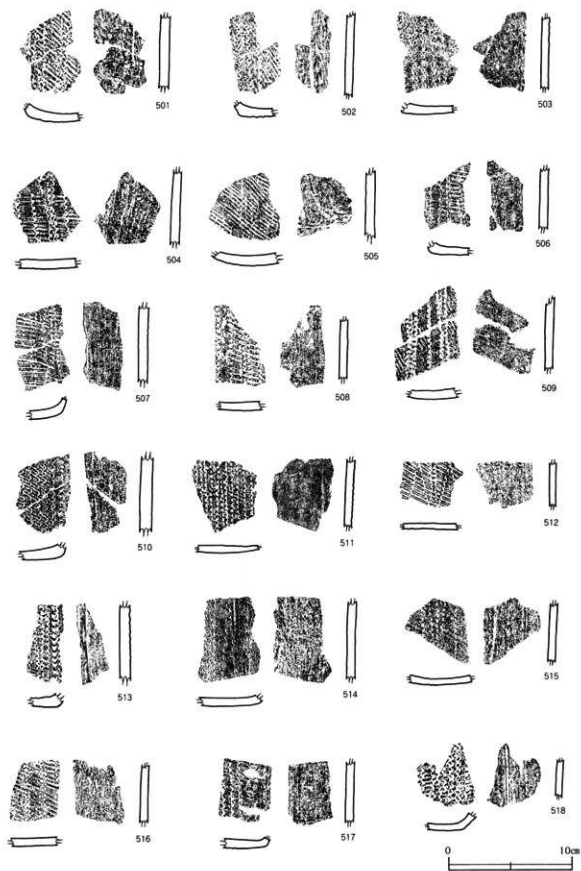
第61圖 3類土器胴部 (12)



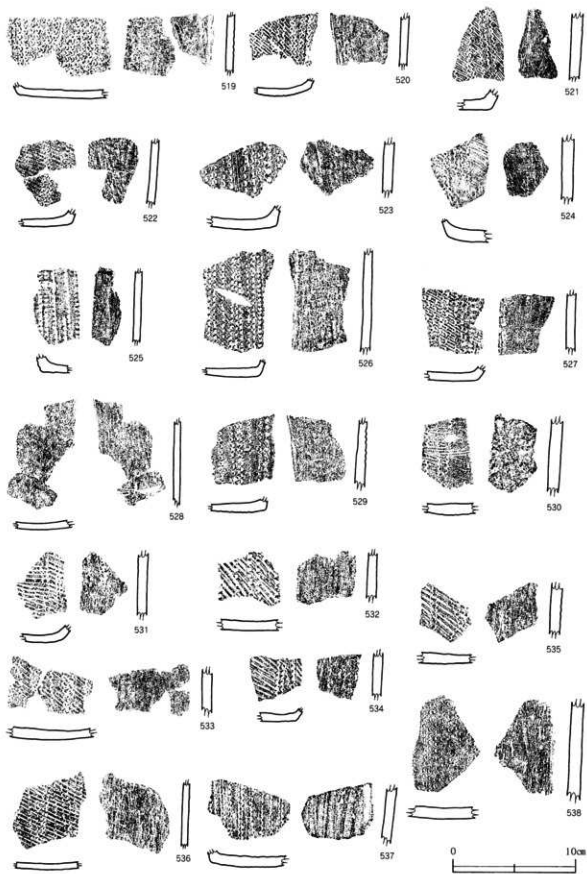
第62図 3類土器胴部 (13)



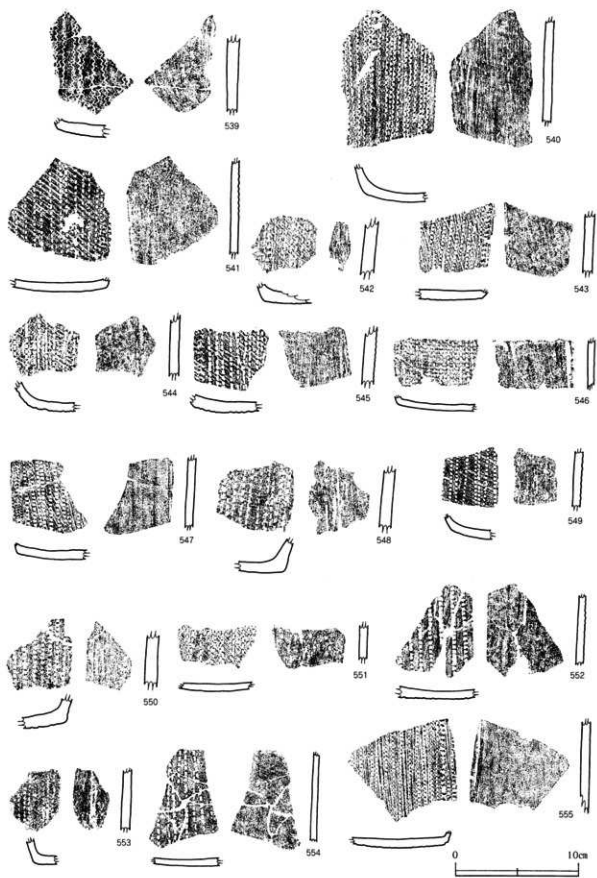
第63図 3類土器胴部 (14)



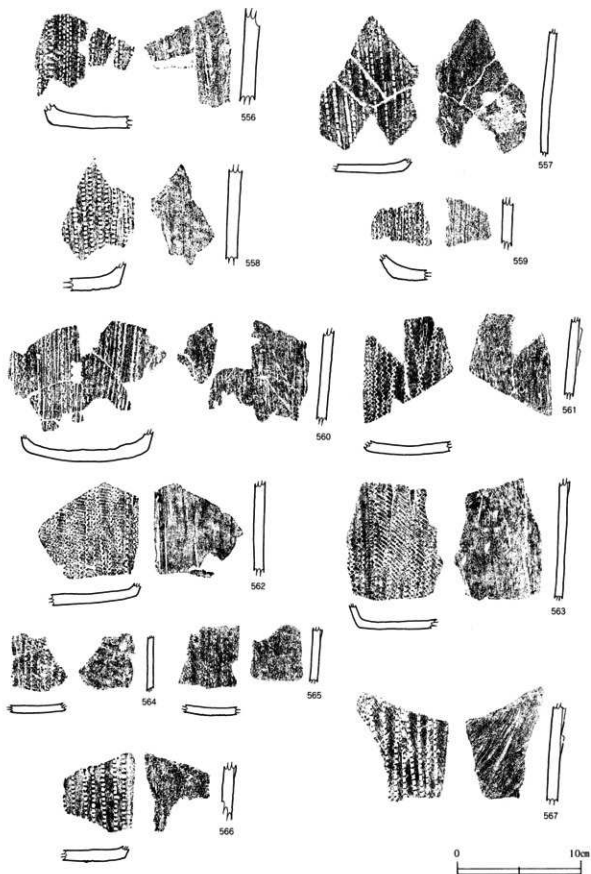
第64図 3類土器胸部 (15)



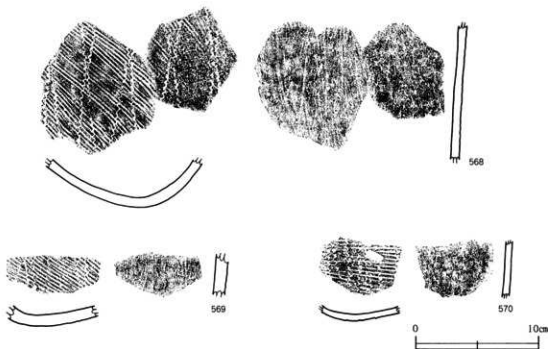
第65図 3類土器胴部 (16)



第66図 3類土器胴部 (17)



第67図 3類土器胴部 (18)



第68図 3類土器胴部 (19)

3類の底部 (第69図571~第79図672)

底部片を一括した。

571~626は円筒形の器形を呈する。

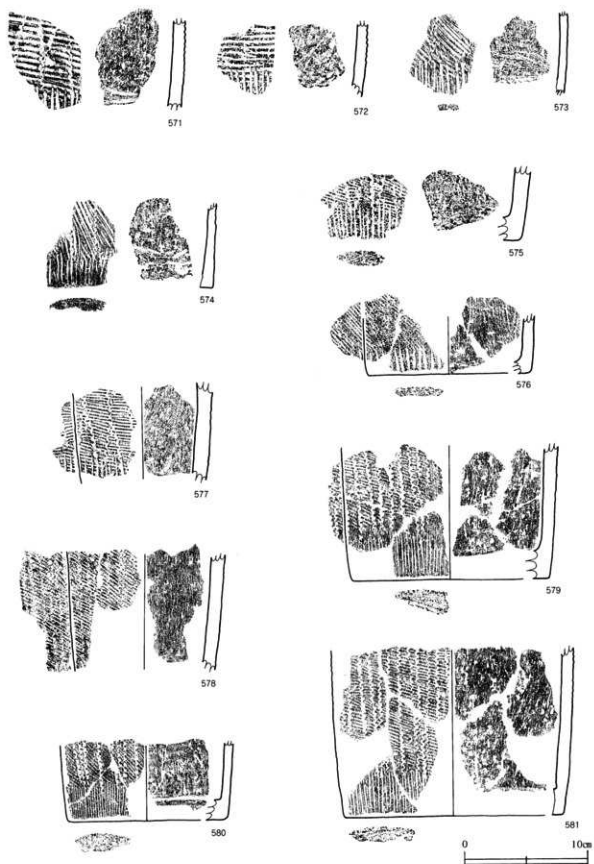
571~577は貝殻刺突文の間隔が広いものである。574は、底盤外周への接手法を採る。577は、胎土中に小軽石を含む。578~591は貝殻刺突文の間隔がやや狭いものである。581・582・585・589は胴部立ち上げについて定盤外周への接手法を採るものである。583は、底部と胴部の器壁の厚さがほぼ同じである。592~594は方形刺突文を施すものである。593は底面に白色付着物が見られる。594は底部外周をケズリ込んでいる。595~626は定盤片である。601・606・611・625の底面には白色付着物が見られ、資料によっては滑らかである。607は、内面の胴部立ち上がりが丸味を帯びており、3類であるか断定できない。615・621は底部内面に放射状の調整痕が見られる。625は、底面に白色付着物が見られる。底面に貝殻条痕文が施されており、1・2類の底部になる可能性も考えられる。

627~664は角筒形の器形を呈する。

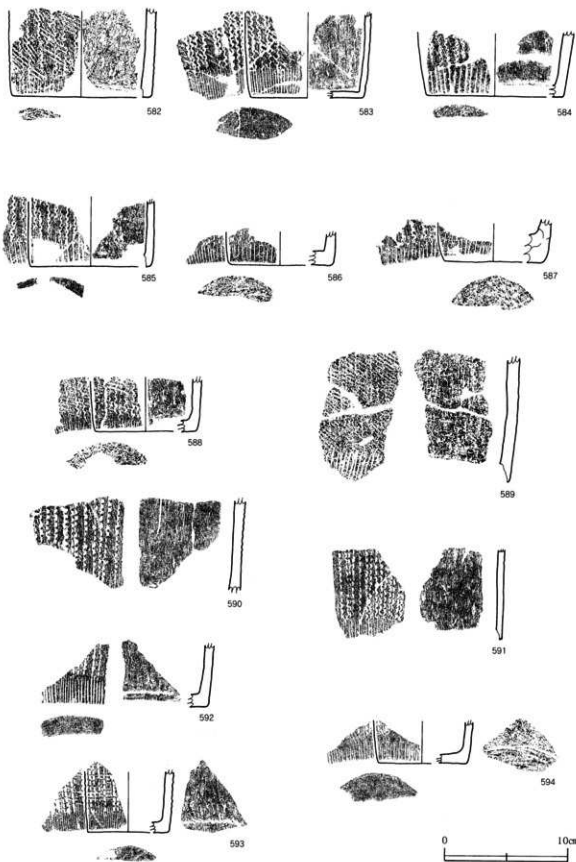
627~630は間隔の広い貝殻刺突文が施されている。627の刻目は沈線状を呈する。636・642・645・646の底面には白色付着物が見られる。638は密な貝殻刺突文である。面によって器壁の厚さに違いが見られる。639・640は方形刺突文が施されるものである。640・641・646・662の胎土中には小軽石を含む。641・643・646・649・658は底盤外周への接手法を採るものである。

665~672はレモン形の器形を呈する。

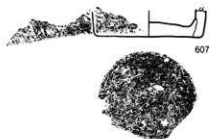
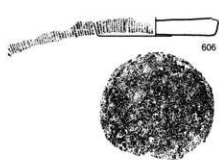
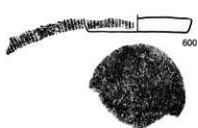
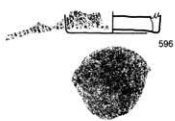
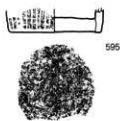
668・669は同一個体かと思われる。わずかに上げ底状を呈している。671・672は底面がほぼ残存している。底面においては、弧状部から角部への調整痕が見られる。



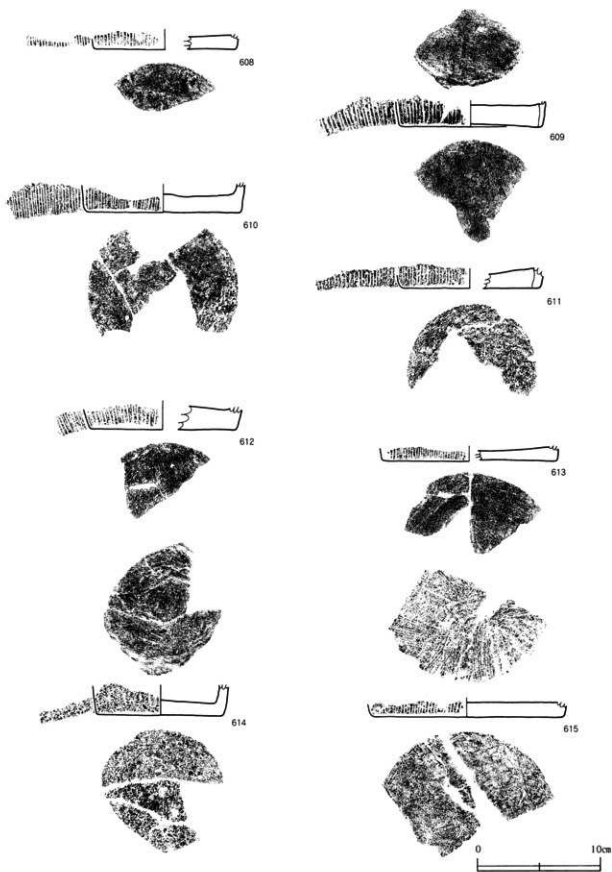
第69圖 3類土器底部(1)



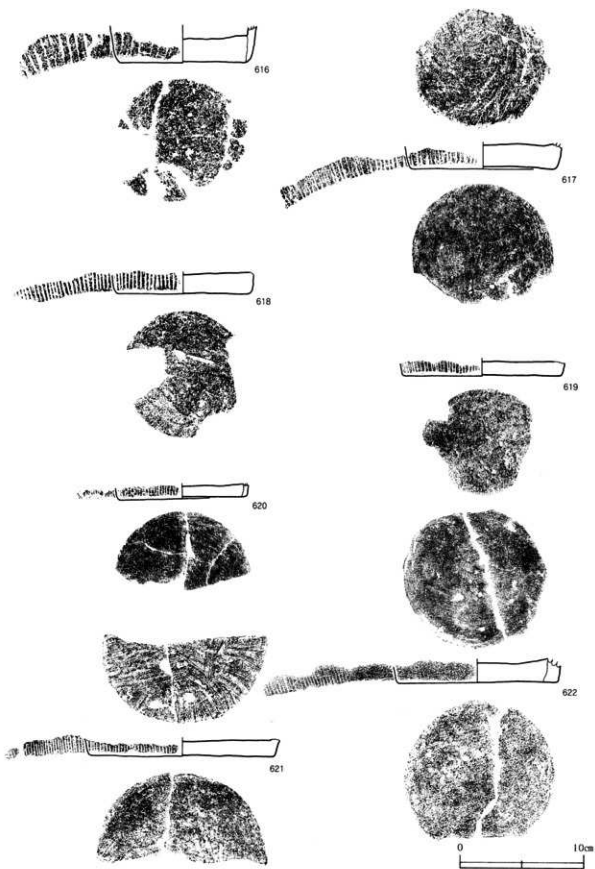
第70圖 3類土器底部 (2)



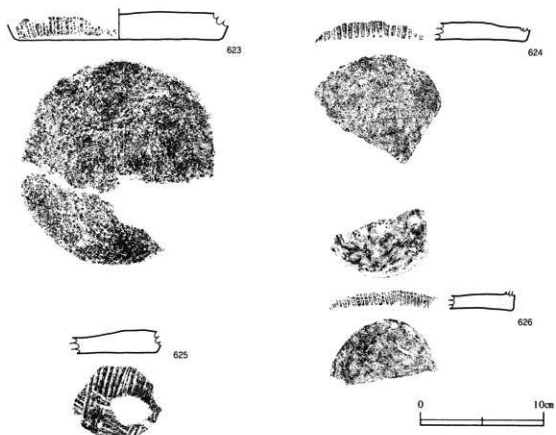
第71图 3類土器底部(3)



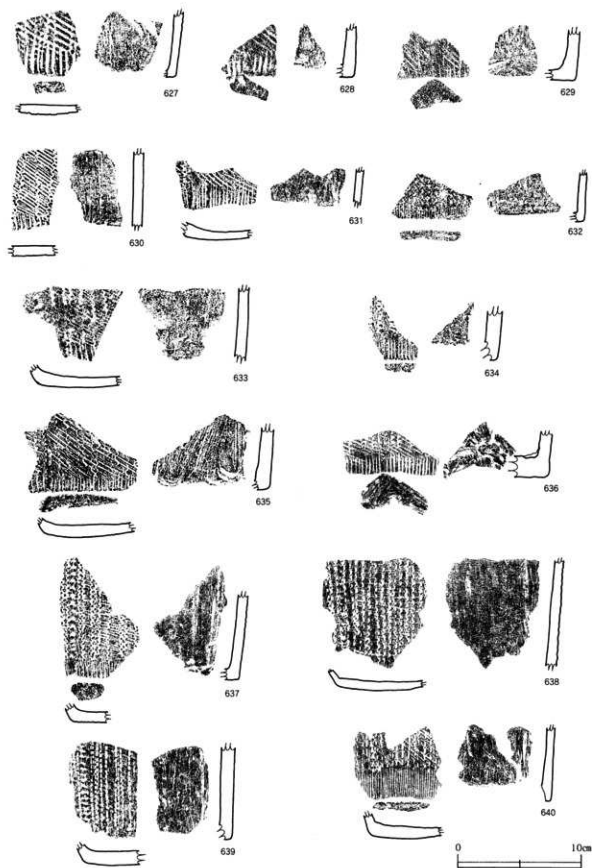
第72図 3類土器底部(4)



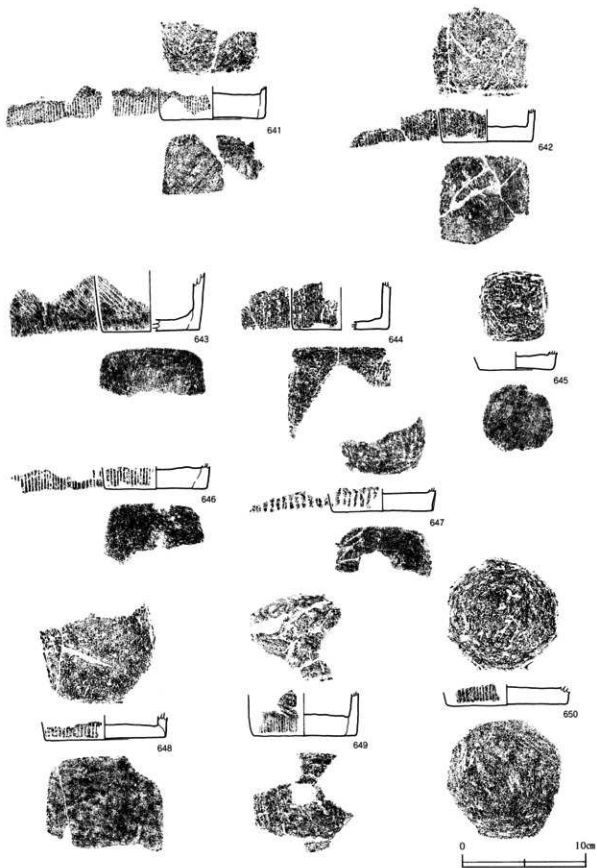
第73圖 3類土器底部 (5)



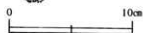
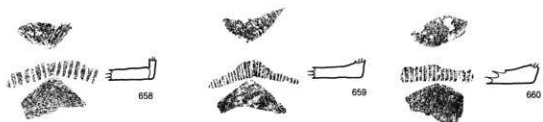
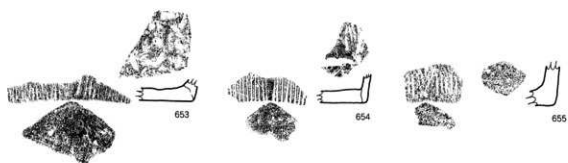
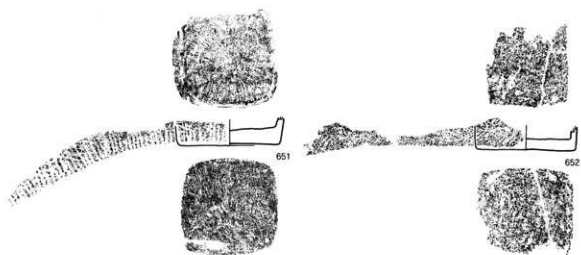
第74図 3類土器底部(6)



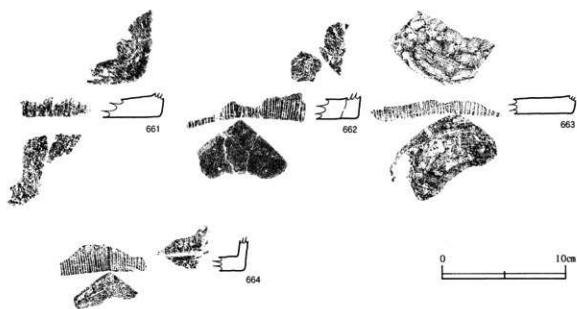
第75图 3類土器底部(7)



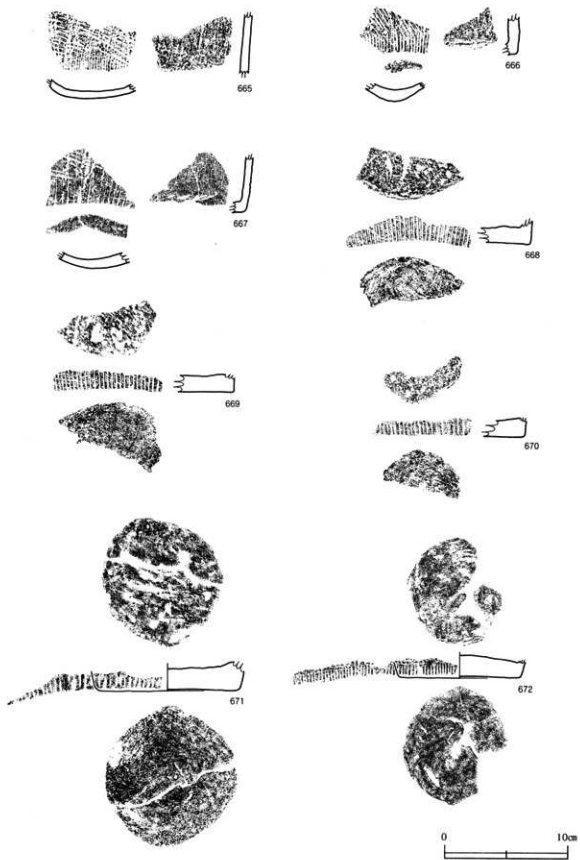
第76図 3類土器底部(8)



第77图 3類土器底部(9)



第78図 3類土器底部 (10)



第79圖 3類土器底部 (11)

4類 (第81図673～第82図693)

総出土点数は84点である。20点を図化した。器形は口縁部が外反する円筒形土器である。文様は、口唇部に刻目を施し口縁部には横位の貝殻刺突文がめぐる。その下位には、縦位の貝殻刺突文あるいは「C」字状の刺突文を施し、クサビ形貼付文を意識したものも見られる。胴部は、横位の貝殻押引文が施される。

分布は、全面調査区の北側にやや片寄って出土している。

673～683は口縁部にクサビ形貼付文を意識した刺突文が施される。673・674は同一個体と思われる。口縁部が外反し、口唇部は平坦で刻目が施される。口縁部には、横位の貝殻刺突文を2条施しその間に斜位のキザミが施されている。その下には、縦位の短い貝殻刺突文が施され、これがクサビ形貼付文を意識しているものと推察できる。胴部は貝殻押引文である。

680～683は口縁部がやや外反し「C」字状の刺突文がめぐる。「C」字状の刺突文は1段のものと3段のものが見られる。

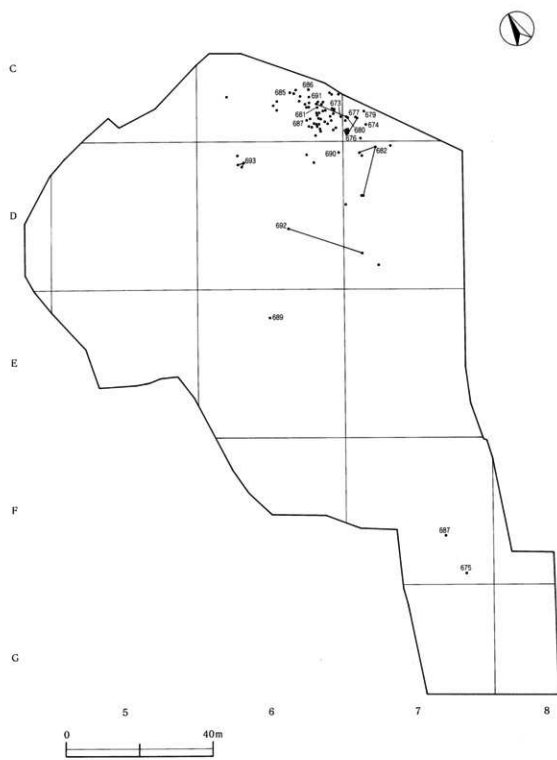
684・685は、口縁部が外反し口唇部に刻目を施す。口縁部には横位の貝殻刺突文のみが施され、クサビ形貼付文の痕跡を残さない。胴部は貝殻押引文である。

686～693は胴部片である。

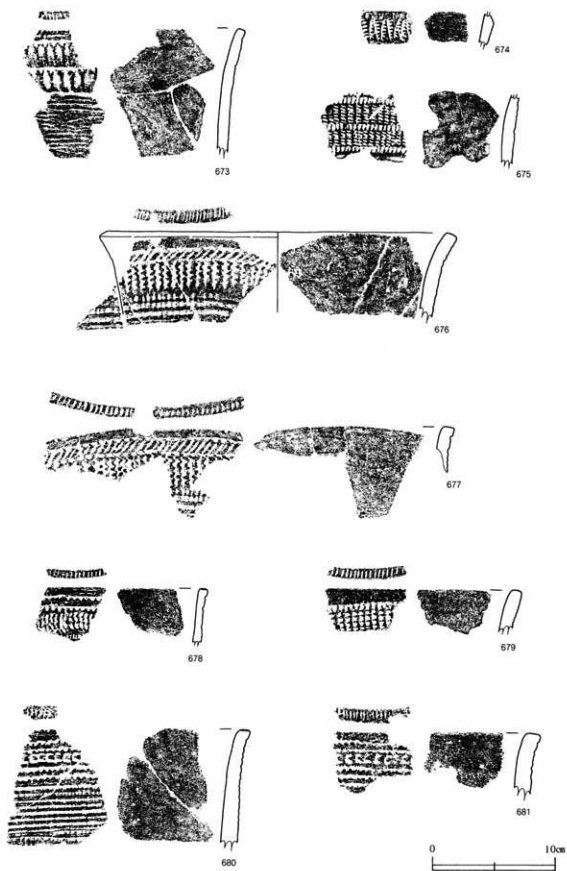
6類 (第84図694～第87図739)

胴部に貝殻条痕文による綾杉条痕を施すものである。総出土点数は187点である。46点を図化した。口縁部片はいずれも平口縁である。口縁部が外反するもの(694～796・710・711)と口縁部が直行するもの(707～709)に分けられる。分布は、D-6区を中心に出土している。

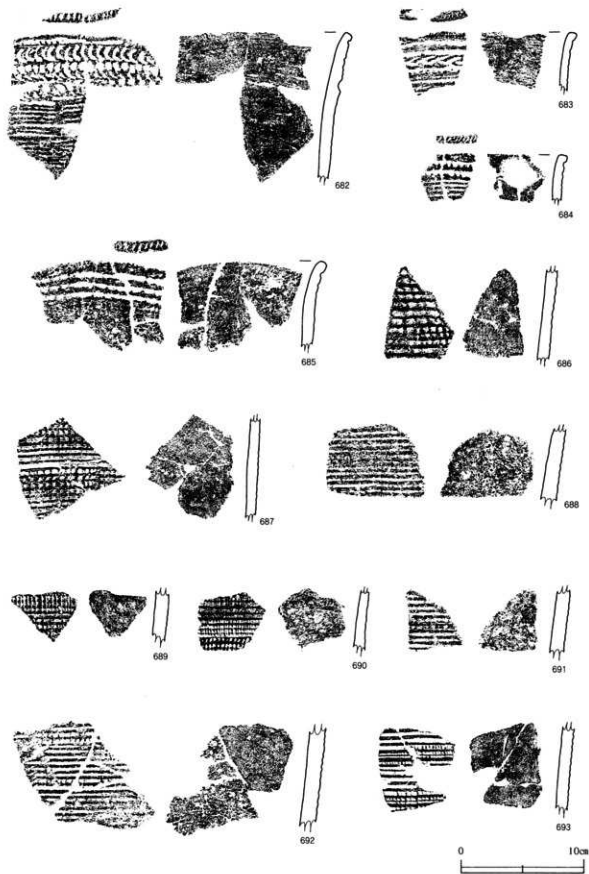
694～711は口縁部片である。694は口縁部が外反し、丸みを帯びた口唇部は若干肥厚して米粒状の刻目を施す。口縁部文様は斜位の貝殻刺突文で胴部には貝殻条痕による綾杉文が施される。696は口縁部が外反し、丸みを帯びた口唇部の外側に米粒状の刻目が施される。口縁部文様は、貝殻刺突文を逆「く」字状に施し、胴部は貝殻条痕による綾杉文が施されている。705は内面調整がやや粗い。706は比較的小型の土器である。口縁部が外反し、器壁は全体的に厚い。口縁部に縦位に近い貝殻刺突文を施し、胴部は綾杉文を意識した不規則な貝殻条痕文となる。内面調整は、胴部で縦位に口縁部で横位にやや粗めの調整が施されている。707・708は口縁部が直行する。口縁部文様は、羽状の貝殻刺突文の上下に横位の貝殻刺突文を施して文様帯を区画する。胴部は貝殻条痕による綾杉文と思われるが、浅めである。口唇部には刻目が施されている。なお、708の口縁部には補修孔が見られる。716は胴部片である。貝殻条痕による綾杉文が施されている。723～725は同一個体の可能性が高い。浅い貝殻条痕が綾杉状に施されている。707・708の胴部片である可能性も考えられる。737～739は底部片である。底部外面に刻目が施され、横位の貝殻条痕文が施されている。



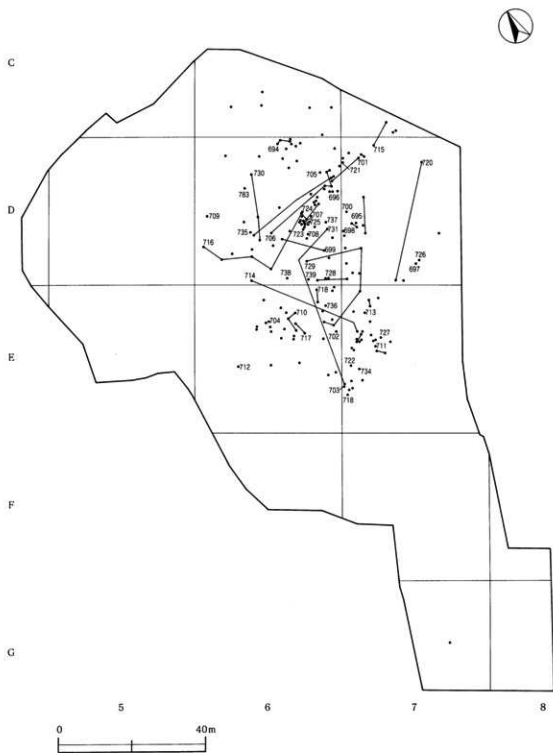
第80图 4類土器出土状況図



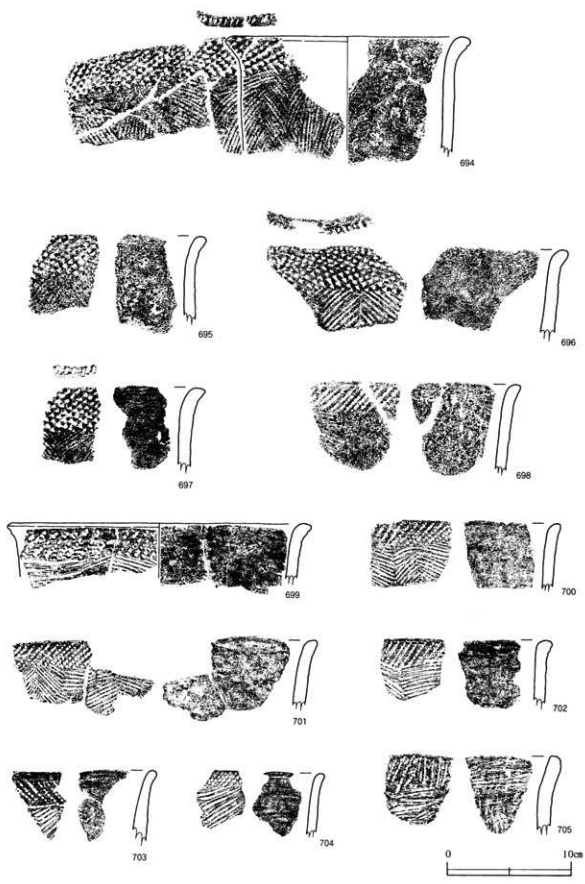
第81圖 4類土器 (1)



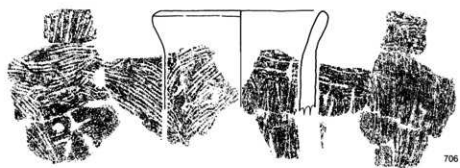
第82図 4類土器(2)



第83図 6類土器出土状況図



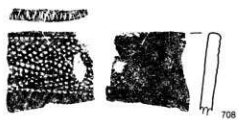
第84図 6類土器 (1)



706



707



708



709



710



711



712



713



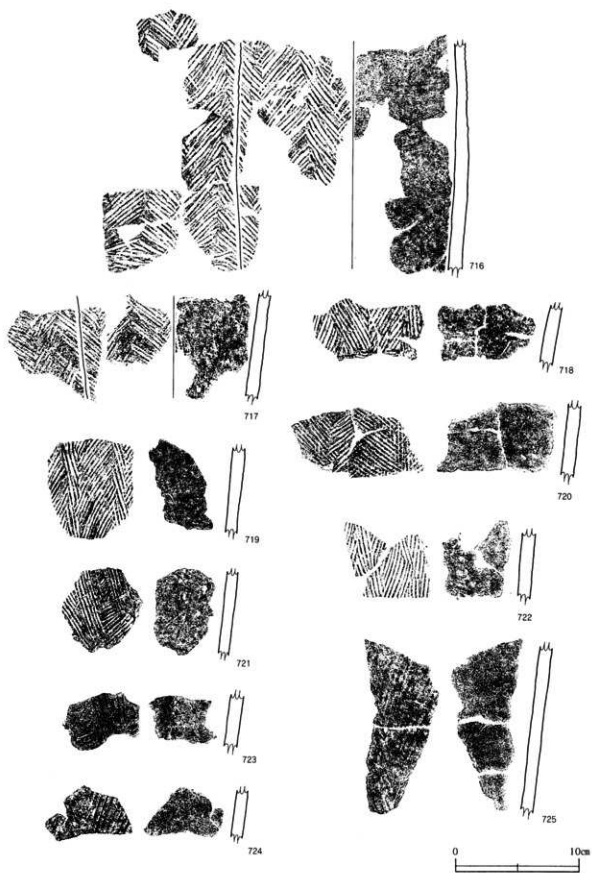
714



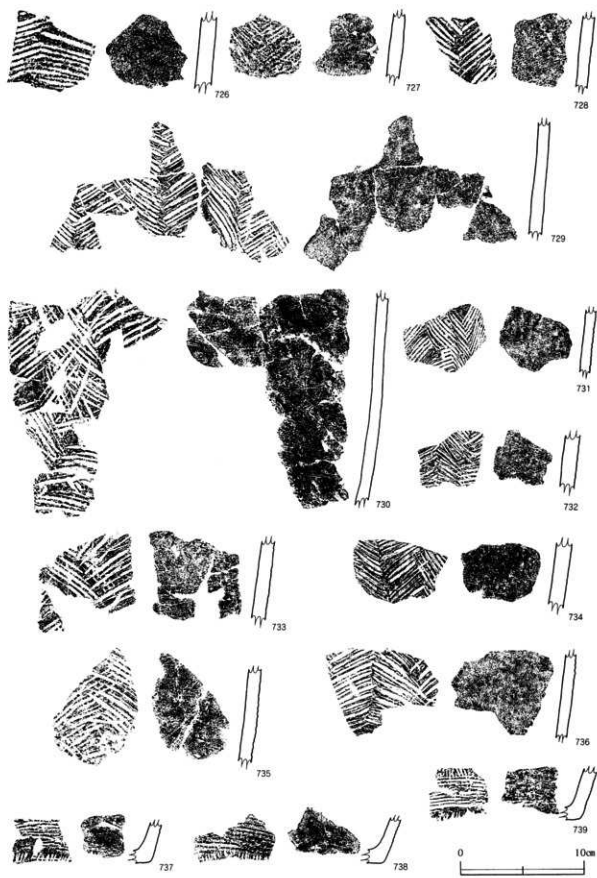
715



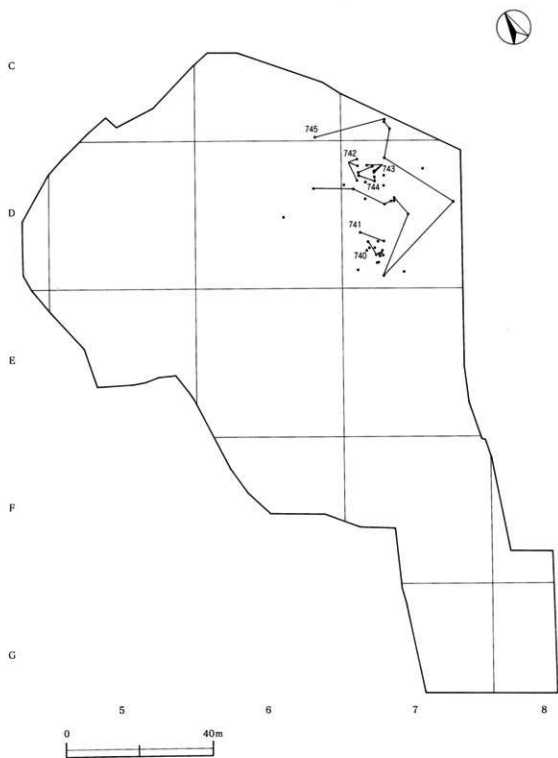
第85図 6類土器(2)



第86図 6類土器(3)



第87図 6類土器 (4)



第88図 7類土器出土状況図



740



741



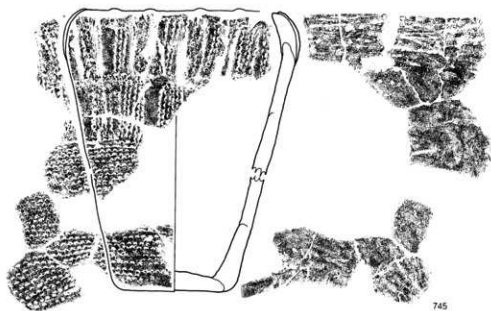
742



743



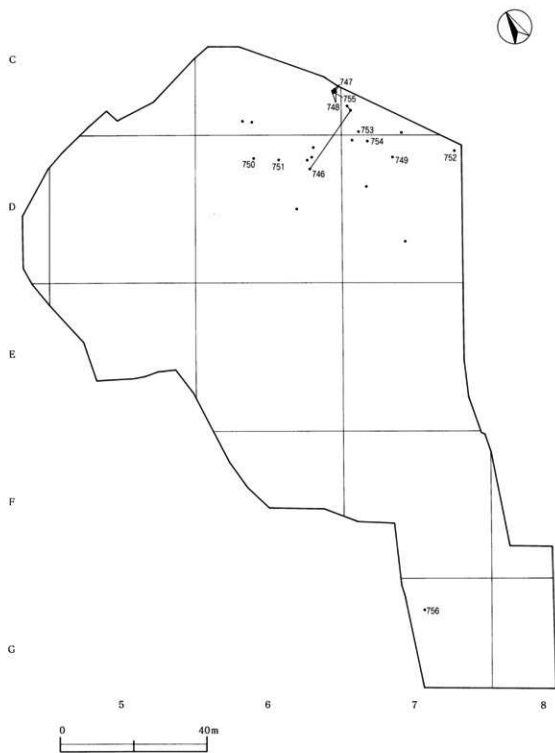
744



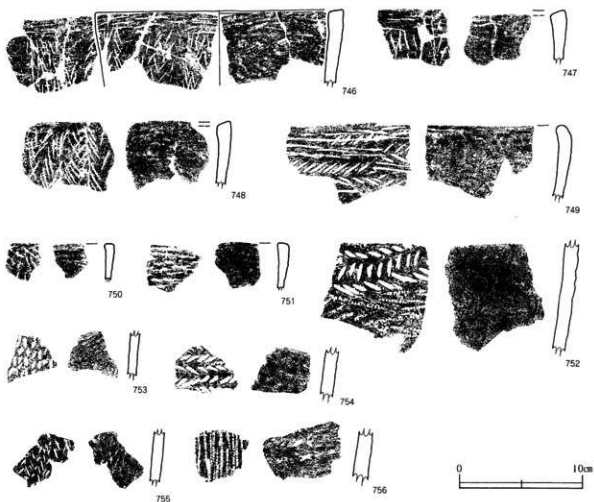
745



第89圖 7類土器



第90図 8類土器出土状況図



第91図 8類土器

7類 (第89図740~745)

器面に貝殻刺突文を施すものである。D-7区を中心にC-6・7区、D-6区にもわずかに出土する。総出土点数は49点である。

740・741は口縁部片である。口唇部は平坦面を有し、内側へ肥厚する。口縁部は直行し、横位の貝殻刺突文が施されている。742~744は胴部片である。いずれも横位の貝殻刺突文が施されている。745は完形に復元された土器である。口縁部は強く内傾し縦位にやや長めの瘤状突起が付着する。これは、約4センチ間隔で12個貼付され、縦位の貝殻刺突文が施されている。その下位には横位の貝殻刺突文がめぐり、さらに縦位に貝殻刺突文が左右に無文部を挟んで施されている。胴部下半からは、横位の貝殻刺突文をやや密に底部まで施文している。底部は、中央が厚く外周部につれて薄くなる。なお、胴部の粘土帯は4段構成で内傾する口縁部は新たな粘土帯により作出している。

8類 (第91図746~756)

器面に短い沈線文を施すものである。総出土点数は25点である。746~751は口縁部片である。746・747は同一個体の可能性がある。口縁部は直行し、口唇部は平坦面を有しわずかに内側へ肥厚する。文様は、口縁部に横位を意識した短い沈線文を施し、その下位に「ハ」字状の羽状文を施すが、整然さに欠けている部分が多い。749は口縁部が丸みを帯びて内傾する。752・756は短い沈線文と貝殻刺突文が施されている。

9類 (第94図757~第108図824)

基本的な施文パターンは羽状文である。施文具と文様パターンによって細分した。9類全体の出土点数は438点である。

a類 (第94図757~第97図767)

貝殻による羽状文を施すものである。確認できた総出土点数は69点である。

757は、46号集石内遺物と接合したものである。口縁部は直行し、口唇部は平坦面を有してわずかに内側へ肥厚する。文様は、全面に貝殻による短い条痕文を行ごとに方向を変えて施し、羽状文を呈する。だが、胴部下半においてはその規則性はやや崩れている。760は、口縁部から底部までが接合した完形品である。口縁部は直行し、口唇部はやや丸みを帯びている。底部から胴部への立ち上がりはやや膨らむ。また、胴部中においても器壁が若干膨らんでいる箇所も見られ、土器製作時における粘土の積み上げ段階で生じたものと思われる。文様は、短い貝殻条痕文を羽状に施し文様の左右には無文帯が見られる。761・762は同一個体の可能性がある。761は、口唇部が内側へ肥厚する。口縁部には端部に短い縦位に近い条痕文が施され、その下位より貝殻羽状文が施されている。765~767は羽状文が横に展開しているものである。

b類 (第97図768~第98図779)

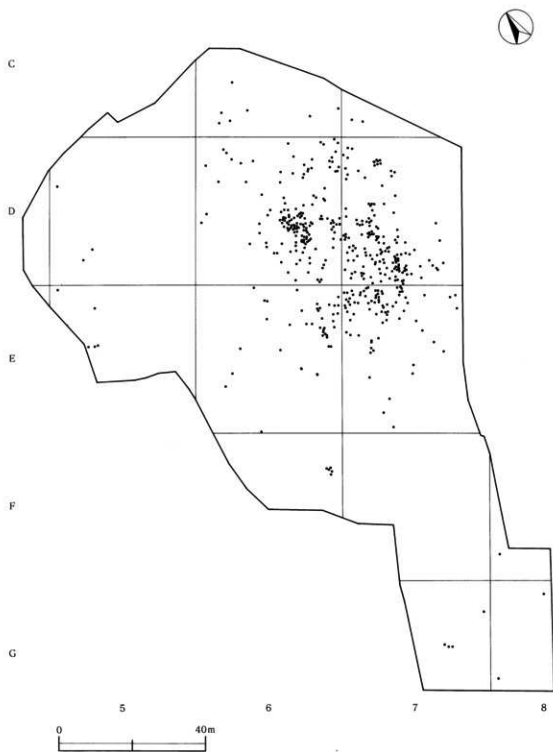
沈線文による羽状文を施すものである。確認できた総出土点数は74点である。

768~773は口縁部片である。768は口縁部が直行する。文様は、2本1組の沈線文を羽状に施す。内面は、丁寧なミガキが施されている。770・771は多繊維の沈線文である。774~779は胴部片である。775は粘土接合部分で剥離しており、断面観察から3~4センチの粘土帯の積み上げにより器形を製作しているものと思われる。

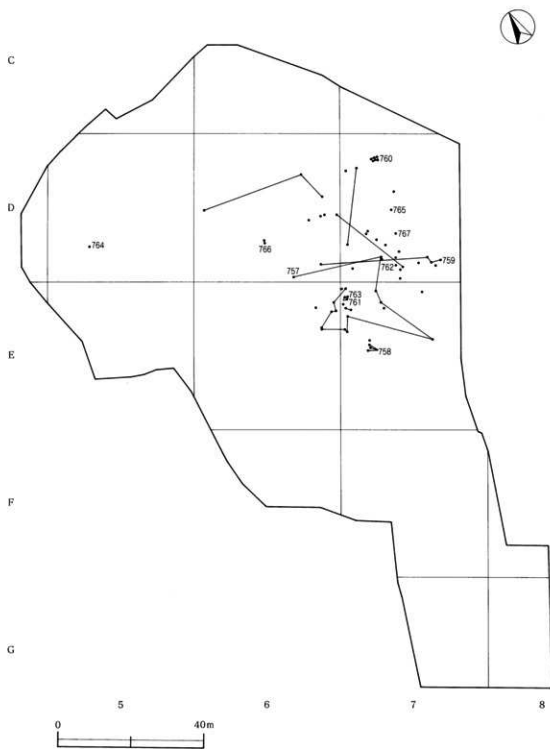
d類 (第100図780~785)

流水文を施すものである。確認できた総出土点数は34点である。

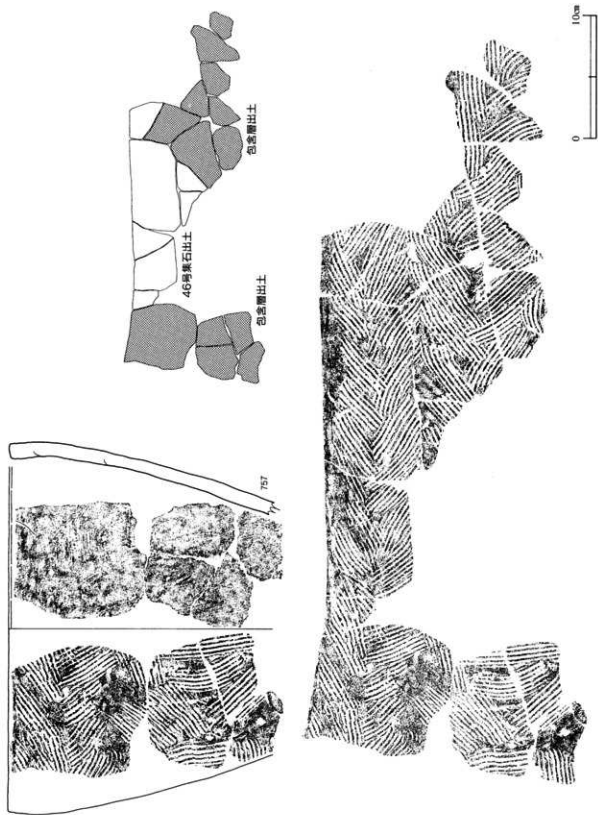
780~783は口縁部片である。781は縦位の流水文施文後に口縁部に横位の貝殻条痕文を施している。なお、口縁部には補修孔が見られ、その形状は両側からの円穿孔である。782は、口縁部が外反し口縁部内面に段を有する器形である。外面には流水文を縦位に施し、口縁部内面には縦位の貝殻刺突文が施されている。784・785は胴部片である。



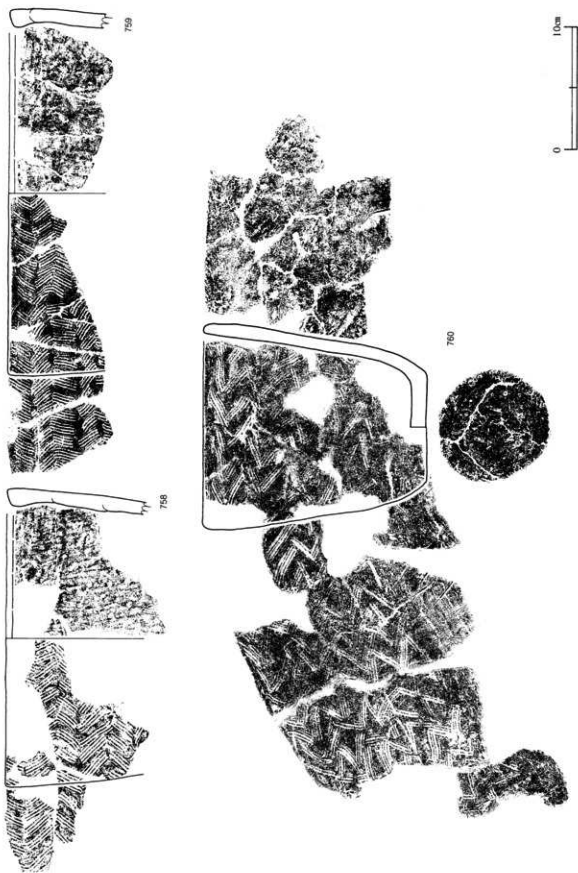
第92図 9類土器出土状況図



第93図 9 a 類土器出土状況図



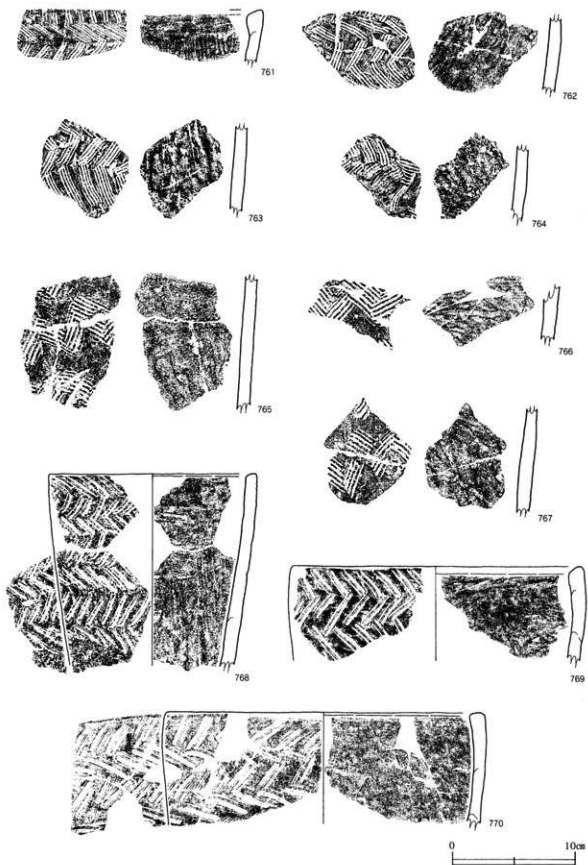
第94図 9 a 類土器 (1)



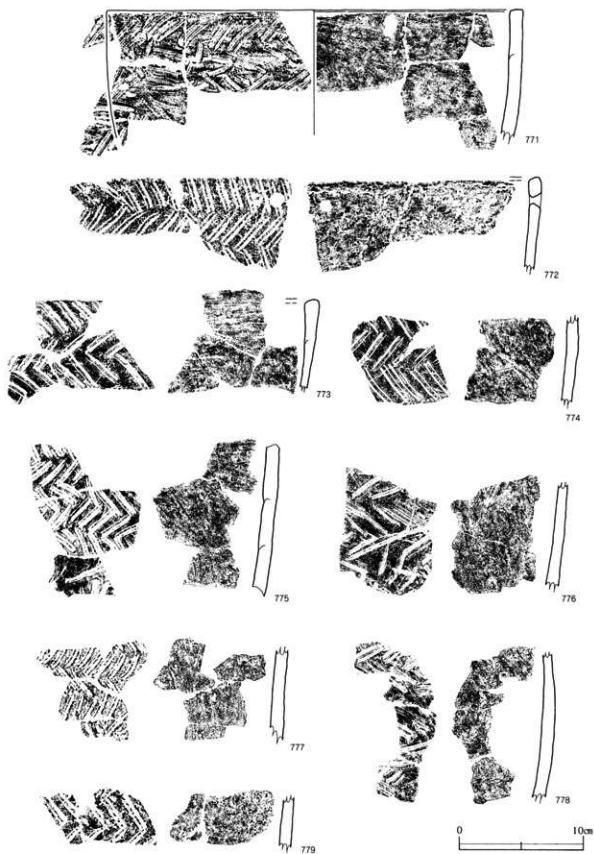
第95圖 9 a 類土器 (2)



第96图 9 b 類土器出土状況図



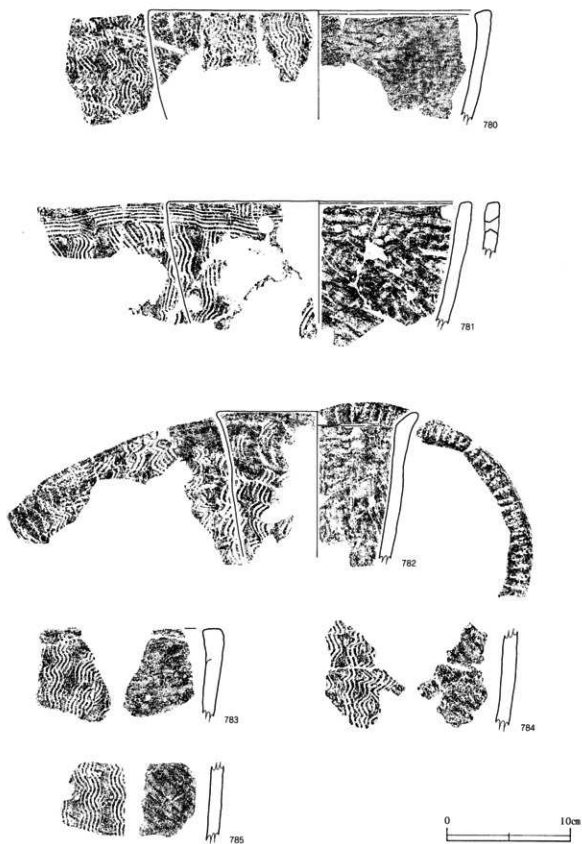
第97図 9 a類土器(3)・9 b類土器(1)



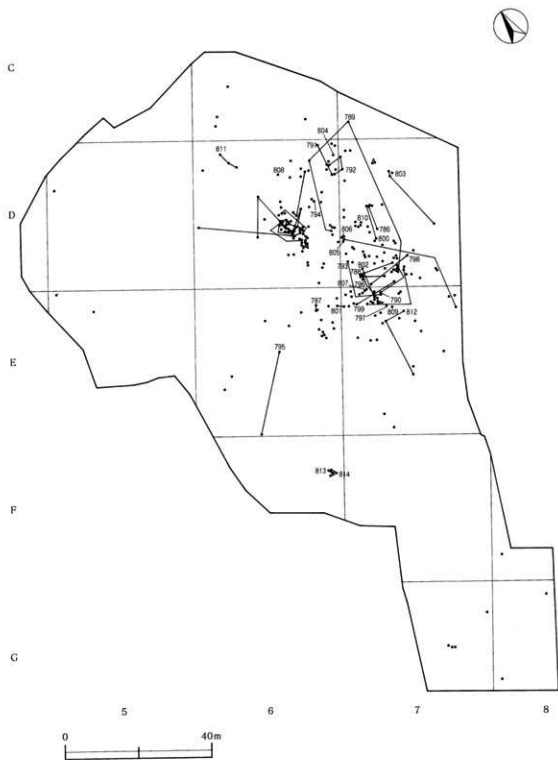
第98圖 9 b類土器 (2)



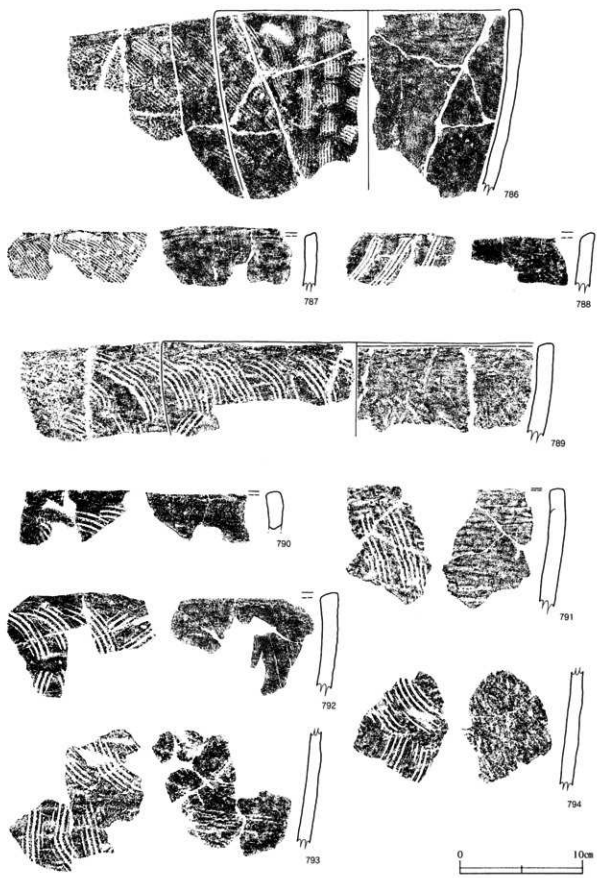
第99図 9d類土器出土状況図



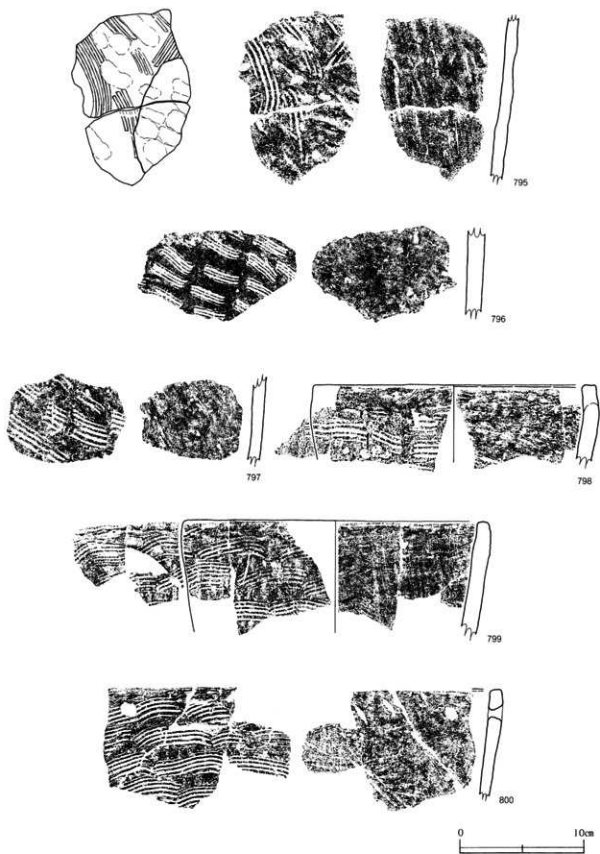
第100図 9d類土器



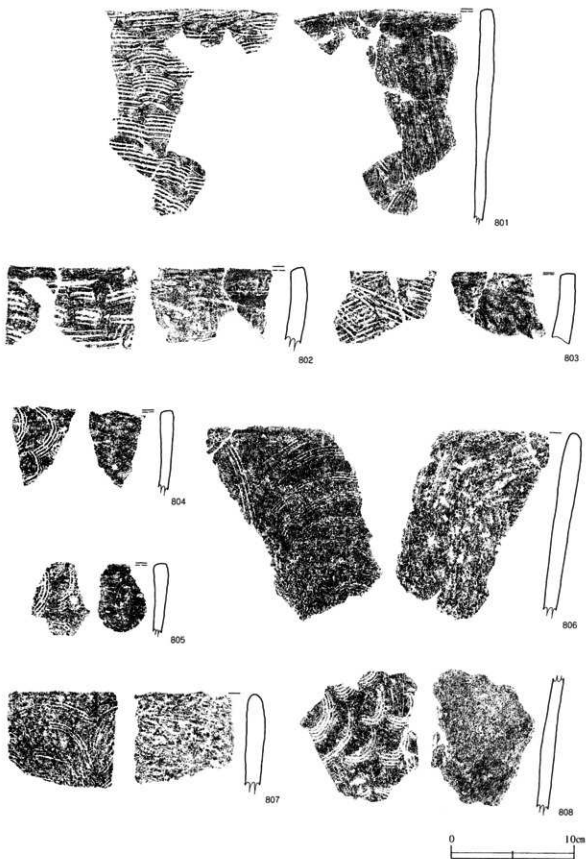
第101図 9e類土器出土状況図



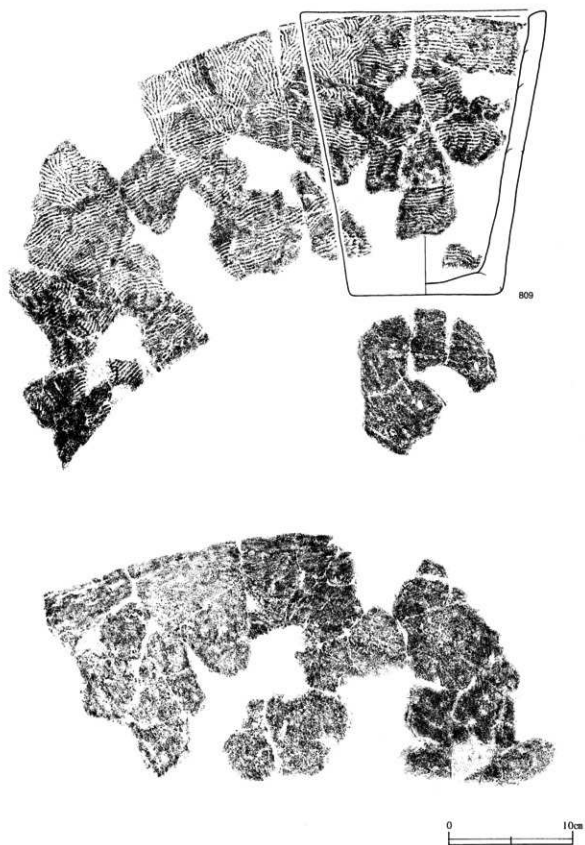
第102図 9e類土器(1)



第103図 9 e類土器 (2)



第104図 9e類土器(3)



第105図 9e類土器(4)

e類 (第102図786～第105図814)

a～d類に分類できなかったものや、不規則な文様構成のものを一括している。261点が出土した。

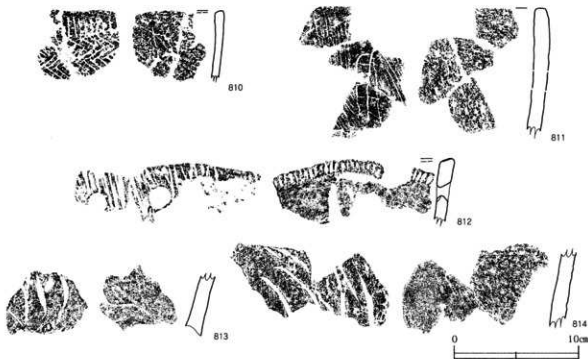
786は貝殻による短い条痕文を縦位と斜位とに施している。789～795は同一個体の可能性がある。789は口縁部が直行し口唇部は平坦面を有する。文様は、やや長めの貝殻条痕文を羽状を意識したやや不規則方向への施文を施している。795は胴部片で破片の右側には施文終了後新たに粘土を貼り付けている状況が観察できた。この貼り付けの際に付いたと思われる指頭圧痕が破片全体に観察できる。796は同一方向への短い貝殻条痕文が施されている。798～802は横位に近い短い貝殻条痕文を施している。804・805は逆C字状の条痕文が見られる。806・807は口縁部が直行して口唇部が丸みを呈する土器である。文様は、貝殻条痕による大きな弧状文が施されている。

809は口縁部から底部まで接合した完形品である。口縁部は直行し、口唇部は平坦面を有し内側へわずかに肥厚する。底部は中央部分が薄く、外周部へいくにつれて厚みを増す。文様は、貝殻条痕文を基本とし、施文具を小刻みに上下させることで小波状の貝殻条痕文を呈している。口縁部では、これを鋸歯状を意識して施文しているものと思われる。内面は丁寧なミガキが施されている。

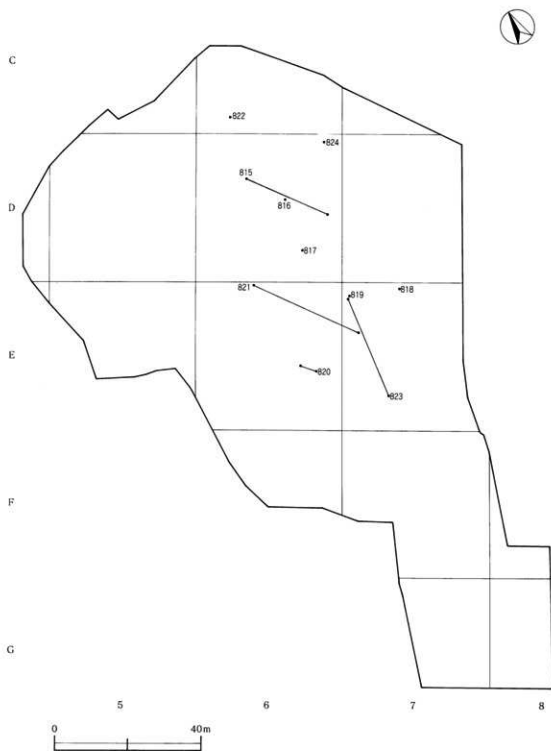
810～814は櫛状工具により施文されているものである。810は、口縁部に縦位に近い沈線文が施されその下位に羽状の沈線文が施されている。文様構成から見ると、761に類似している。

底部 (第108図815～824)

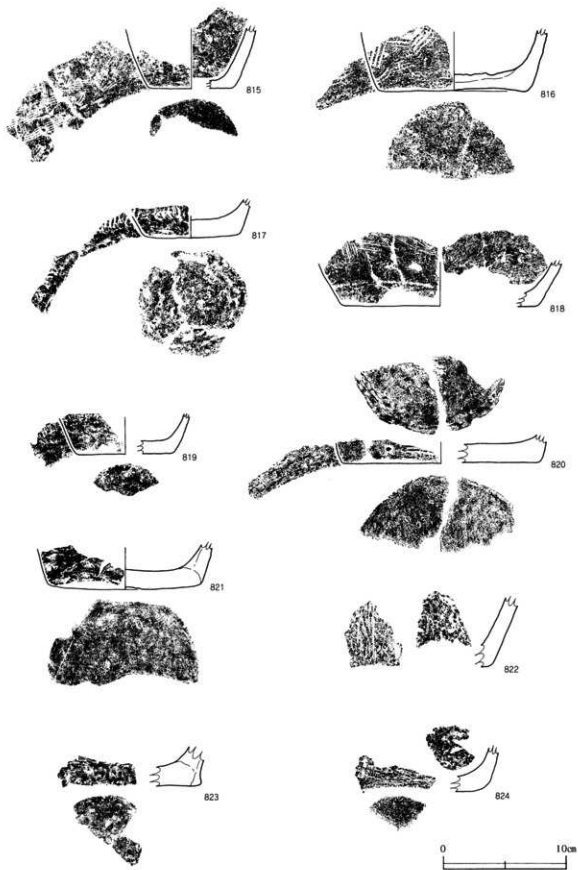
底部資料を一括した。815～818は貝殻による羽状文が施されている。816は底部内面に粘土を重ねている状況が見られた。821は底面が彫らみを有している。胴部との接合は円盤の上面に胴部の粘土を積み上げ、内面に粘土を付け足している。



第106図 9 e類土器 (5)



第107図 9類土器底部出土状況図（掲載分）



第108図 9類土器底部

10類 (第111図825～第129図952)

器面に押型文を施す土器群である。楕円文・連珠文・山形文の3つの文様が見られる。文様と施文方法等から6つに細分した。10類全体の出土点数は450点である。

10a類 (第111図825～第115図877)

器外面に楕円押型文を施すものである。確認できた総出土点数は168点である。

825～830はやや粗大な楕円文を施し、内面に横位の山形押型文を施す。いずれも同一個体の可能性がある。831～841は内外面共に楕円文を施すものである。831～833は横位を基本とした施文で、834～836は縦位を基本とした施文である。839～841は縦位の楕円文を施し、内面は段を有して横位に楕円文を施す。841は口唇部に刻目が施されている。842～844は内面施文を持たないものである。口縁部がわずかに外反し、口唇部は丸みを帯びる。

845～874は胴部片である。874は遺物の状態から底部に近い部分の破片であると思われる。875・876は底部片である。同一個体の可能性も考えられる。底部外面には浅く編み物圧痕が観察できる。

10b類 (第117図878～887)

連珠文を施すものである。楕円文とも山形文とも判断がつかなかった一群でもある。確認できた総出土点数は54点である。

878は口縁部が外反し、口縁部内面には段を有する。文様は、外面に縦位の連珠文を左右に間隔を持って施文され、口縁部内面には横位に連珠文が施される。879は口縁部が外反し口縁部内面に段を有する。文様は、胴部においては横位の連珠文で、口縁部では斜位の連珠文が左右に間隔を持って施文されている。886は口縁部がわずかに外反し、口縁部内面に段を有する。文様は外面に連珠文を横位に施し、内面には口唇部内端に刻目を施し、その下位に連珠文を施している。

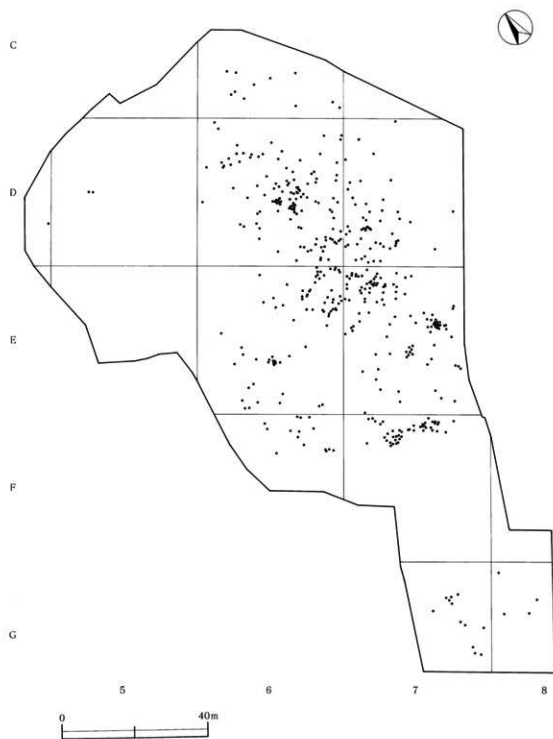
10c類 (第119図888～897)

山形押型文を横位ないし斜位に施すものである。確認できた総出土点数は119点である。

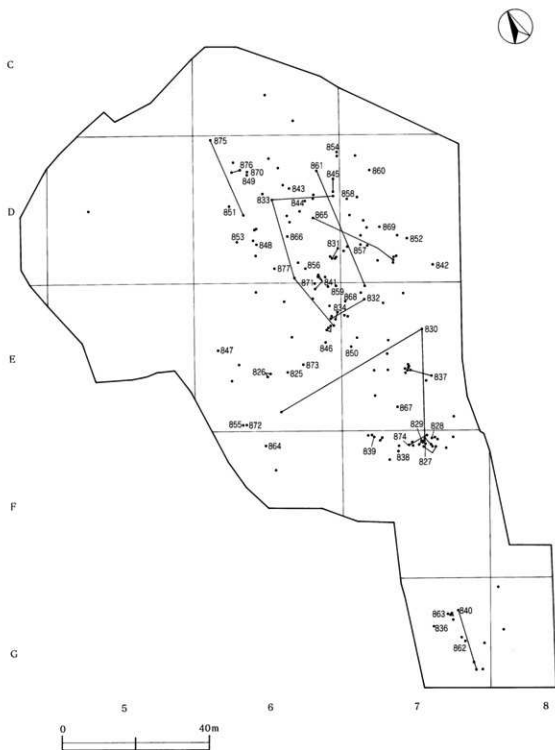
888は口縁部が外反し横位の山形押型文が施される。口縁部内面には刻目が施され、その下位に横位の山形押型文が施文される。891は口縁部上端に無文部を有する。892は口縁部に補修孔が見られ、両面からの円穿孔である。893～897は口縁部下位の破片である。

10d類 (第121図898～906)

山形押型文を縦位に施すものである。確認できた総出土点数は60点である。900は口縁部が外反し、口唇部に深い刺突文が施される。口縁部外面は縦位の山形押型文で、口縁部内面には段を有して横位の山形押型文が施されている。903・904は同一個体の可能性がある。口縁部は外反し胴部はやや膨らむ。口唇部は広い平坦面を有する。文様は縦位の山形押型文で、口唇部にも同様の施文がめぐる。905は口縁部が外反し口唇部はやや丸みを帯びる。



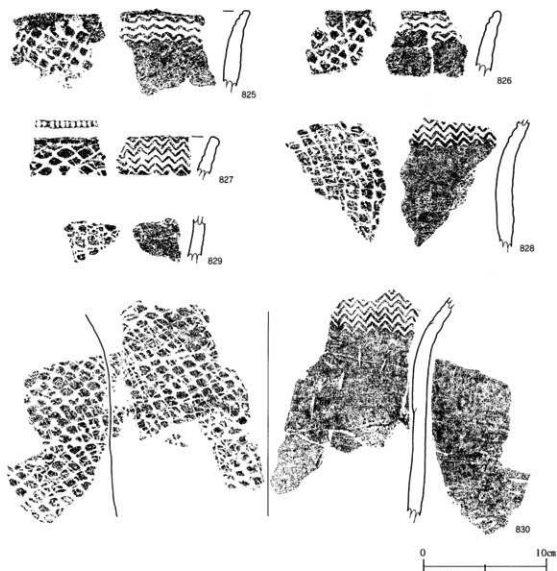
第109図 10類土器出土状況図



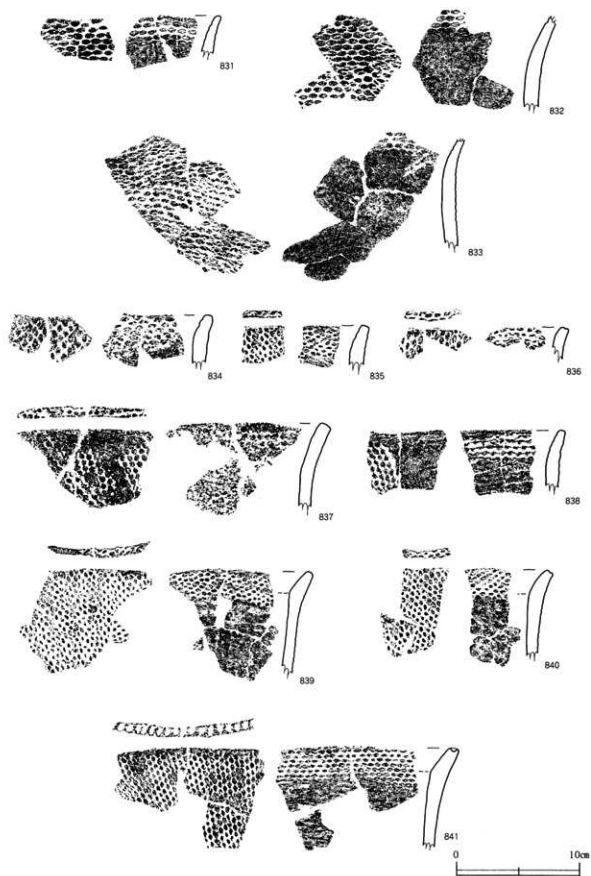
第110图 10a類土器出土状況図

10e類 (第123図907～第124図917)

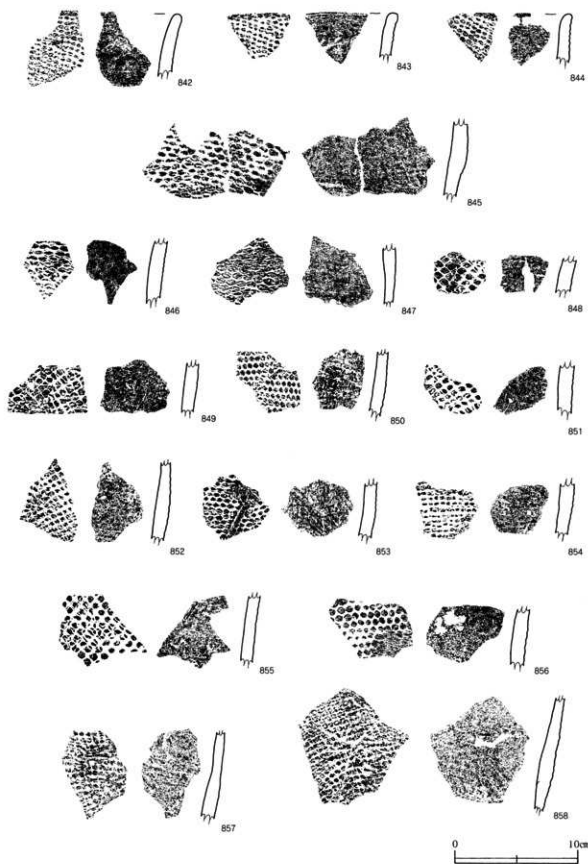
口縁部が直行するもので、内面施文を伴わないものである。確認できた総出土点数は33点である。907・908は、平坦な口唇部を有し横位の山形押型文が施されている。909・910は縦位の山形押型文が施されている。911～914は口唇部が内側へわずかに肥厚するものである。913は口縁部が直行し口唇部は平坦面を有する。胴部は直線的に底部へと移行する、いわゆるバケツ形の器形である。外面は、縦位の山形押型文が全面に施文され、内面は丁寧なミガキが施されている。底部は、中央が厚く外周へ行くにつれて薄くなる。底部外面も内面同様に丁寧にミガキが施されている。917は口唇部が丸みを帯び口縁部が内湾する。文様は、横位の山形押型文を基本とするが、胴部下半で縦位の沈線状の文様が見られる。



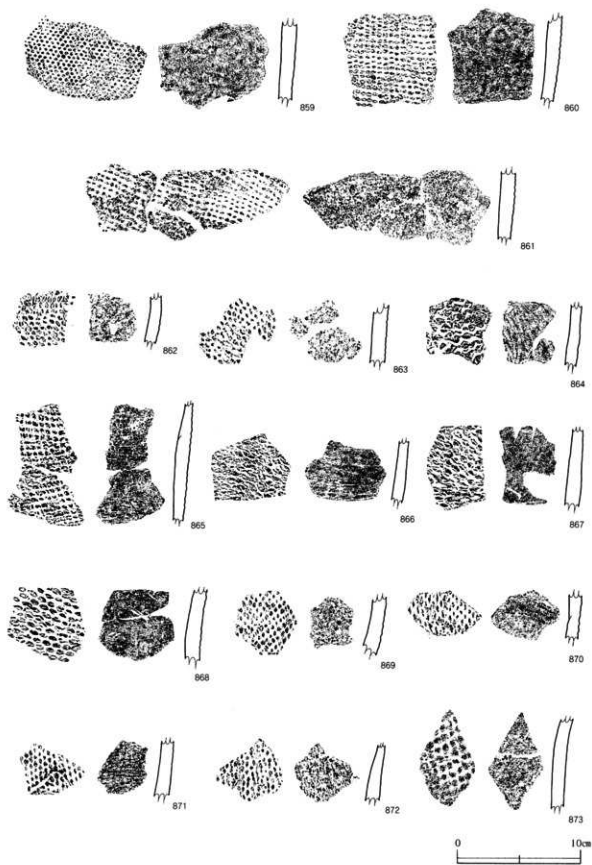
第111図 10a類土器(1)



第112圖 10a類土器（2）



第113圖 10 a類土器 (3)



第114図 10a類土器（4）

10f類 (第124図918・919)

楕円押型文と山形押型文とを併用するものである。確認できた総出土点数は16点であるが、全て同一個体の可能性が高い。

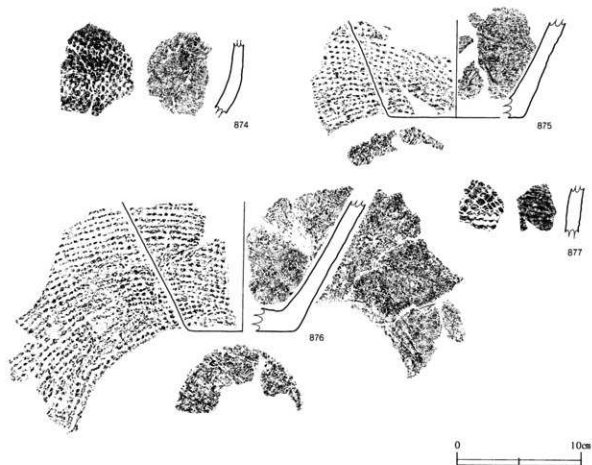
918・919は同一個体の可能性が高い。口縁部が強く外反し、胴部は膨らむ。口唇部及び口縁部内面には山形押型文が施される。外面は、口縁部から胴部の最大径上まで縦位の山形押型文が施され、その下は横位の山形押型文である。さらにその下位には楕円押型文が施されている。胴部の粘土の積み上げは5～6センチの粘土帯を使用しているものと思われる。

10類土器の胴部 (第126図920～第128図945)

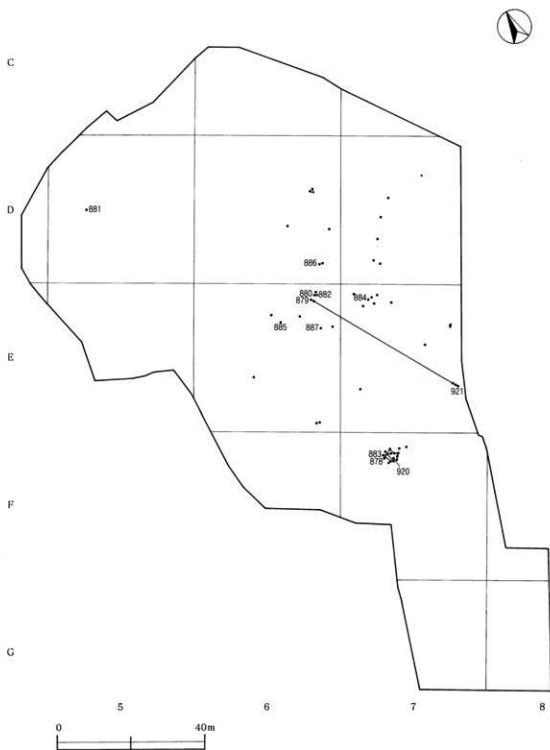
b～e類の胴部片を一括した。922～933は横位の山形押型文が施されている。934～937は縦位や横位など複数の施文方向の山形押型文で構成されている。934・935は同一個体の可能性が高い。943は903ないし904の胴部片と思われる。

10類土器の底部 (第128図946～第129図952)

b～e類の底部片を一括した。946・947は胴部の立ち上がり内面が直線的である。948の胴部立ち上がり内面が曲線的である。951は、底面を欠く。雲母を多量に含んでおりやや脆い。胴部の粘土積み上げは5センチ程度の粘土帯による。



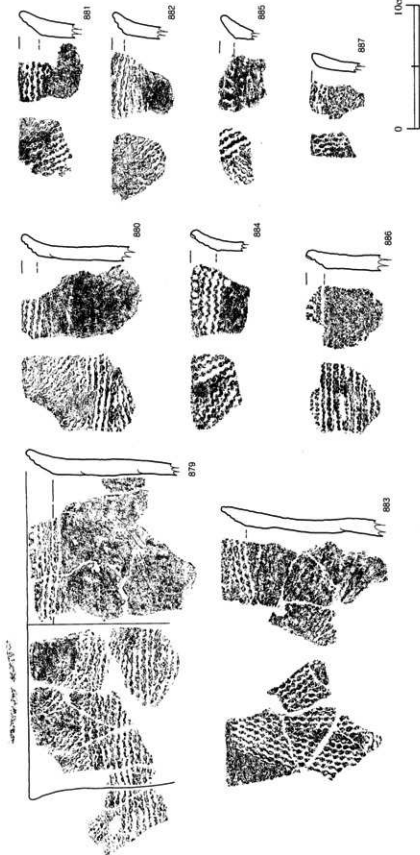
第115図 10a類土器 (5)



第116図 10b類土器出土状況図



876



877



881



882



885



887



880



884



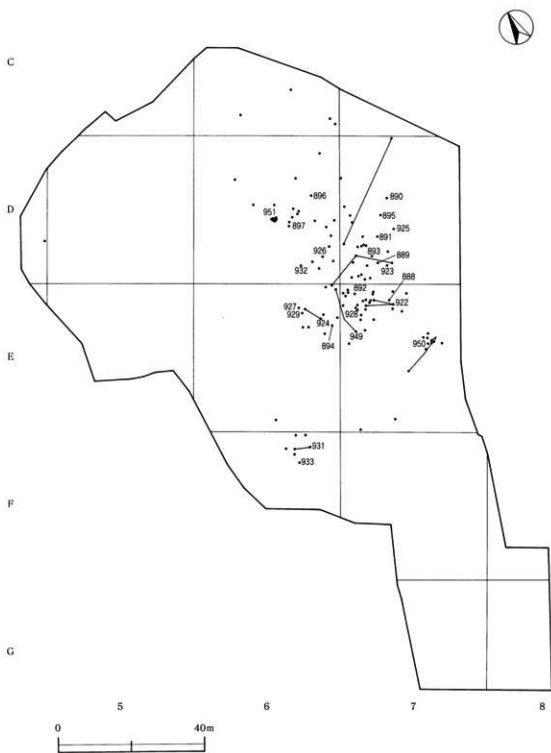
886



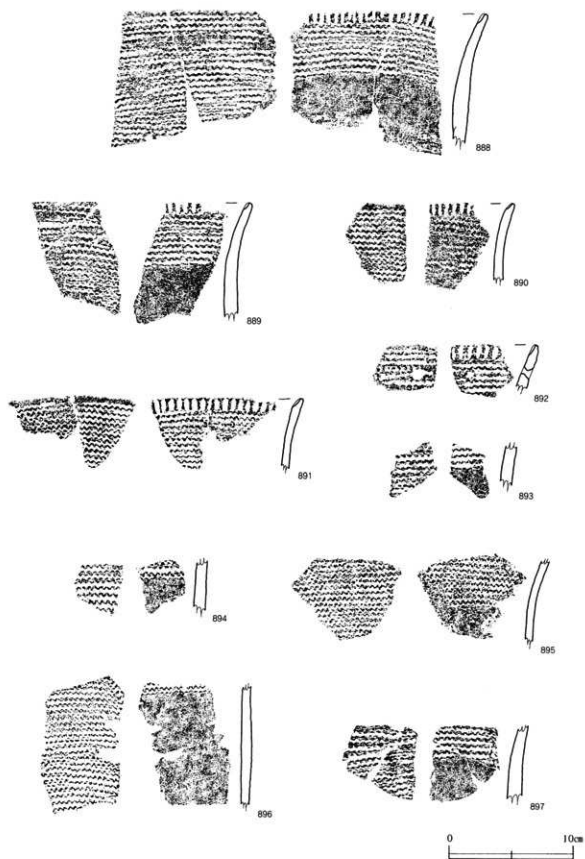
883



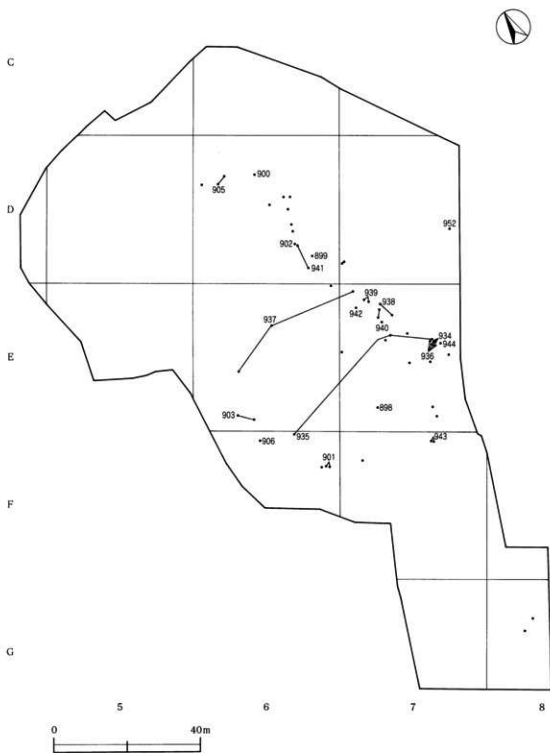
第117圖 10b類土器



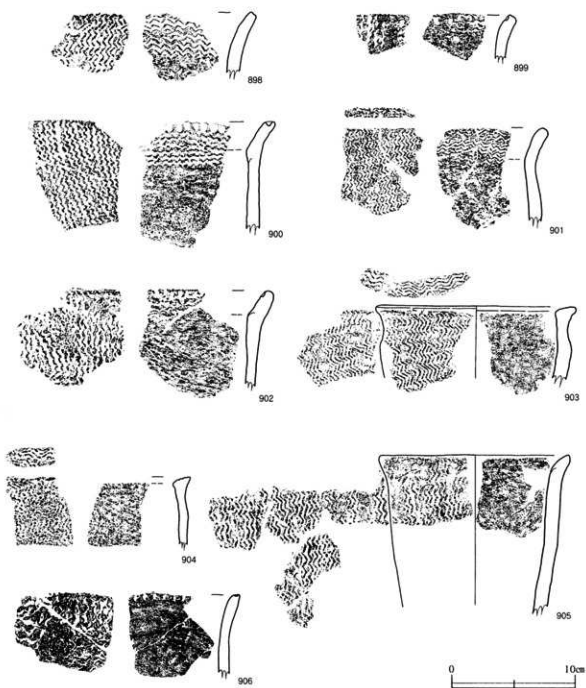
第118図 10c類土器出土状況図



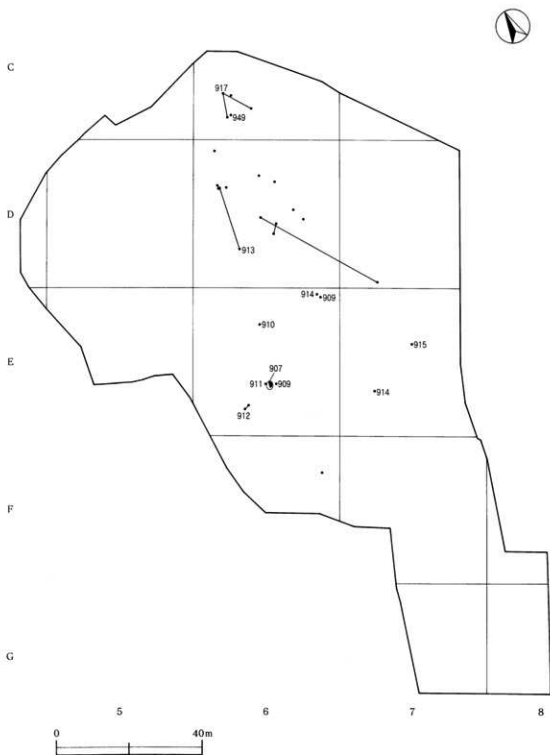
第119図 10c 類土器



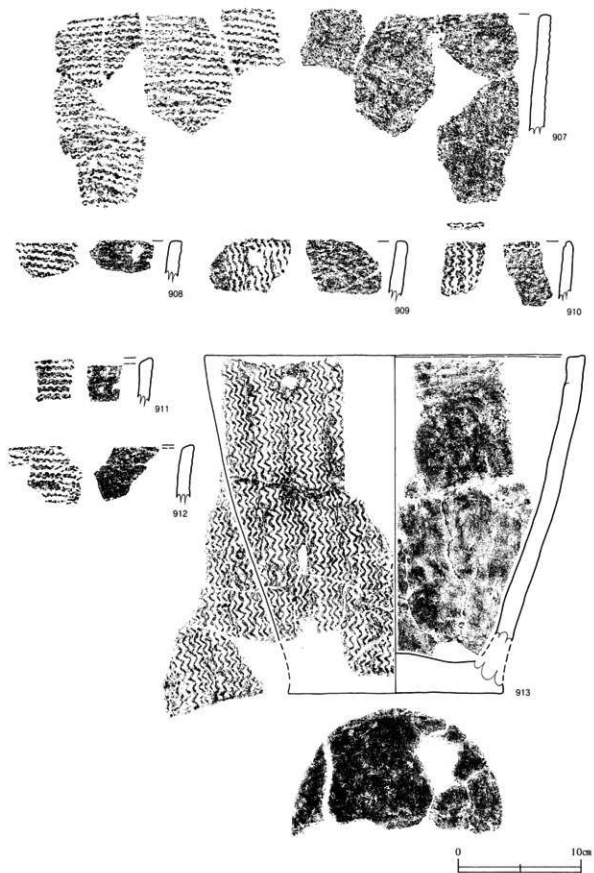
第120図 10d類土器出土状況図



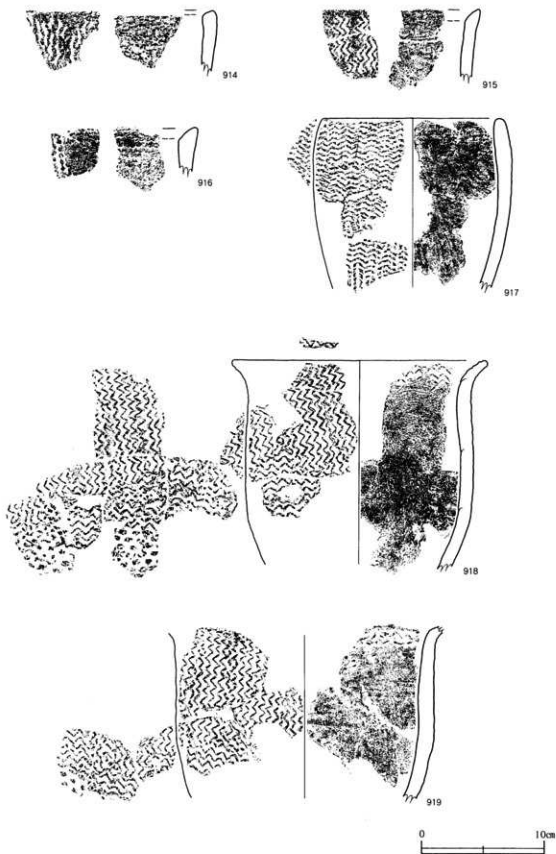
第121図 10d類土器



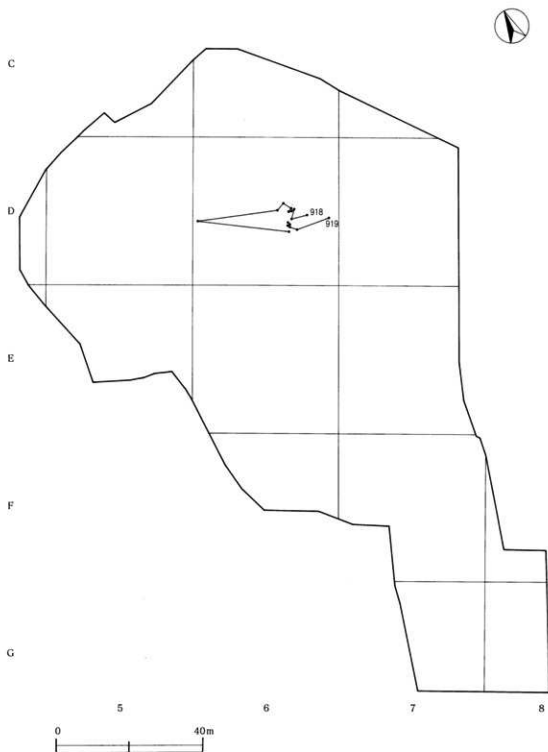
第122図 10e類土器出土状況図



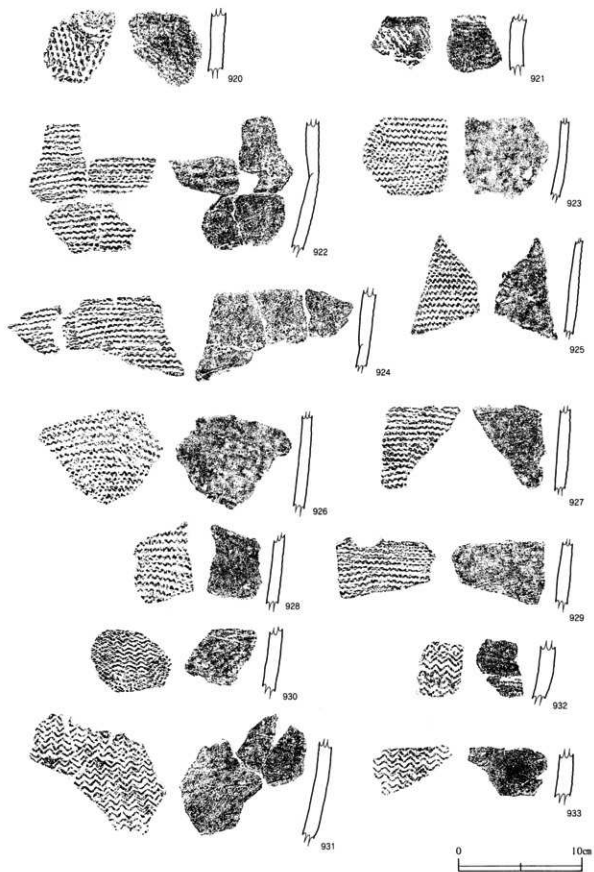
第123図 10 e 類土器



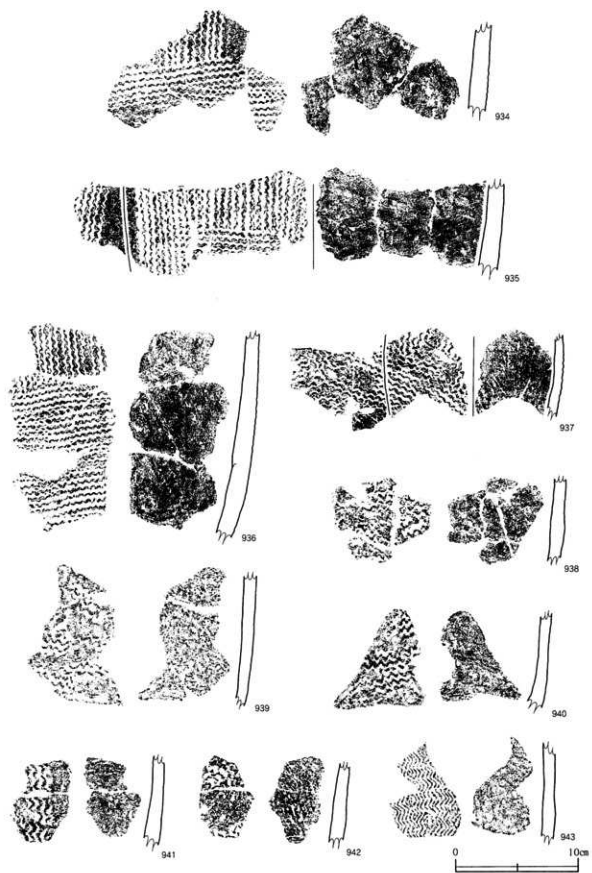
第124図 10 e・10 f 類土器



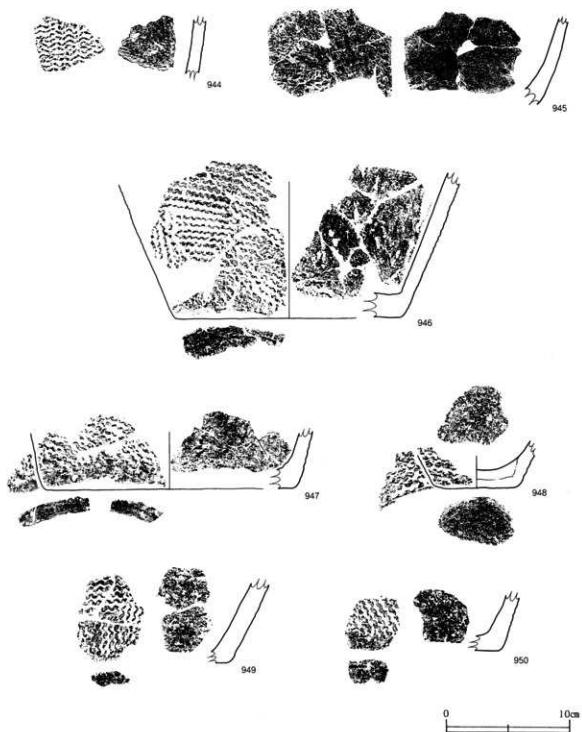
第125図 10 f 類土器出土状況図



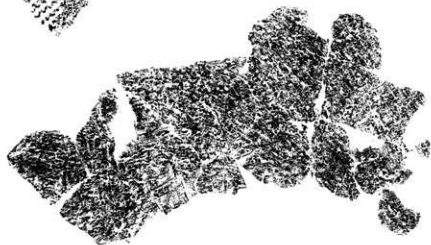
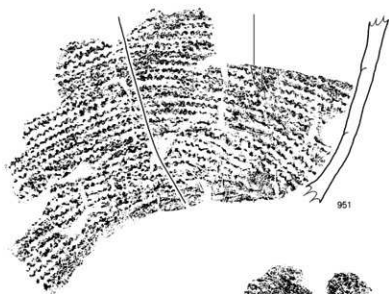
第126図 10類土器胴部(1)



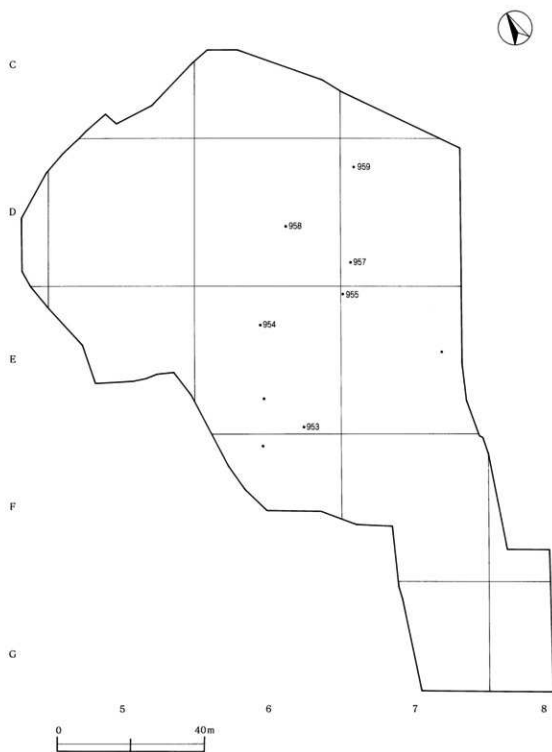
第127図 10類土器胴部（2）



第128図 10類土器胸部・底部



第129図 10類土器底部



第130図 11類土器出土状況図

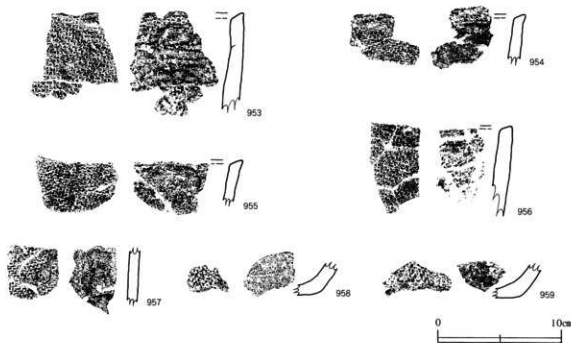
11類 (第131図953~959)

判突文状の施文を呈するものである。確認できた総出土点数は9点である。7点を図化した。器形は、口縁部が直行して直線的な胴部を呈するものと思われる。口唇部は内側へ内傾する。953~956は口縁部片である。いずれも外面に判突文状の文様が施され、内面は丁寧なナデが施されている。953~955は口縁部の外端部がわずかに突出した感じである。957は胴部片である。施文の手法等は口縁部と大差ない。958・959は底部片である。底部内面は屈曲を持たずに丸みを帯びており、外面に関してもややゆるやかな立ち上がりになっている。なお、底面は比較的入念に調整が施されている。

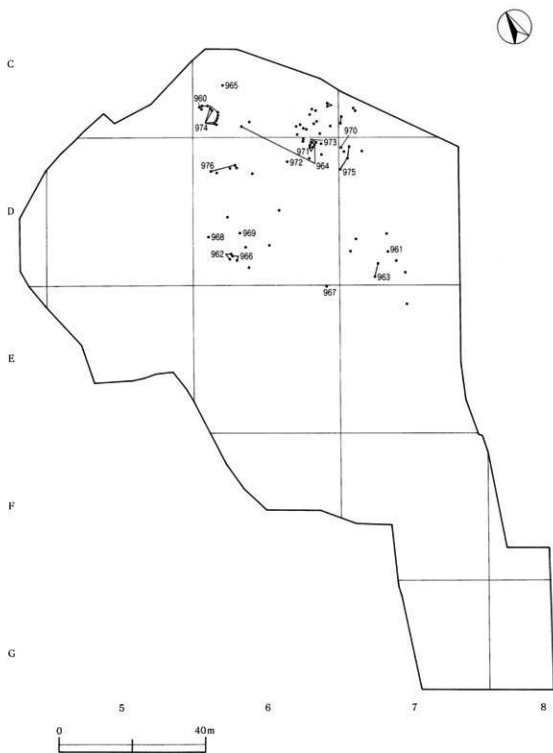
12類 (第133図960~第135図976)

主な文様は口縁部に集約される。口縁部に横位の貝殻条痕文を施し、胴部以下はケズリによる無文である。確認できた総出土点数は77点である。

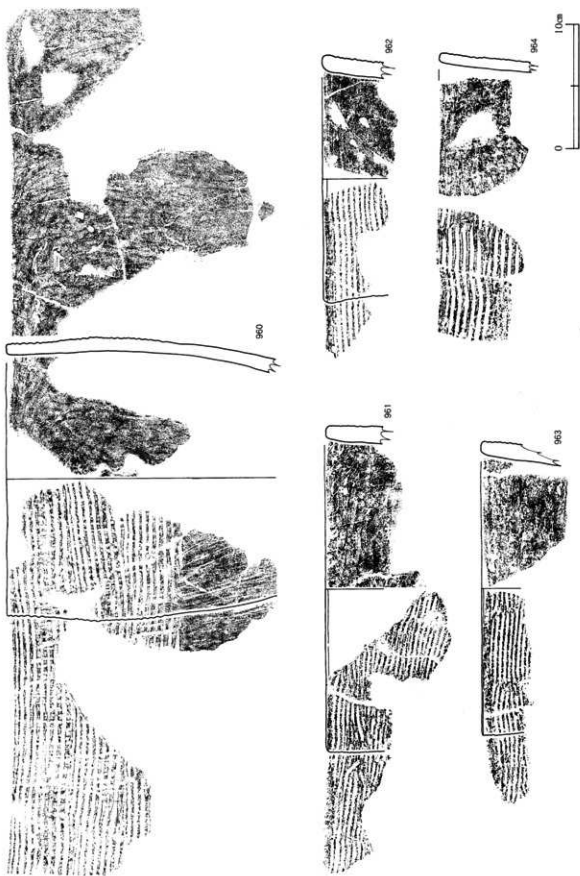
960~968は口縁部片である。960は口縁部が直行し胴部は僅かに膨らむ。口唇部は若干丸みを帯びる。文様は、口縁部に縦位の貝殻条痕文を施した後に横位の貝殻条痕文がめぐる。胴部以下はケズリによる無文である。962は口唇部が丸みを呈し口縁端部はわずかに無文部を有する。970~972は口縁部に近い部位の破片である。973はケズリ痕が顕著に見られる胴部片である。974は底部片である。外面と底面にケズリ痕が見られ、内面は丁寧なミガキが施されている。975は文様が胴部まで見られるものである。器形は、口縁部がほぼ直行し口唇部は平坦面を有する。文様は、はじめに貝殻条痕文を縦位に施し、その後胴部に横位の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なミガキが施されている。976は器壁がやや薄い。口唇部はやや丸みを呈する。文様は、横位の貝殻条痕文と縦位の貝殻条痕文とを施している。胴部以下はケズリにより無文である。



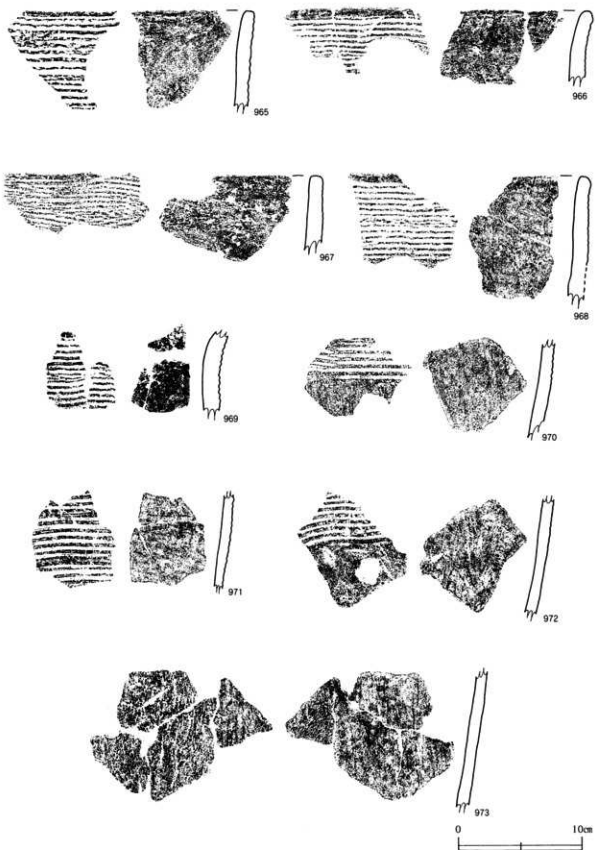
第131図 11類土器



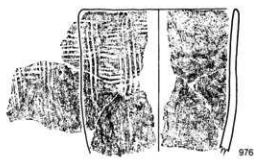
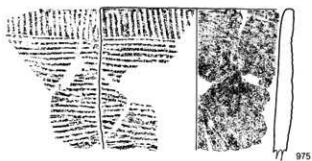
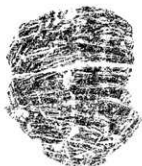
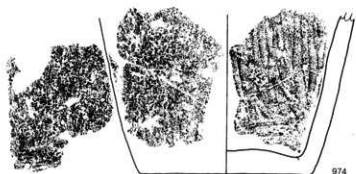
第132図 12類土器出土状況図



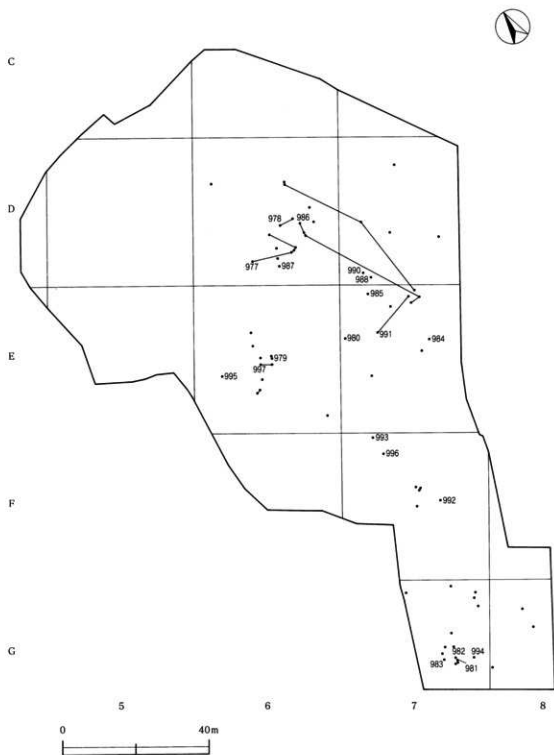
第133图 12期土器 (1)



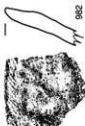
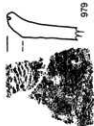
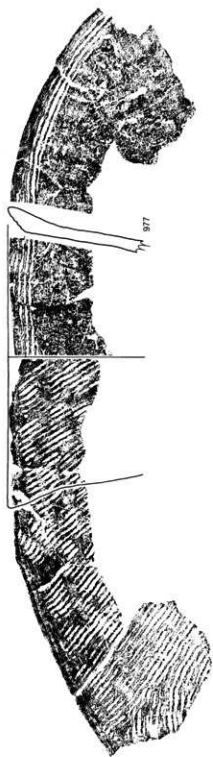
第134圖 12類土器 (2)



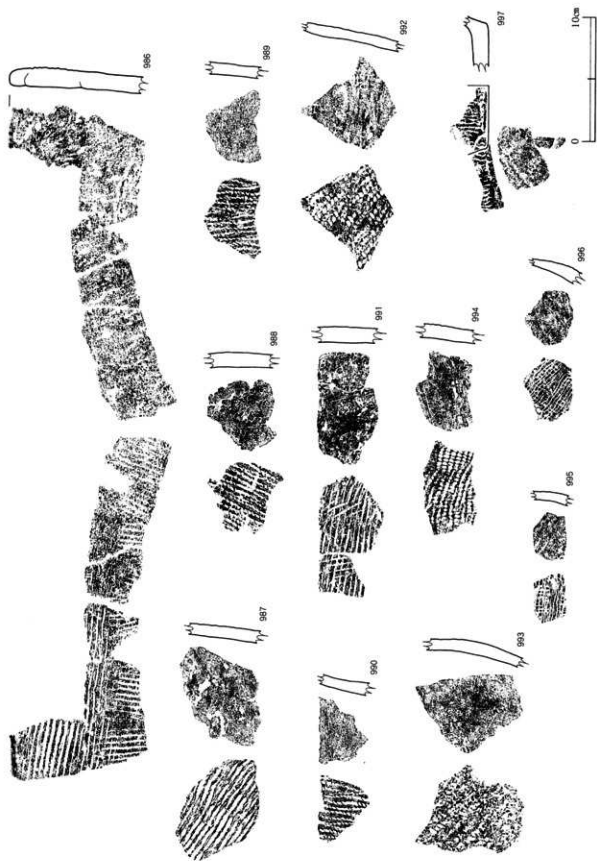
第135図 12類土器 (3)



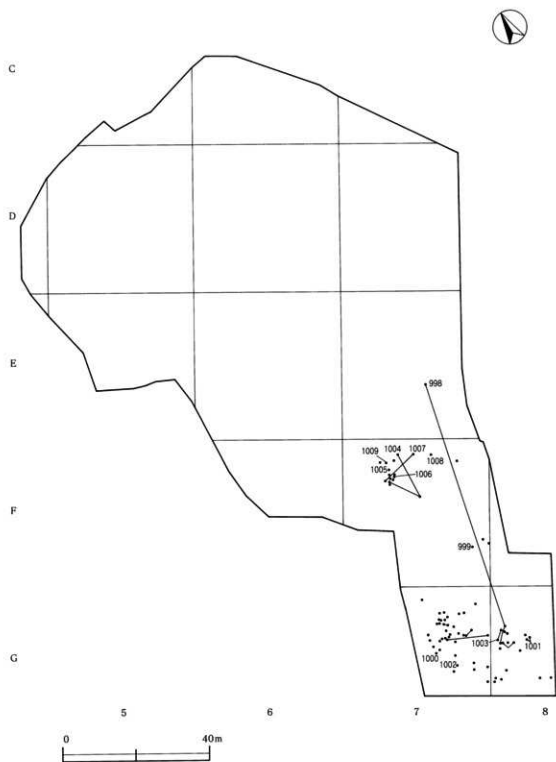
第136図 13 a 類土器出土状況図



第137图 13a類土器(1)



第138圖 13a類土器(2)



第139図 13b類土器出土状況図

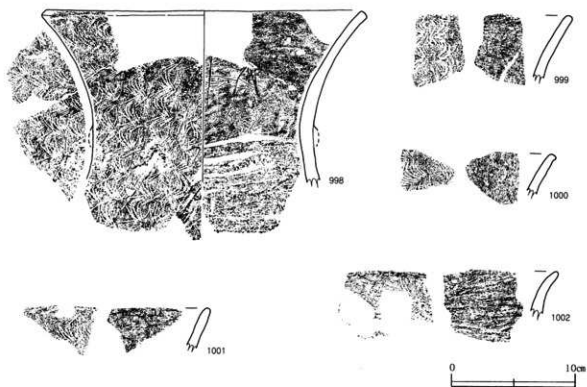
13類 (第137図977～第141図1009)

縄文・燃糸文を施す一群である。縄文・燃糸文を施すものをa類、変形燃糸文を施すものをb類と細分した。a類の総出土点数は72点、b類は81点が出土した。

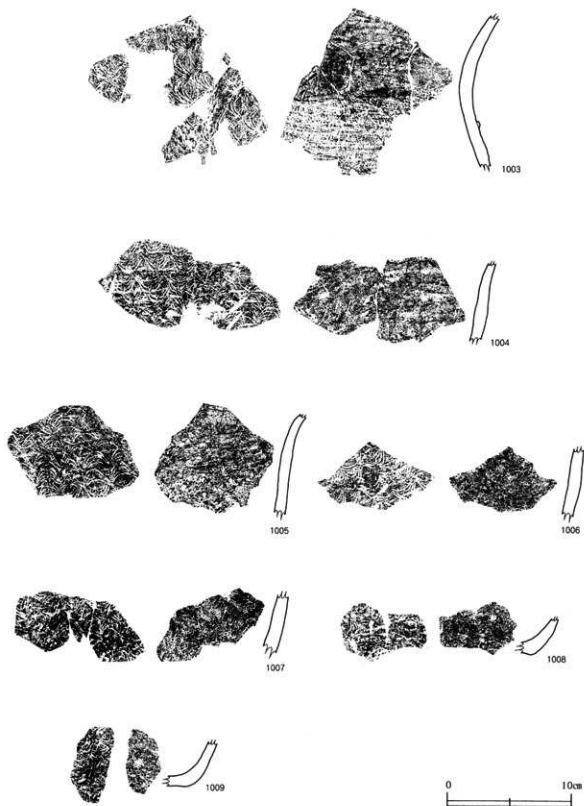
977・978は同一個体と思われる。口縁部が外反してわずかに肥厚する。口縁部内面には段を有する。施文原体ははっきりとせず、条痕状にも見える。981～983は燃糸文が一部不明瞭な部分もある。口縁部は直行して口唇部は丸みを帯びる。口縁部内面にも燃糸文が施されている。986は大型の土器と思われる。全体的に風化が激しい。土器の胎土中には砂や小礫が多量に含まれており、風化の原因もこれに起因する可能性がある。口縁部と胴部とで施文の方向を違えている。

998～1009は変形燃糸文を施すb類である。器形は、口縁部が外反し胴部は丸み若しくは屈曲するものと思われ、後述する14類の文様バリエーションの1つとも考えられる。998は口縁部が外反し、口唇部は平坦面を有する。器面に縦位の変形燃糸文が施され、内面は口縁部から胴部上半は丁寧なミガキが施される。なお、胴部外面に突起や粘土紐による鋸歯文が貼付されている。1002は口縁部が外反し口唇部はやや丸みを帯びる。1003は998と同一個体の可能性が高い。

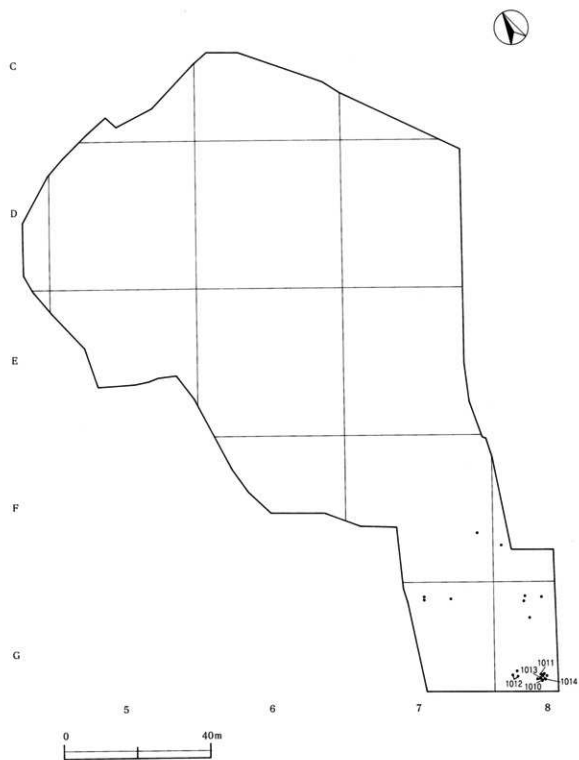
1008・1009は底部片である。底部付近の施文はやや粗い。底部から胴部への立ち上がりは、



第140図 13b類土器(1)



第141図 13b類土器(2)



第142図 14類土器出土状況図

14類 (第143図1010~1014)

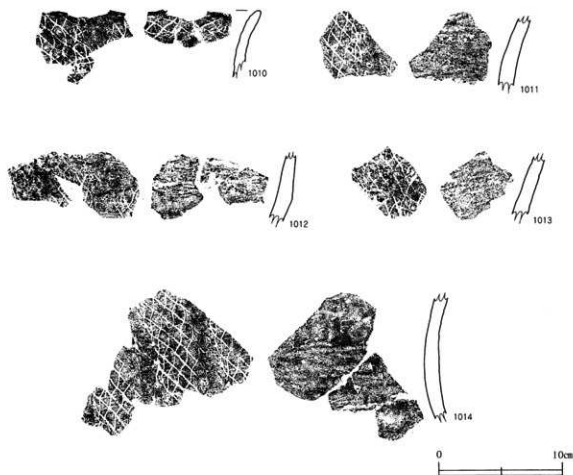
屈曲する胴部片を有する。網目燃糸文が縦位に帯状に施文されている。13類の一部と14類は同一型式の可能性がある。図化した5点は、いずれも同一個体と思われ、F-7・8区に2点出土している他は、G-7・8区に出土している。確認できた総出土点数は20点である。

1010は口縁部片である。口縁部は外反し、口唇部はやや丸みを帯びる。外面は縦位に網目燃糸文が施され、内面は口縁部のみ横位に施文が認められる。1011~1014は胴部片である。1014に屈曲部が見られる。文様は、縦位の網目燃糸文が間隔をあけて施文されている。この網目の左端には、結び目かと思われる痕跡も認められる。

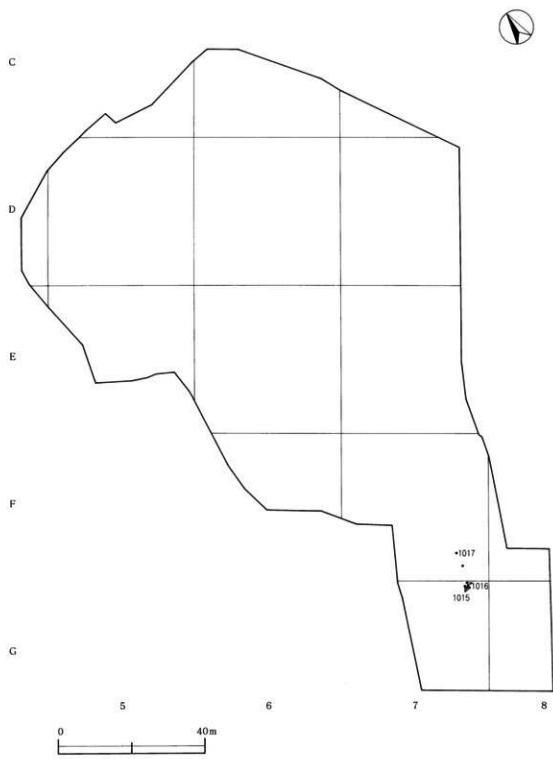
15類 (第145図1015~1018)

口縁部や胴部に突帯文が貼付されるもので、フジツボ状の突起も見られる。4工区では7地点に良好な資料が見られるが、10地点においては完形品も含めて大量に出土している土器である。8点が出土した。分布は、F・G-7区に近接して出土している。すべて同一個体である可能性が高い。

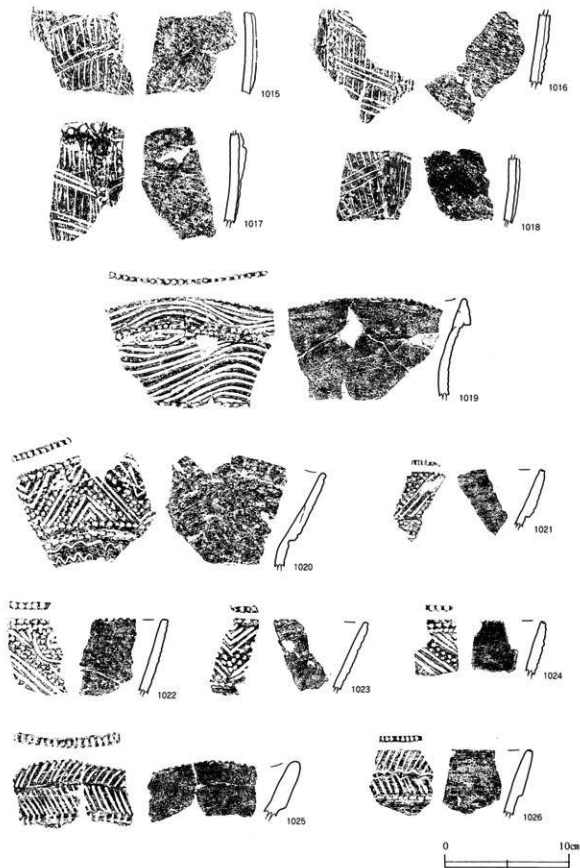
1015~1018は同一個体と思われる胴部片である。横位や縦位の突帯を施し、突帯には刻みが施される。文様は、直線的な沈線文を縦位と斜位に施文している。



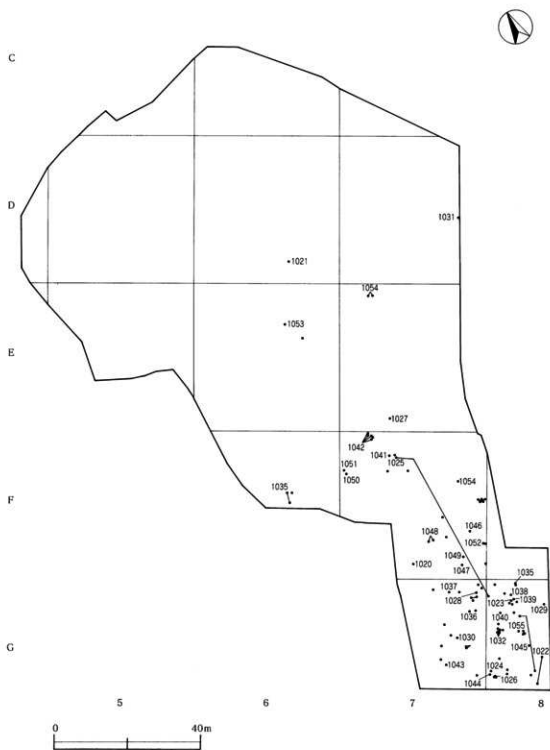
第143図 14類土器



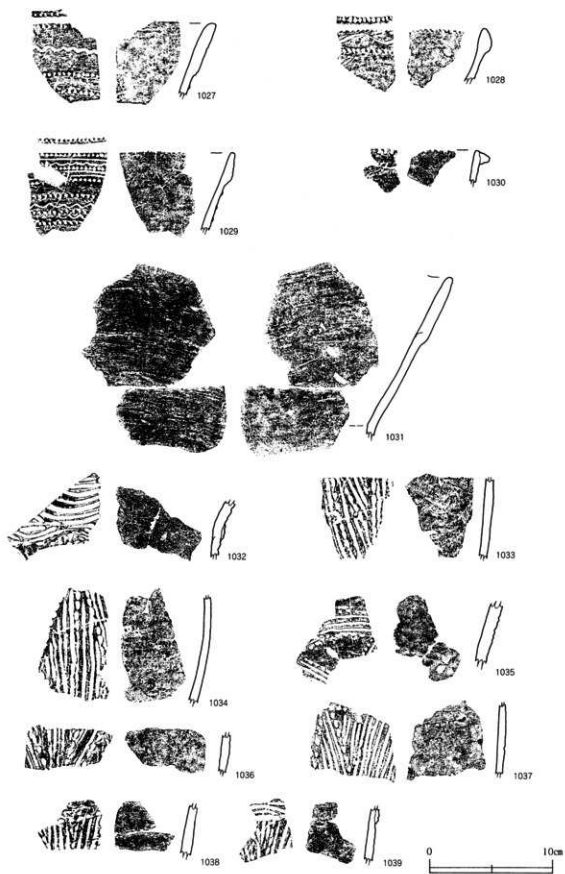
第144図 15類土器出土状況図



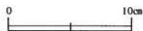
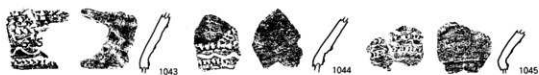
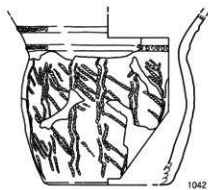
第145圖 15・16類土器



第146图 16類土器出土状況図



第147図 16類土器（2）



第148図 16類土器 (3)

16類 (第145図1019~第149図1055)

沈線文や連点文を直線・曲線的に組合せるものである。口唇部には刻目が施されている。器種には、深鉢形土器(1019~1049)と壺形土器(1050~1055)の2種類がある。確認できた総出土点数は95点である。

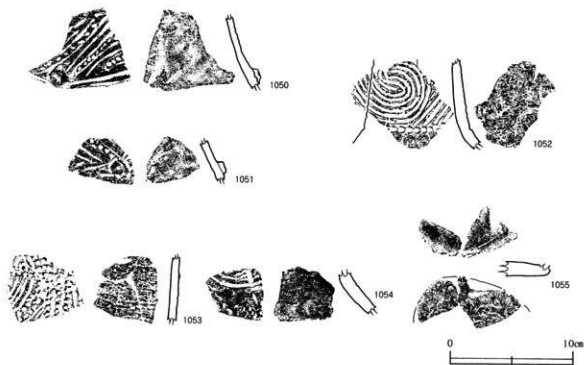
1019~1031は口縁部片である。1019は波状口縁で口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させる。1020・1021は口縁部が幅広く肥厚する。1025・1026は肥厚させる口縁部に沈線文を羽状に施される。1030は口縁端部に台形状の突帯文がめぐる。1031は無文の口縁部片である。全体をケズリにより成形調整している。1032~1049は胴部片である。

1050~1055は壺形土器である。基本的な文様構成は深鉢形土器と大差ない。1050は頸部片である。フジツボ状の突起が見られる。1052は頸部片である。沈線による渦巻き文が施されている。1055は底部片である。厳密にこの類に属するかははっきりとしないが、底部の形態が楕円形状を呈することからここに分類した。

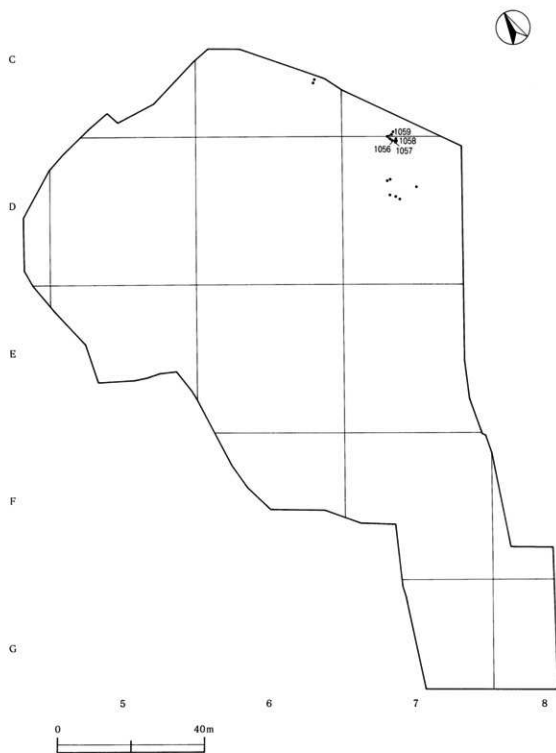
17類 (第151図1056~1059)

口縁部が外反し、短い貝殻刺突文を施すものである。C・D-7区境にまとまりがあり、このほかにC-6区でもわずかに出土している。1個体のみ出土である可能性が高い。17点が出土した。

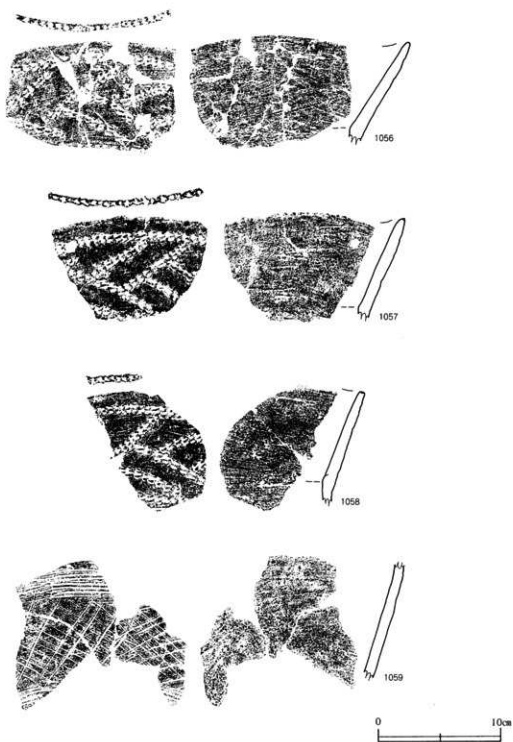
1056~1058は近接して出土していたが接合しなかった。1059は細沈線文を横位に多条施し、その間に格子状に沈線文を施している。右上がりの沈線は2本1組を意識しているものと思われる。



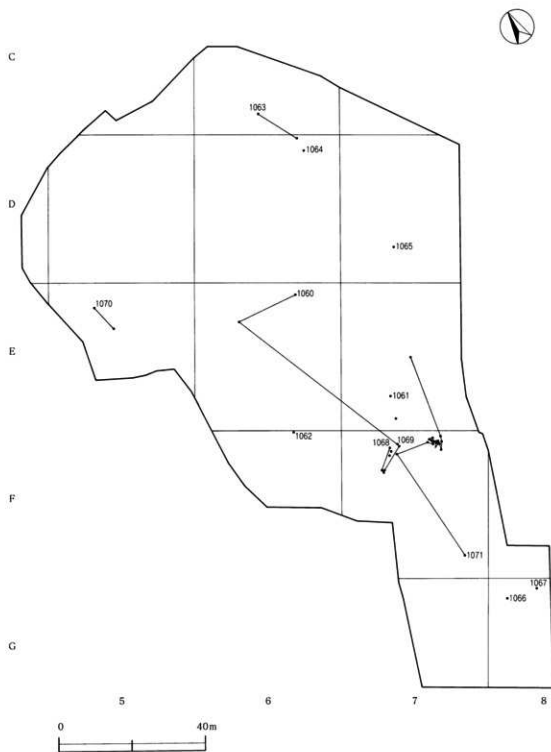
第149図 16類土器(4)



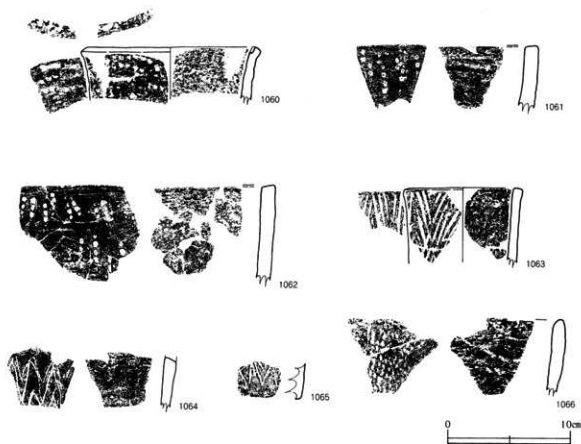
第150図 17類土器出土状況図



第151図 17類土器



第152図 18類土器出土状況図



第153図 18類土器（1）

18類（第153図1060～第154図1071）

1～17類までに分類できなかった資料を一括した。37点をこの類に分類した。

1060～1062は口縁部に連点文が施文されている。1060は口縁部がわずかに外反し、口唇部が平坦面を有している。1061と1062は同一個体であると思われる。口縁部はわずかに内湾して口唇部は平坦面を有する。

1063は小型の土器である。貝殻条痕文が鋸歯状に施文されている。

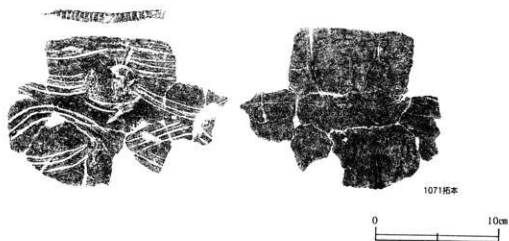
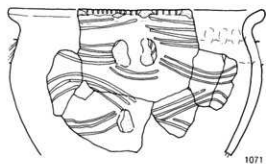
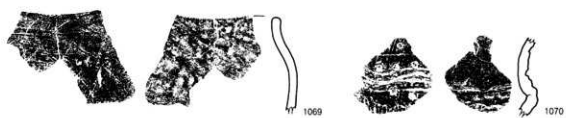
1064・1065は沈線が鋸歯状に施されている。

1066は刺突文が施されている。11類に近いがはっきりとしない。

1068・1069は貝殻刺突文が鋸歯状に施文される。口縁部径よりも胴部径が大きい。器面には炭化物が密に付着している。

1070は、口縁部を欠損するが、外反して胴部で屈曲する器形になると思われる。縦位の条痕がわずかに認められ、その上半裁竹管状の刺突が見られる。胴部の屈曲部周辺には、横位の沈線文がやや波状に施文されている。

1071は鉢形に近い器形を呈する。口縁部は僅かに波状を呈する。口縁部は強く外反し、胴部は膨らむ。胴部には取っ手状のものが上下に付着している。文様は、沈線文を基本とし突起を軸にこれを弧状に施している。焼成は良く、部分的に炭が付着している。F-7区を中心に破片が出土し、接合の直線距離は約50mを測る。



第154図 18類土器 (2)

(2) 土器加工品

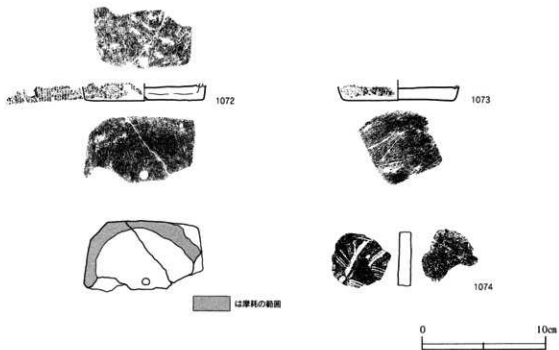
土器加工品としたものは、2つに分けられる。1つは、円筒形・角筒形の底部片の中央に擦りによる窪みが見られるものである。3点出土しこのうち2点を図化した。擦りは、その形状から回転運動によって土器焼成後に生じたものである。また、特に窪みを有する面は摩耗が激しい。なお、このような資料は15号竪穴住居跡からも出土している。

もう1つは、いわゆるメンコと称されているものである。9類土器の胴部片の縁辺を打ち欠いて円形に加工しているものである。1点のみの出土である。

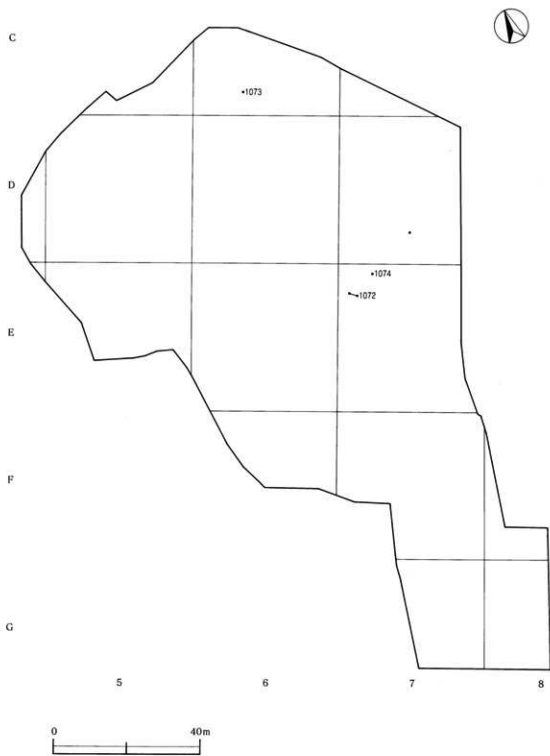
1072は3類土器の底部片で、角筒形である。底面のほぼ中央部に未貫通の孔がみられ、これを有する面は、土器片の外周部において摩耗が激しい。

1073は3類土器の底部片で円筒形である。底面の中央よりやや外れた位置に未貫通の孔が見られる。

1074は9類土器の胴部片の外周を面取りして円形に成形しているものである。



第155図 土器加工品



第156図 土器加工品出土状況図

(3) 石器

縄文時代早期の石器は、土器と同様にⅥ層からⅩ層上面に至るまで出土した。この中でも、Ⅵ層とⅦ層が主体をなす。土器の出土状況から、Ⅵ層は前葉までしかのぼることは考えにくく、中葉から後葉の可能性が高い。Ⅶ層以下に関しては、中葉の土器群も出土することから断定的な絞り込みは出来ないものの、前葉段階の可能性が高いものが多いものと思われる。ここでは、Ⅶ層以下の石器とⅥ層出土の石器とを分けて報告していきたい。

1. Ⅶ層以下の石器

①石鏃 (第158図1075～第159図1090)

石鏃は17点出土しこの内16点を図化した。重量や挟りの状態などで細分される。1075～1087は比較的小型のものである。この中でも1075は最も小型のものである。黒曜石を素材としたものが多いが、1082は頁岩製で1083はハリ質安山岩を素材としている。1075は主要剥離面を器面に残す。1076は薄手の石鏃でチャート製である。1078は黒曜石製でわずかに挟りが見られる。1081は、一部に主要剥離面を残して均一な剥離が施されるものである。1082は、扁平な剥片を素材として挟りと片側辺に加工を施すが残りの側辺には加工が見られない。1084は、自然風化面を一部に残す。わずかに使用痕が見られ、石鏃外の可能性もある。1085は両基部を欠く。1088・1089は気泡を多く含む黒曜石製で、大型で厚みがある。出土地がG-7区であることから、中～後葉のものである可能性が考えられる。1090は風化が激しい。

②石匙 (第159図1091)

石匙は、1点出土した。分布がG-8区であることから、中～後葉段階の可能性が高い。素材はハリ質安山岩を用いている。

③楔形石器 (第159図1092)

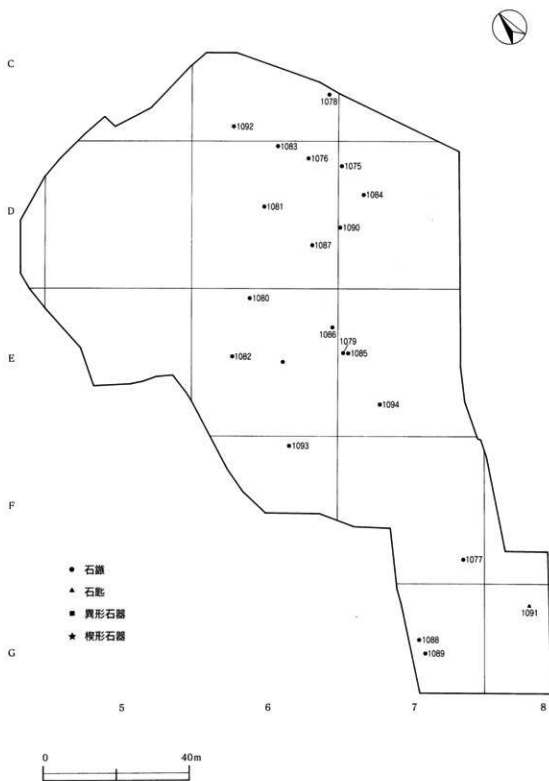
楔形石器は1点出土した。C-6区から出土している。黒曜石を素材として対向する剥離を有している。剥離面は激しくつぶれたような状況であった。

④異形石器 (第160図1093・1094)

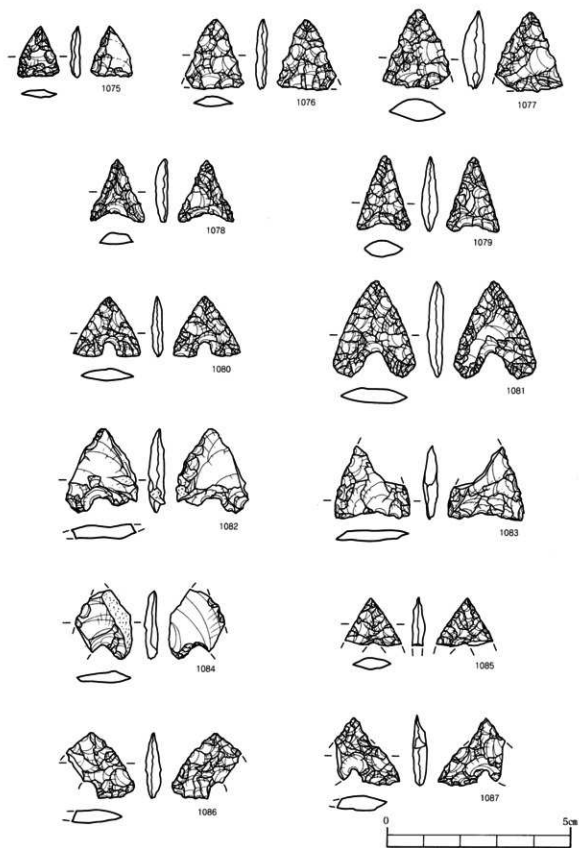
異形石器としたものは、2点出土し2点とも図化した。1093はチャート製のもので丸みがある。1094はチャート製で、表裏面共に摩擦が著しい。いわゆるトロトロ石器と称されるものに属する。Ⅶ層中からの出土であるが、これまでの出土例などから中葉の可能性が高いのではないだろうか。

⑤石核 (第160図1095～第163図1101)

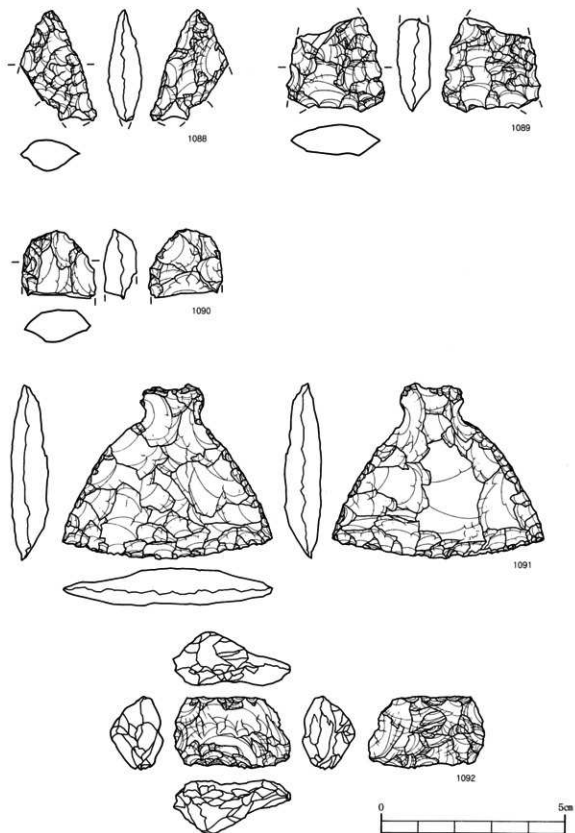
石核は、7点出土した。1095は自然面を残している。1097は気泡を多く含む黒曜石である。裏面に自然面を残しており、転石状のものであったと思われる。1098は風化面を有する角礫である。このような角礫は転石ではなく原産地に近い露頭などでの採取品の可能性が高い。1099は風化が激しい。1100は自然面を多く残している。



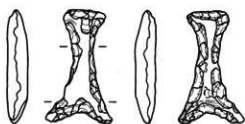
第157図 石器出土状況図(1)



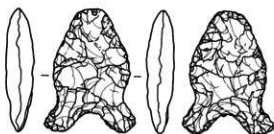
第158圖 石器 (1)



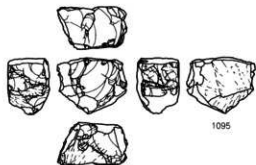
第159図 石器 (2)



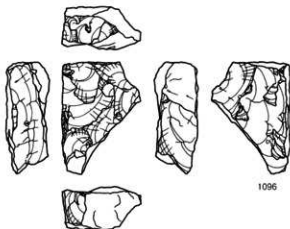
1093



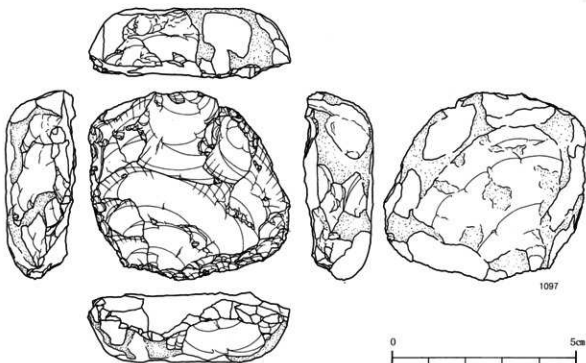
1094



1095



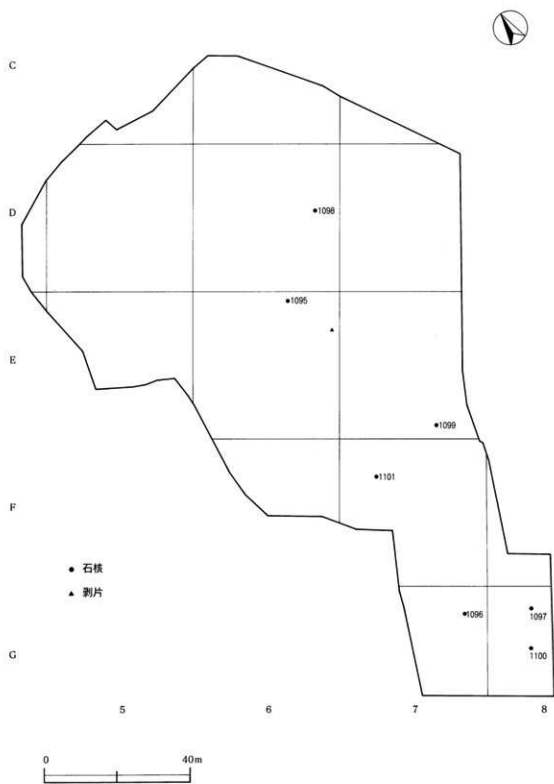
1096



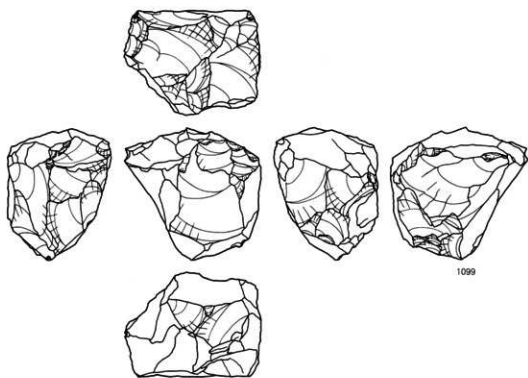
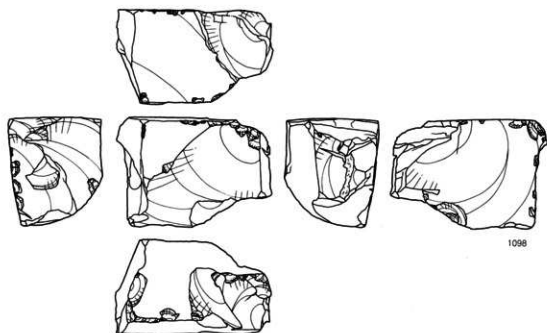
1097



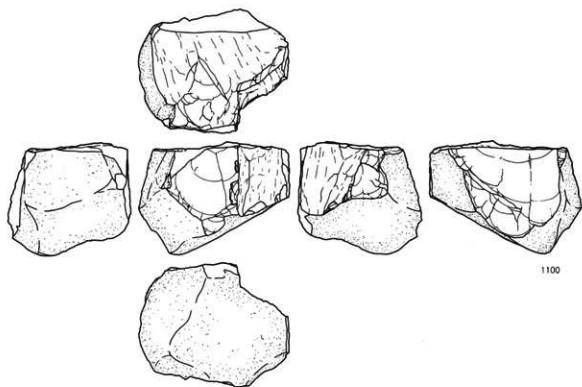
第160図 石器 (3)



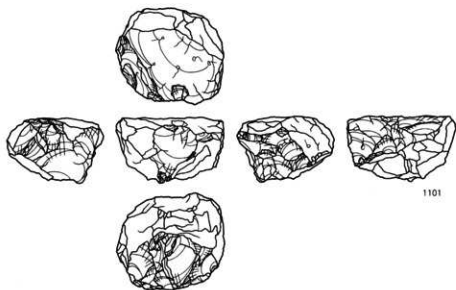
第161図 石器出土状況図(2)



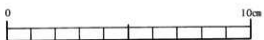
第162圖 石器 (4)



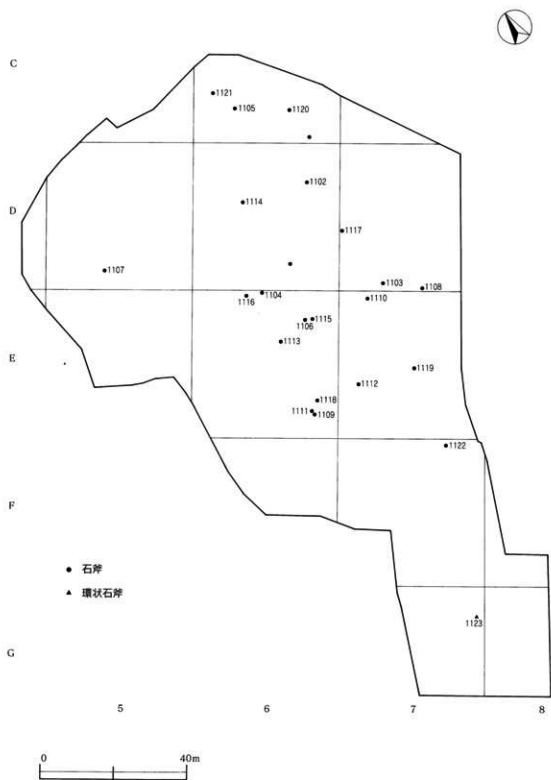
1100



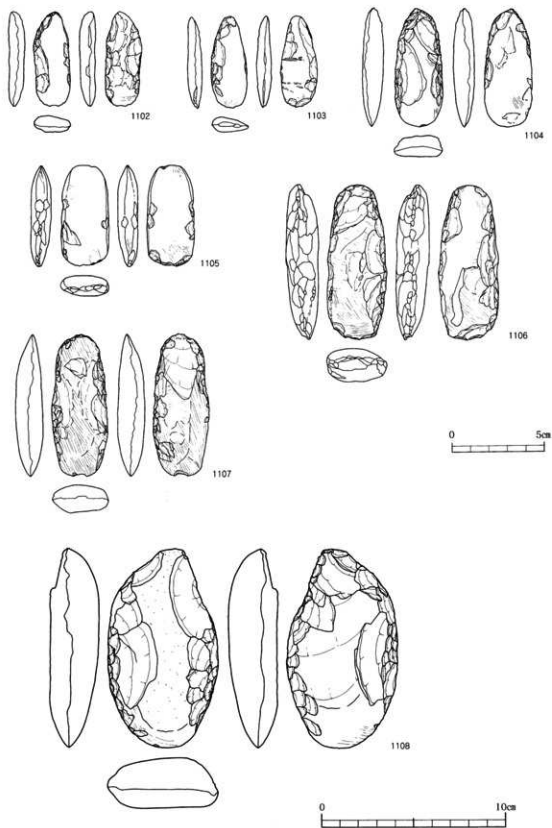
1101



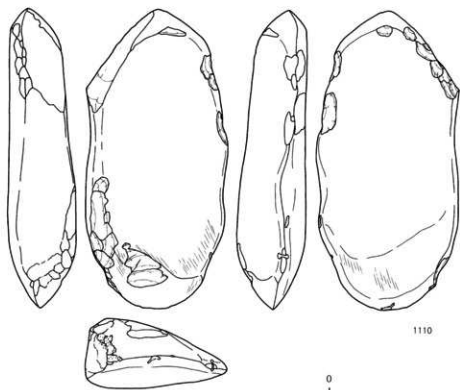
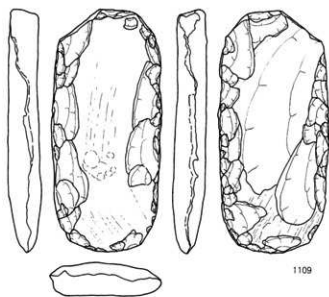
第163図 石器 (5)



第164図 石器出土状況図(3)



第165図 石器 (6)



第166回 石器 (7)

⑥石斧 (第165図1102～第170図1123)

石斧は24点出土し、22点を図化した。小型のものや、環状石斧などが見られる。これらの内、環状石斧はその分布から中・後葉段階のものと思われる。

1102・1103は5cm程度の小型のものである。1104は刃部を入念に磨きわずかに丸みを呈するもので基部がやや尖る。1105は砂岩製である。刃部はわずかに丸みを呈し側面の中程に横位の擦痕が見られる。1107は硬質な頁岩製である。両頭状であり、使用によると考えられる剥離などが観察される。1108は頁岩製である。ざらついた感触がするがわずかに磨きの施されているものである。1109は短冊状を呈するものである。やや風化している。1110は砂岩製のものである。原石の形状を大幅に加工することなくわずかな剥離と磨りによって刃部を形成している。1111は短冊状を呈するが1109と比べてやや肉厚である。側面は敲打整形の後に磨りによって平坦面が形成されている。1112は荒い磨り痕が見られる。磨りを切る剥離と切られる剥離が見られる点や刃部に該当する部分に複数の剥離が施されていることから再加工を行っている段階の石斧であると思われる。1113もこれに類似する。1114は頁岩製のものである。1115は大型の石斧片である。刃部を欠損する。頁岩製で、敲打により抉りを出している。

1116～1119はノミ状に近い形状を呈するものである。側面を敲打により整形している。刃部欠損後と思われる荒い研ぎ直しが見られる。また、側面の中程には横方向の擦痕が、基部には剥離痕が観察される。1117は頁岩製で、節理面で剥離した素材を利用している。1118は、刃部が欠損しているが長方形の素材を用いていることから、ノミ状に近い刃部を形成していた可能性が考えられる。1119は刃部が片刃に近く丸ノミ状を呈するが、裏面が平坦なために厳密な意味での丸ノミ状ではない。一部に素材の礫皮面を残し、刃部周辺の研磨は特に入念に行われている。なお、刃部は刃こぼれの後研ぎ直しを行っている可能性が高い。1120はやや脆い頁岩製である。刃部方向からの加撃で欠損している。側面に敲打痕が確認せず、また明瞭な磨りも見られないことからあるいは未製品の可能性も考えられる。1122はやや硬質な頁岩製である。自然面を多く残しており、荒削りの状態である。右側面にわずかな敲き痕が見られる。

1123は環状石斧である。1/2を欠損している。中央部分には両側からの穿孔が施されている。

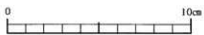
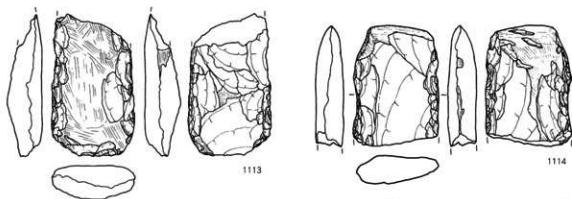
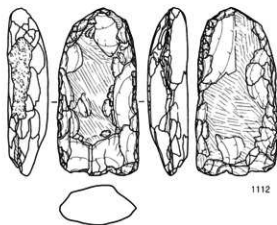
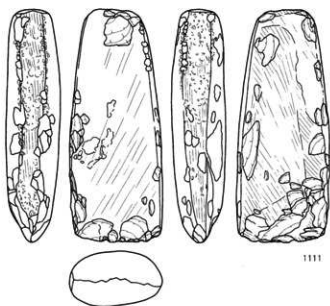
⑦礫器 (第172図1124～第179図1156)

一辺のみに加工を施すものをA類、二辺以上に加工を施すものをB類と細分した。これらは礫の形状や断面の状態、刃部の製作や使用痕の状態などによってより細分される。A類は47点が出土し、B類は19点が出土している。

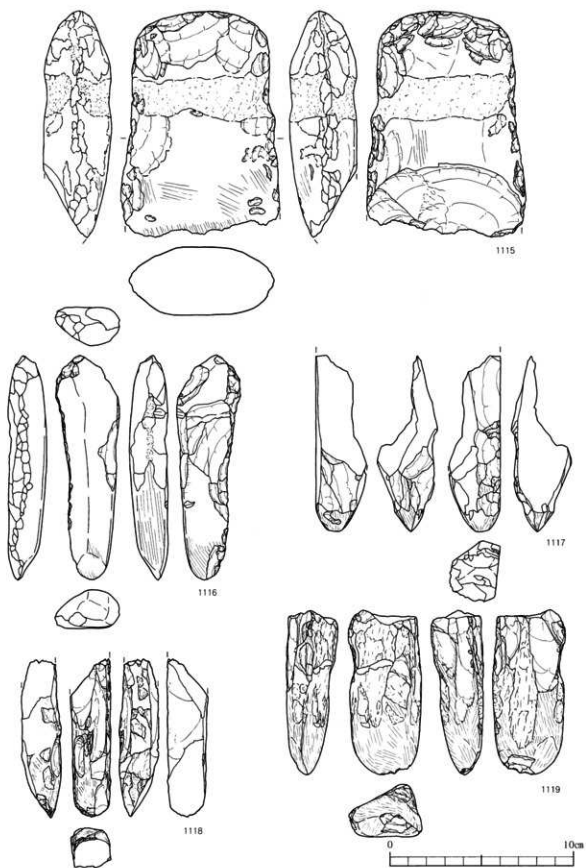
礫器A (第172図1124～第175図1140)

1124～1140はA類である。これらは、断面がはっきりとした逆三角形のもの(1124～1131)とやや扁平なもの(1132～1136)、礫の形状が三角形で小型のもの(1137・1138)と大型のもの(1139・1140)とに細分できる。

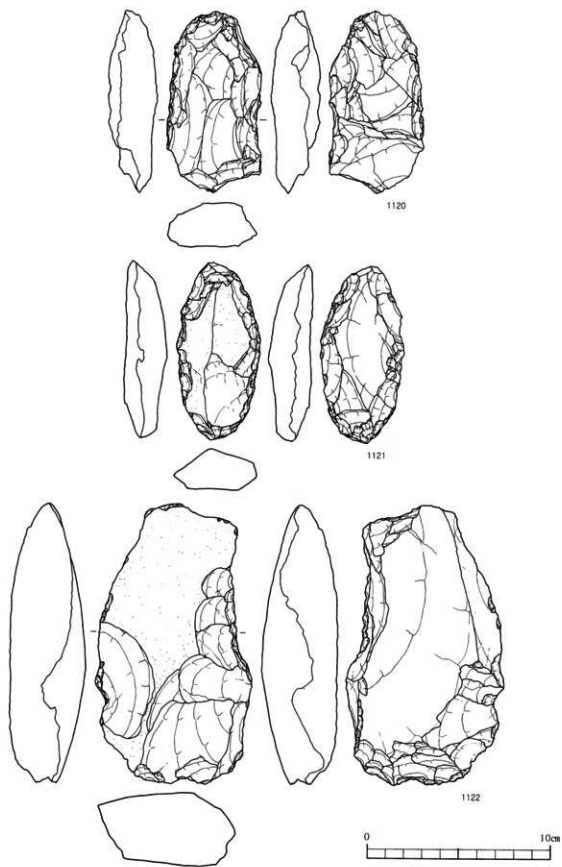
1124は断面が逆三角形を呈し素材の鋭い一辺に小さな剥離を施して刃部を形成しているものである。1125は大型の安山岩を素材としたものである。1127は片面からのみの剥離で刃部を形成している。1129もこれに類似したものである。1131は小さな剥離で刃部を形成しているが、刃部は摩



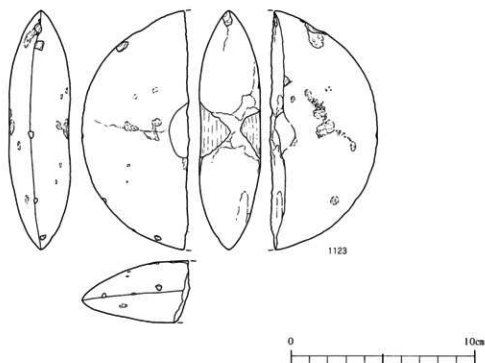
第167图 石器 (8)



第168圖 石器 (9)



第169図 石器 (10)



第170図 石器 (11)

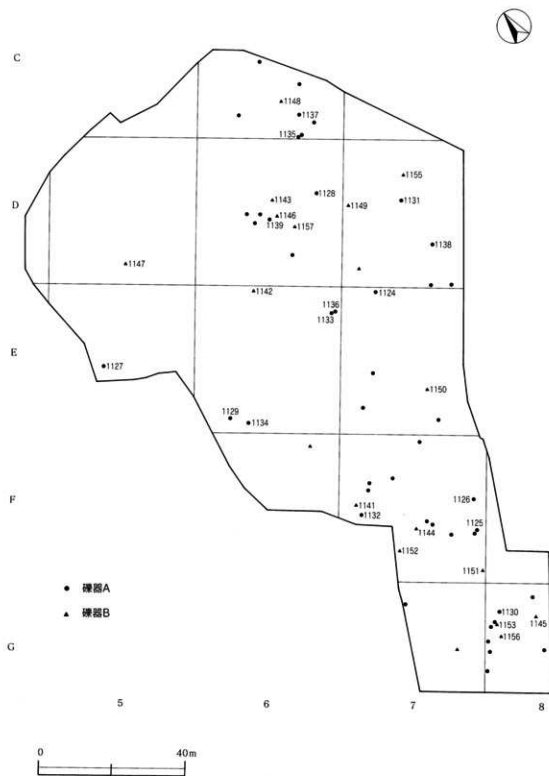
減がやや激しい。1133は扁平な安山岩を用いている。1135はやや曲刃状を呈する。1131等と同様に刃部周辺の摩耗が激しい。1136は大型のもので比較的薄い素材を用いている。刃部は他の資料とするとさほど摩耗はしていない。

1137・1138は礫の形状が三角形状を呈している。刃部は細かな剥離によって作出されているが、1137は著しく摩耗しており、剥離の状況はほとんど読みとれない。このような摩耗はこの資料に限ったものではなく、礫器に分類したものには多く見受けられるものである。1139・1140はやや大型の三角形状を呈するものである。1139は素材の鋭利な部分をそのまま刃部として使用している可能性が高く、この周辺には摩耗が観察されている。1140は緻密には三角形状ではない。

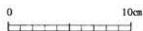
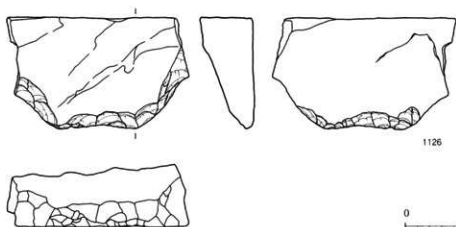
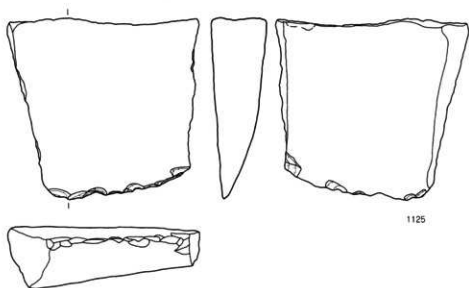
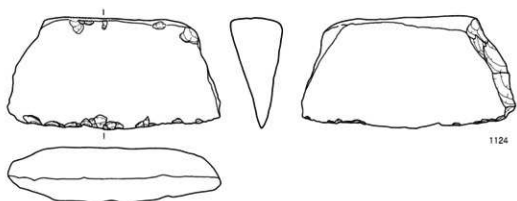
礫器B (第176図1141～第179図1156)

1141は刃部の対面に表面からのみの剥離を施している。1142は扁平な素材を用いている両側の縁辺には著しい摩耗が見られる。1143も同様の摩耗が見られる。1144はほぼ全面に剥離を施しており、摩耗はあまり観察されない。表裏面に部分的に滑らかな部分が認められる。1145は断面が三角形状の素材の鋭い両辺に細かな剥離を施して刃部としているものである。1146は薄い素材を用いて刃部は尖る。縁辺には摩耗が観察される。1148は風化が激しい。桃色や鼠色の色調を呈している。加熱による変色であろうか。1149は扁平な安山岩素材の縁辺に加工を施したものである。刃部を中心に全体的に摩耗が確認される。1150は断面三角形の両側辺が鋭利な素材を用いたものである。両端部に剥離が見られる。

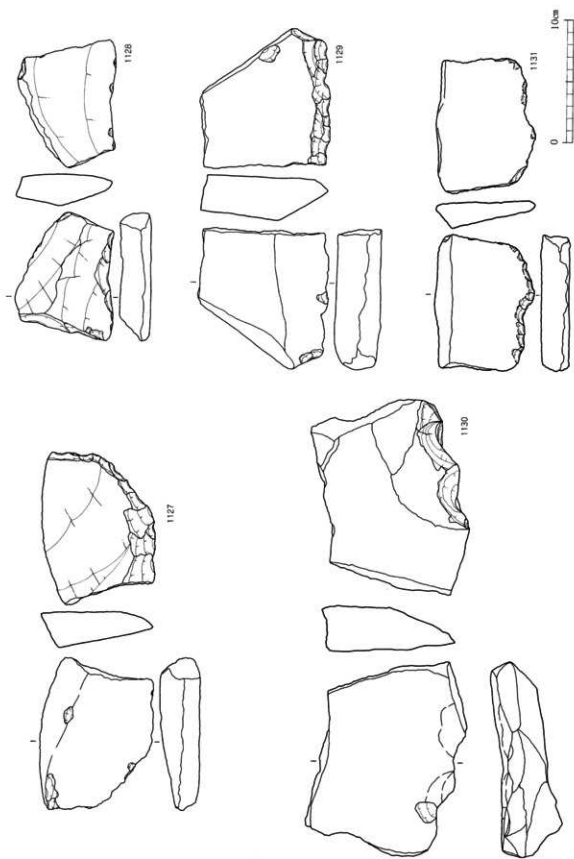
1151は扁平な素材を用いて曲線的な刃部を作出している。明瞭な摩耗等は確認されなかった。1153は頁岩製である。自然面を裏面に大きく残す。原石より剥離された時点で生じた鋭い一辺に細かな剥離を加えて刃部を形成している。1154は頁岩である。自然面を残している。縁辺に細かな剥



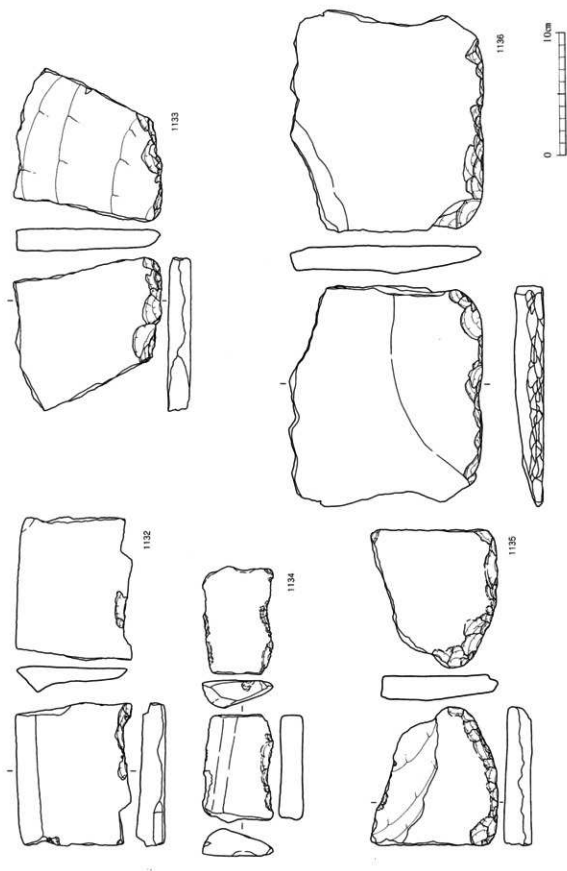
第171図 石器出土状況図 (4)



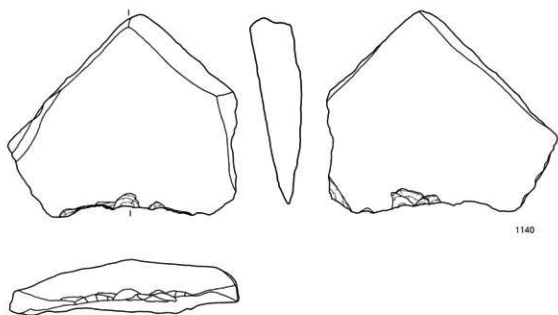
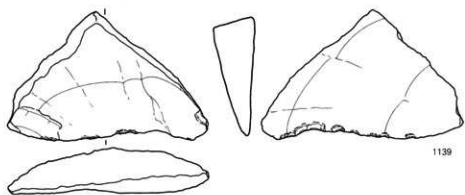
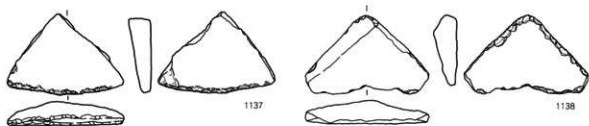
第172図 石器 (12)



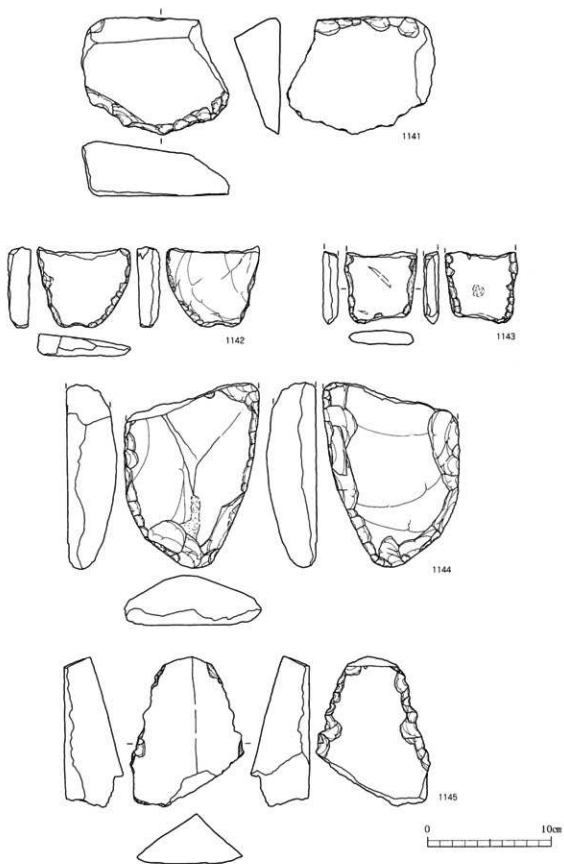
第173圖 石器 (13)



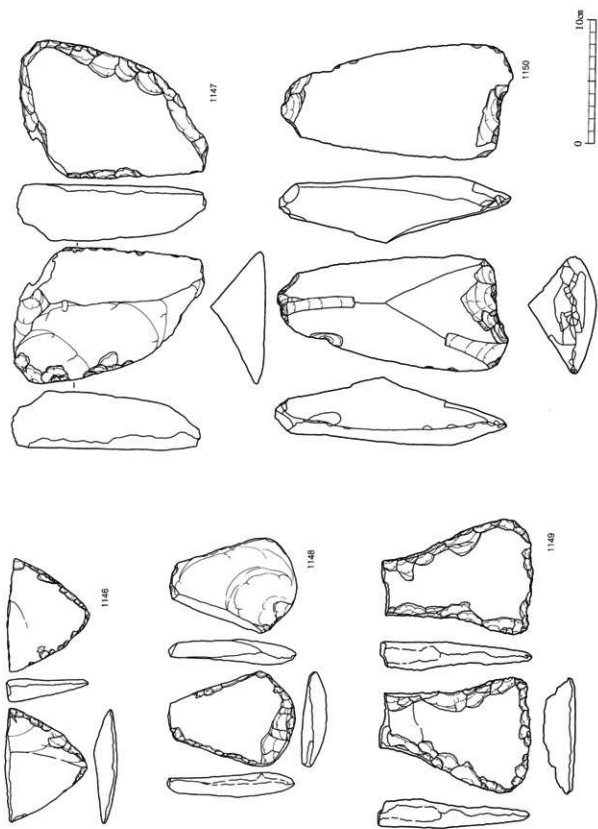
第174圖 石器 (14)



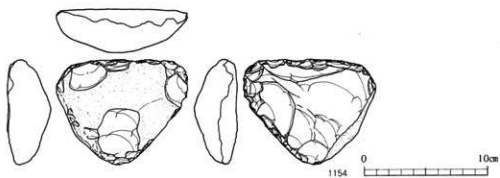
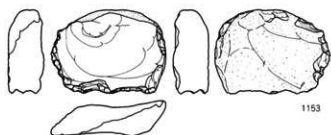
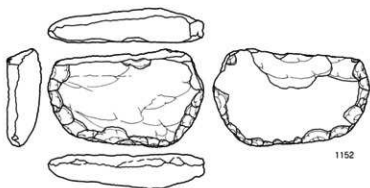
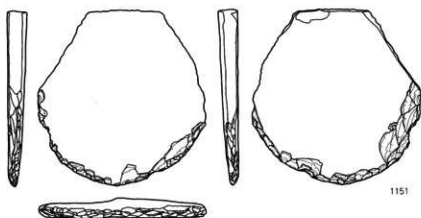
第175図 石器 (15)



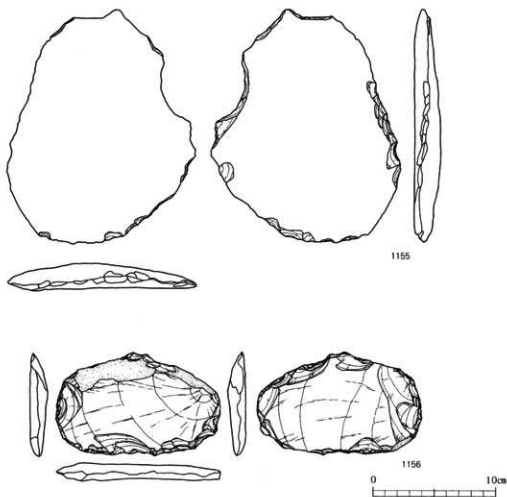
第176図 石器 (16)



第177圖 石器 (17)



第178図 石器 (18)

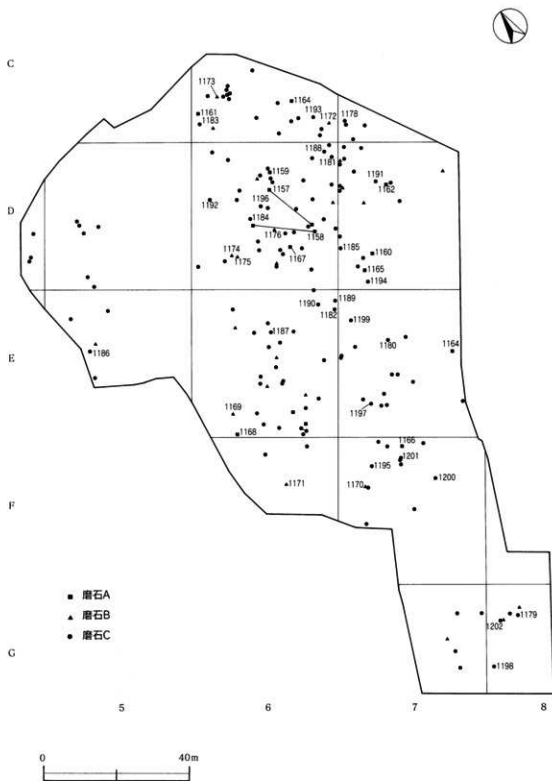


第179図 石器 (19)

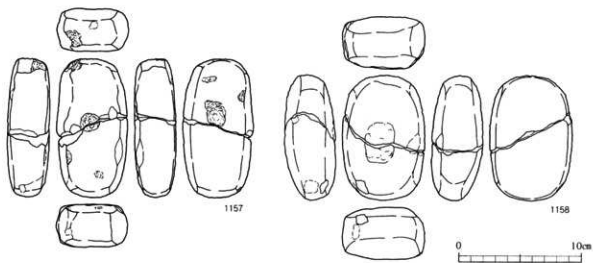
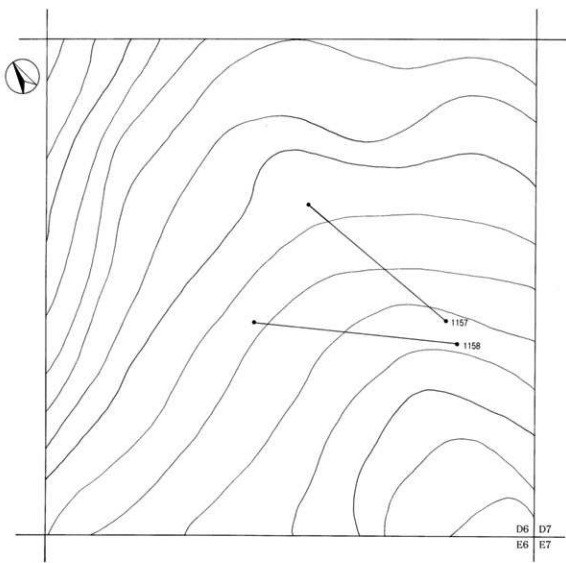
離を施し、礫の形状が三角形状を呈する。1155は薄い素材を用いている。細かな剥離が刃部に施されている。1156は頁岩で、自然面を残している。

⑧磨石類 (第181図1157～第189図1202)

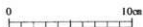
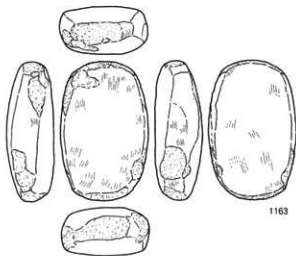
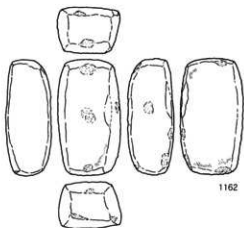
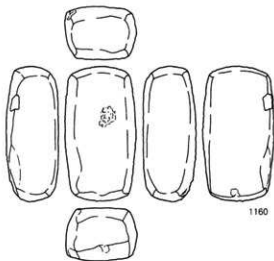
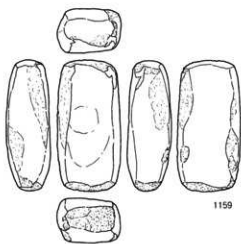
磨石類は礫の形状で分類を行った。円礫を素材とするが使用などによって方形形状を呈するものをA類、円形や楕円形状のもので小型のものをB類、拳大前後のものをC類と細分を行った。大半の資料が安山岩を用いている。このほかに少数ながら砂岩や石英斑岩などが含まれる。A類としたものは、その分布から2・3地点の中でも3類を中心とした前葉段階の土器に伴う可能性が高い。



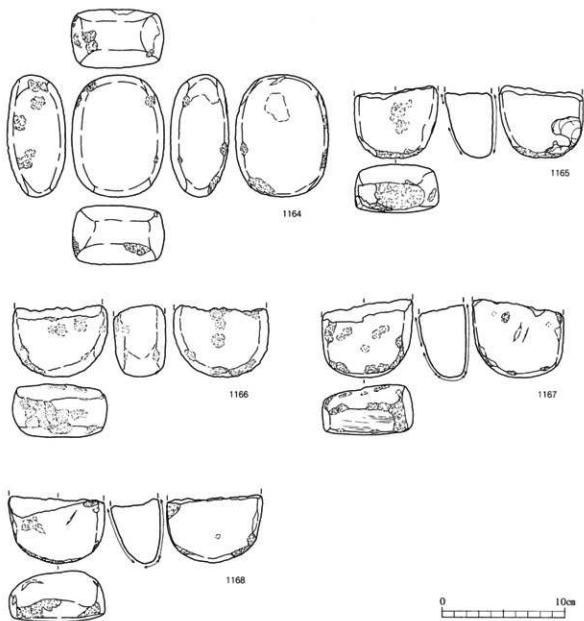
第180圖 石器出土状況圖 (5)



第181回 石器 (20)



第182図 石器 (21)

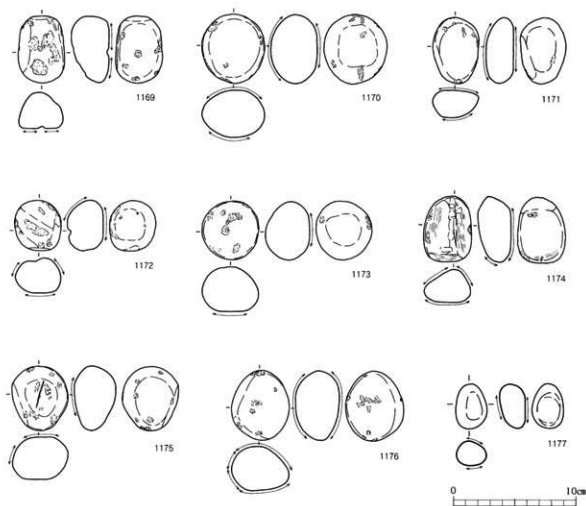


第183図 石器 (22)

磨石A (第181図1157～第183図1168)

方形状のものである。六面体を呈する。正面観が長方形のものと隅丸状に膨らんだ長方形状のものがある。14点が出土した。

1157・1158はD-6区において出土し、両者共に約15m離れた資料と接合している。1157の中央部には窪みが見られる。1159は長・短軸の敲き痕が著しい。1161・1162は礫中央部に敲きによる窪みが見られる。1163は石英斑岩製のもので、表裏面において磨痕が顕著に見られる。1165～1168は破片である。



第184図 石器 (23)

磨石 B (第184図1169～1177)

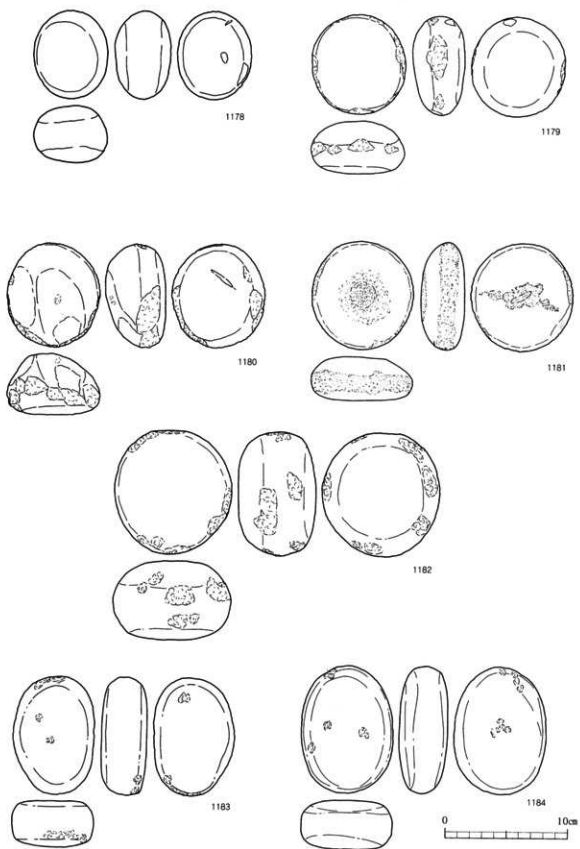
小型の磨石である。A類やC類と比べると出土量は少ない。小型の礫を用いていること以外は、磨りの痕跡や敲きあるいは窪みといった痕跡も確認できるため、実際はA類やC類と用途的にはさほど変化はない可能性が考えられる。24点が出土した。

1169は裏面が平坦を有し、この部分は磨りの痕跡が他の部分と比べた場合に多い。磨り込んだ結果として平坦面を呈しているのかもしれない。1172は緩やかな三角形の断面を呈しており、三面で構成されている。この三面共に磨り痕が観察された。

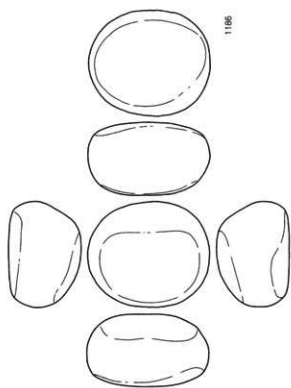
磨石 C (第185図1178～第189図1202)

円形や楕円形などの円礫を素材とした磨石である。144点が出土した。

1178～1182は円形に近いもの、1183～1195は楕円形に近いもの、1196～1202は円礫であるがやや不定形のものに細分される。これらは細分の別なく磨り・敲き・窪みが観察されることから同一のものとして取り扱った。1181は、側面の敲きが全周にめぐる。表面には円形の窪みが裏面にはやや直線的な窪みが観察される。1191は表裏面に磨りが見られ、中央部にはわずかに敲打の跡が見られる。1192は砂岩製で、表裏面共に左上部に著しい磨面を持つ。この部分が

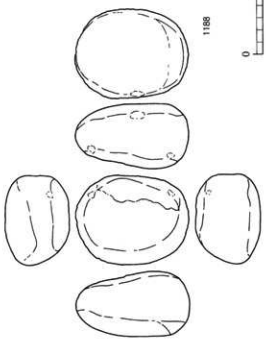


第185図 石器 (24)



1186

1185

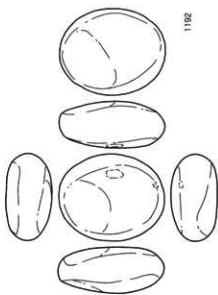
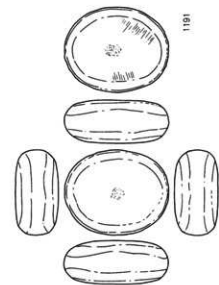
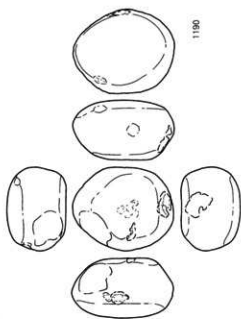
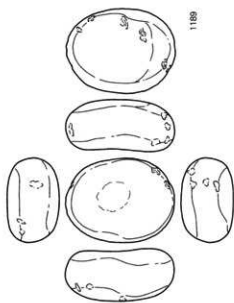


1188

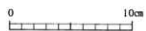
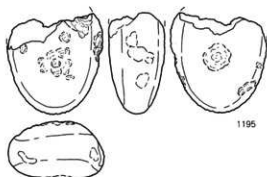
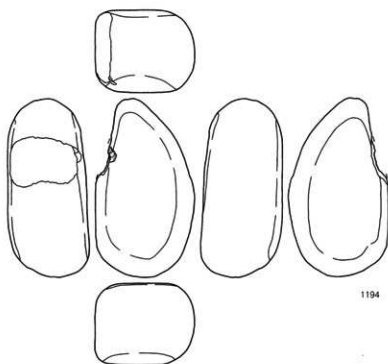
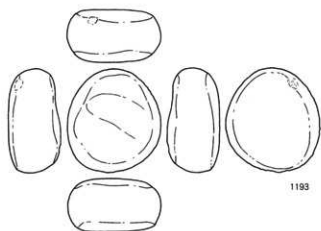
1187



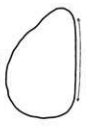
第186圖 石器 (25)



第187圖 石器 (26)



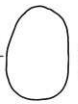
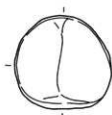
第188圖 石器 (27)



1196



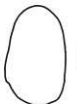
1197



1198



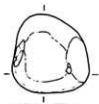
1199



1200



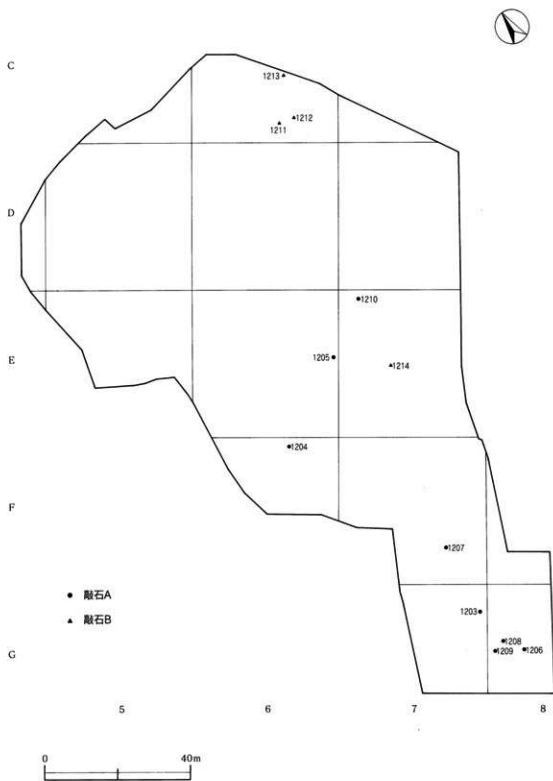
1201



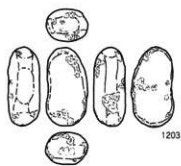
1202



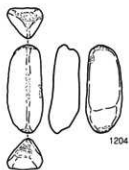
第189図 石器 (28)



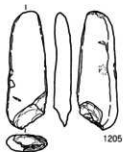
第190圖 石器出土狀況圖(6)



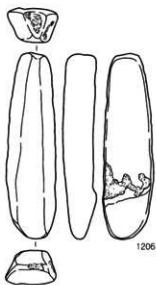
1203



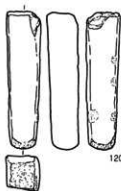
1204



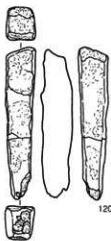
1205



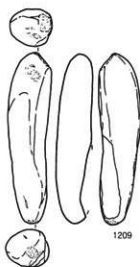
1206



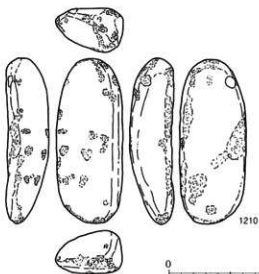
1207



1208



1209



1210



第191图 石器 (29)

集中的に使用されたと思われる、わずかな稜線さえも見受けられる。

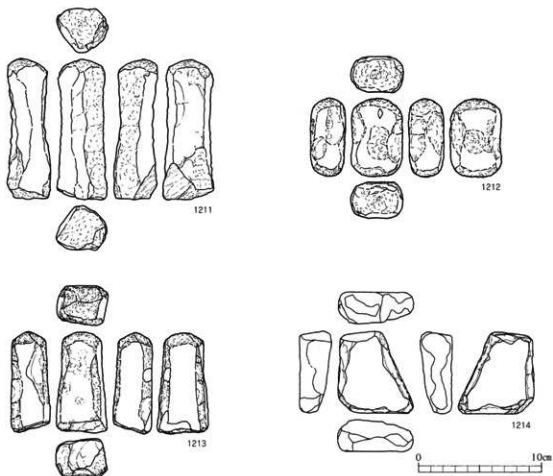
⑨敲石類 (第191図1203～第192図1214)

棒状の礫を使用しその先端部に敲打痕の見られるものをここに分類した。端部に敲打痕のあるものをA類、敲打痕が礫全体に見られるものをB類とした。B類が敲石であるのかは不明であり、類を区別する必要も考えられる。A類は8点、B類は4点が出土した。

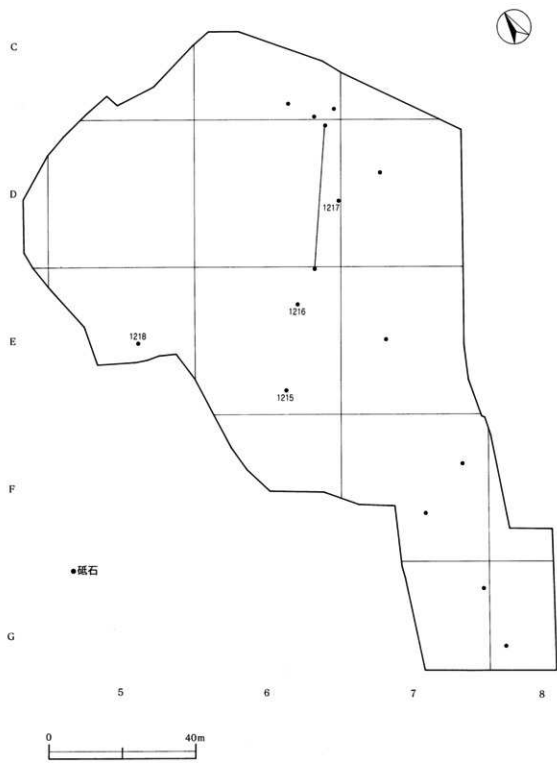
1211は素材の稜線部分を磨りあるいは敲きによって潰し、細長い面が形成されている。1212は全面に敲打が施されている。敲打痕が中心部分でめぐるようにも見えるが、敲打の位置がそれぞれズレている。

⑩砥石 (第194図1215～1219)

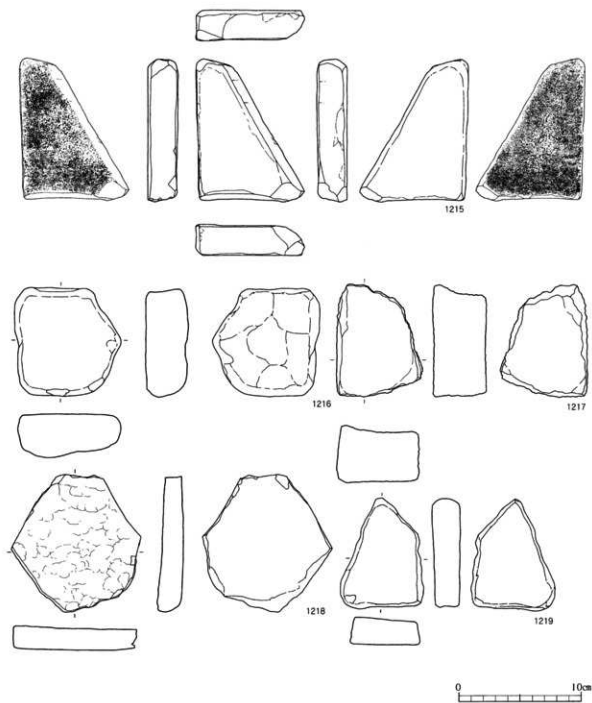
15点出土し5点を図化した。磨りにより表面が光沢を帯びているもので、手のひらサイズのものが多い。1215は扁平な素材を用いて、側面も光沢を帯びている。表裏面には、小さな敲きに類似した痕跡が見られる。1217は加熱による変色が見られる。断面はU字状を呈しているが、石皿の破片である可能性も考えられる。1219も加熱による変色が見られる。



第192図 石器 (30)



第193図 石器出土状況図（7）

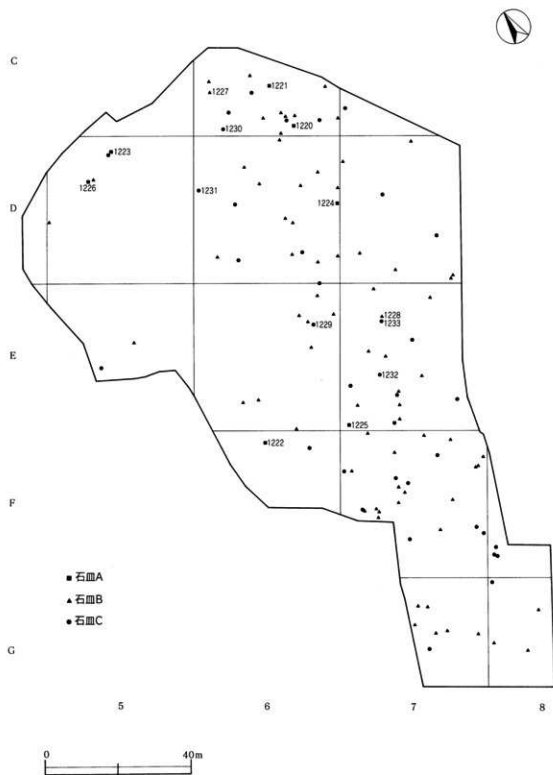


第194図 石器 (31)

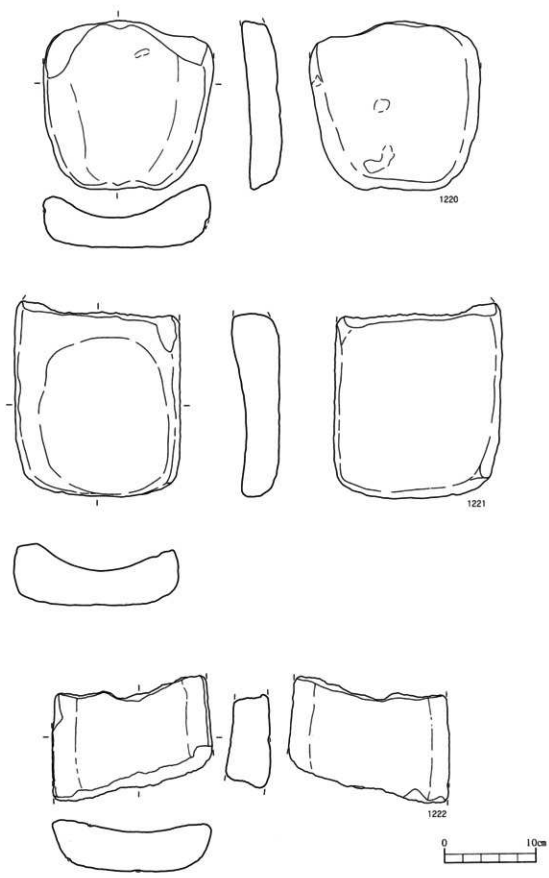
①石皿 (第196図1220～第200図1223)

石皿は面取りを施すものをA類、扁平な礫を素材とするものをB類、厚みのある素材を用いるものをC類とした。A類は7点が出土し、B類は75点、C類は37点が出土した。

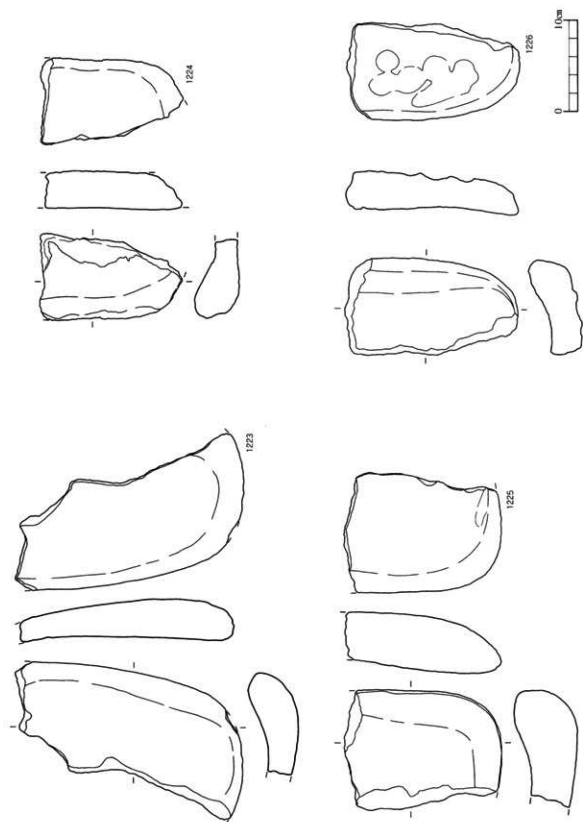
1220～1226は面取りを施した石皿である。分布は3類を中心とした前葉段階の土器の分布と重なるため前葉の可能性が大きい。1221は上部を欠損しているとも思えるがあるいはこれが完



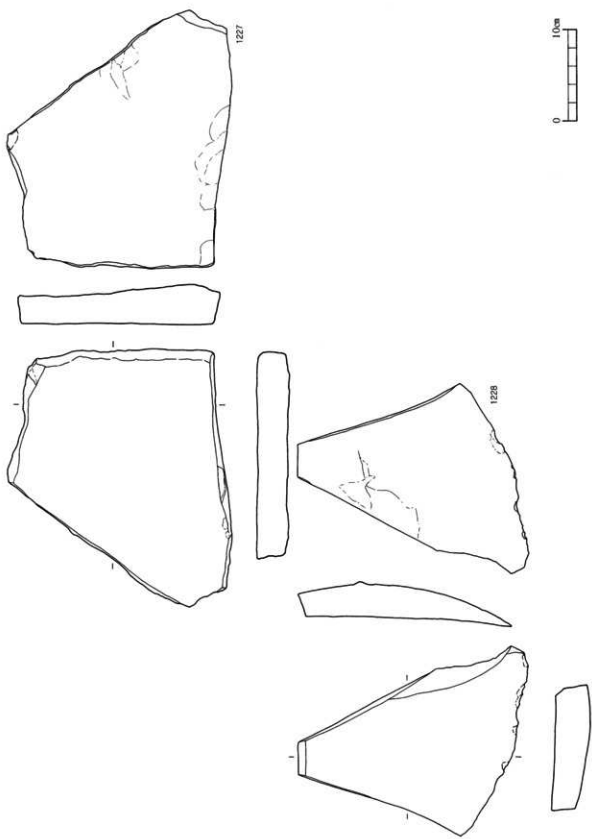
第195图 石器出土状况图(8)



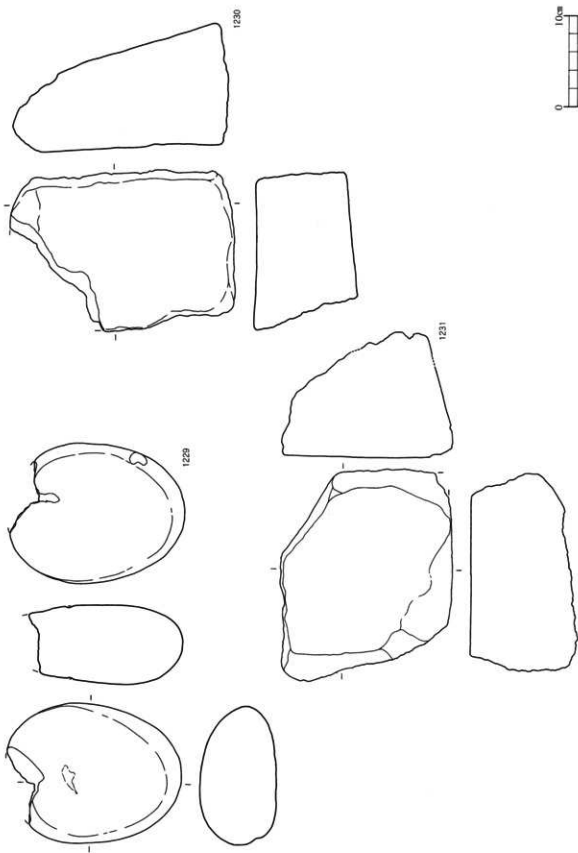
第196図 石器 (32)



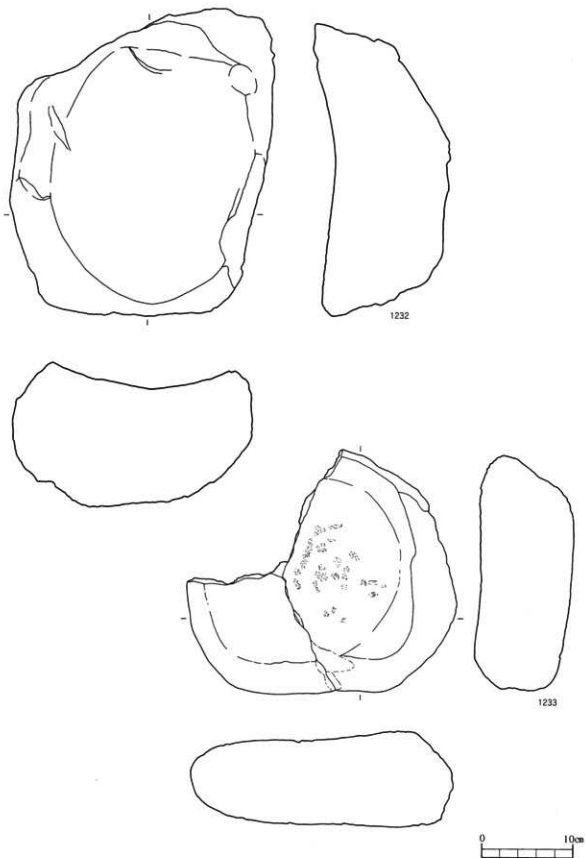
第197圖 石器 (33)



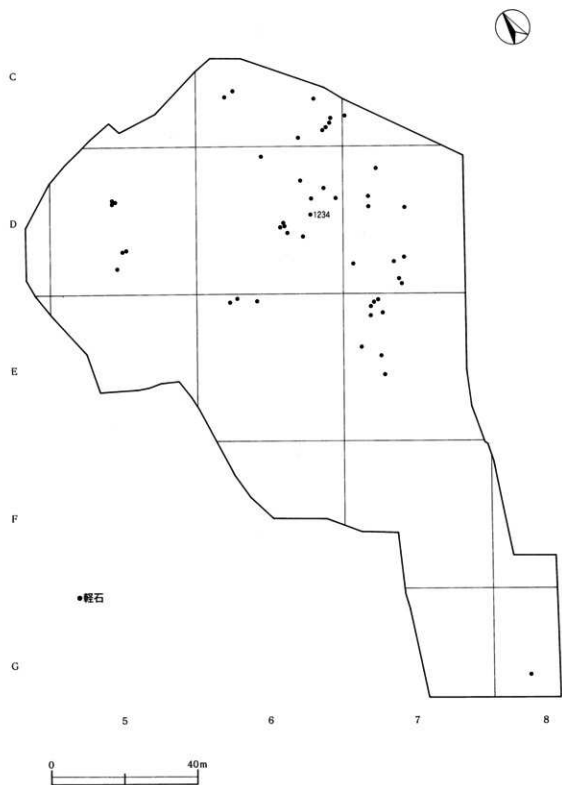
第198図 石器 (34)



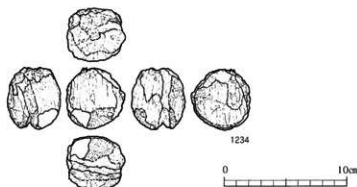
第199圖 石器 (35)



第200図 石器 (36)



第201図 石器出土状況図(9)



第202図 石器 (37)

形品である可能性も考えられる。これ以外はすべて欠損品であり、窪むことで薄くなり割れやすいのか、それとも意図的に割っていたのか両者の可能性が考えられる。

1227・1228は扁平な礫を素材に用いているものである。

1229～1233は厚みのある礫を素材に用いたものである。1229は円礫を用いている。1232は石皿の中で最も重量がある。中央部分はかなり使い込んでいるのであろう。手洗い鉢状にくぼみ滑らかである。1233も1232について重量がある。磨面に敲き状の小さな痕跡が認められる。

⑩軽石 (第202図1234)

軽石はG-8区の1点をのぞきC～E区にかけて出土した。明確な加工品は1点のみでそれ以外は、円形あるいは楕円形といった形状のものが多かった。しかし、この形状自体が加工された結果の状態である可能性も考えられ、本来遺跡内の土壌中には存在しない物質であるために注意が必要である。48点が出土した。

2. VI層出土の石器

①石鏃 (第204図1235～1238)

石鏃は5点出土し、4点を図化した。1235はチャート製のもので先端部を欠損している。1236は両基部を欠く。1237はチャート製のもので、縁辺の調整は微細な剥離が連続して細かな鋸歯状を呈する。1238は緑色に近いチャート製である。基部を想定して図化した。先端部の可能性も考えられる。この場合は、先端部がやや丸みを呈するために石鏃ではなくトトロ石器の欠損品の可能性が考えられよう。

②尖頭状石器 (第204図1239)

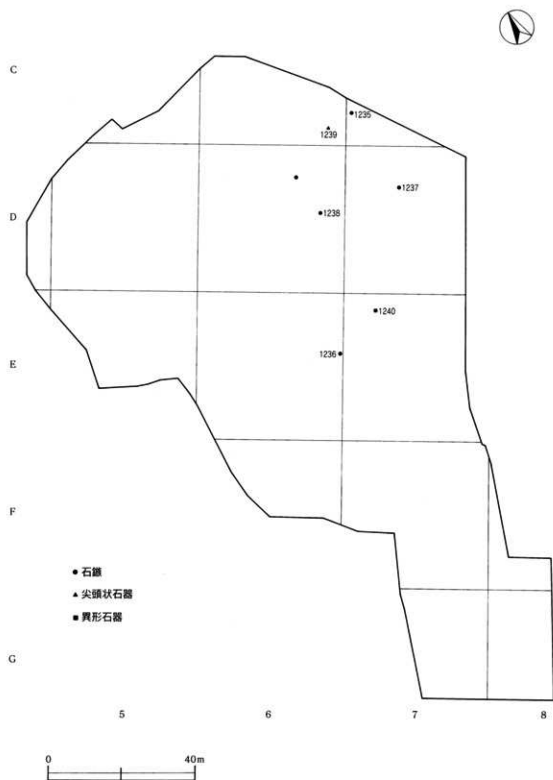
尖頭状石器は1点出土した。1239はチャート製のもので肉厚である。全ての縁辺の調整は荒い。

③異形石器 (第204図1240)

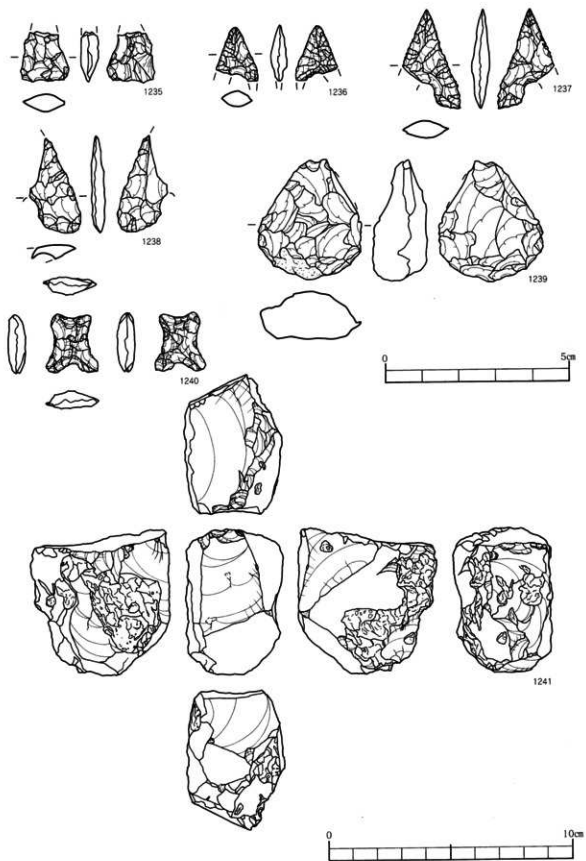
異形石器は1点のみ出土した。1240はX字状に近い形状を呈す黒曜石製のものである。

④石核 (第204図1241)

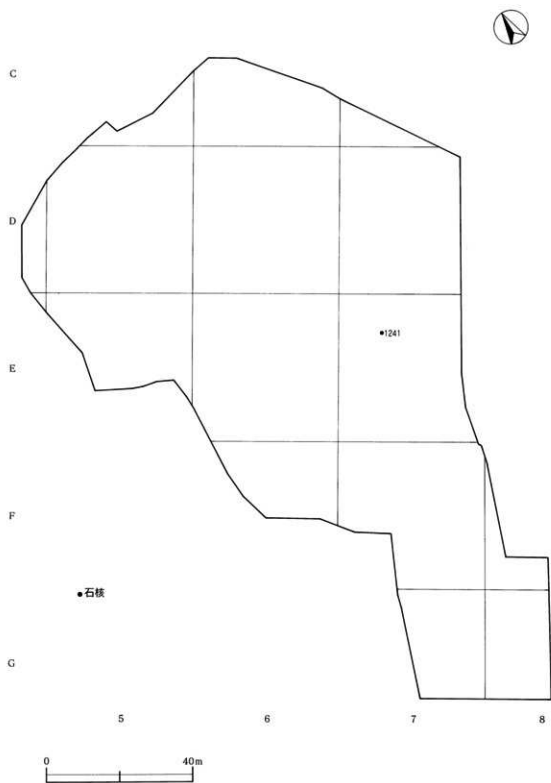
石核も1点のみ出土した。風化の激しい角礫である。縦長剥片を1枚のみ剥離している。



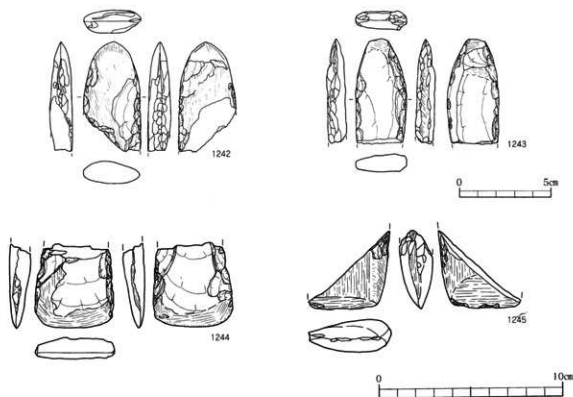
第203図 石器出土状況図 (10)



第204図 石器 (38)



第205図 石器出土状況図 (11)



第206図 石器 (39)

⑤石斧 (第206図1242～第208図1248)

石斧は7点出土した。出土分布は、C・D-6・7区にのみ見られる。1242は、先端部が鋭利に尖る。1243は側辺を入念に磨き平坦面を作出している。1245は、刃部片である。全面に入念な磨きが施されている。1246は頁岩製である。刃部右側が欠損している。やや挟りが見られ、この部分の側面はわずかに潰れている。1247は刃部がわずかに磨かれているものである。左側面には敲打痕が認められるが、右側面には認められない。この違いは、この資料が未完成品である可能性を示唆しているものと思われる。1248は刃部近くの表面からの加撃で刃部を欠損している。

⑥礫器 (第210図1249～第200図1252)

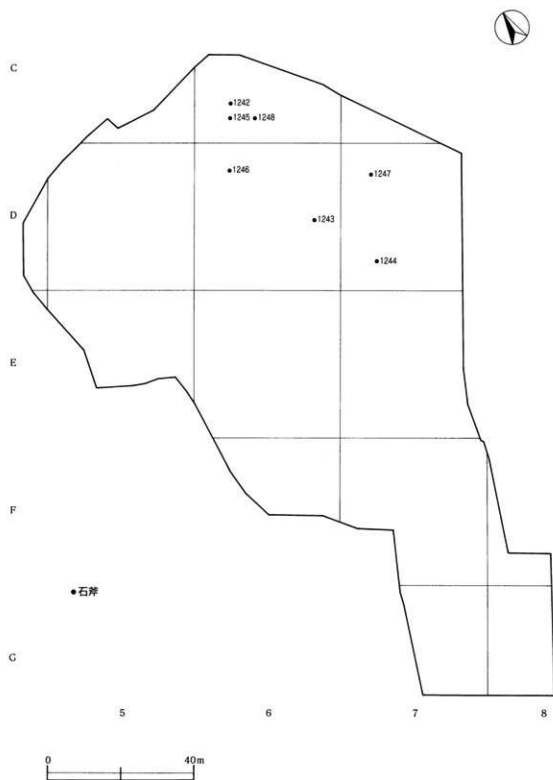
Ⅶ層以下の石器同様に、A類とB類とに細分した。A類は11点、B類は5点出土した。

1249・1250はA類に属する。1249は縦長の剥片を横位にして片面からの浅い剥離で刃部を形成している。礫の縦断面観は若干逆三角形状である。

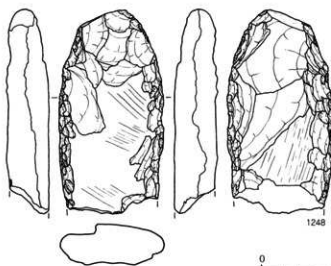
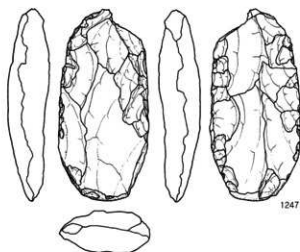
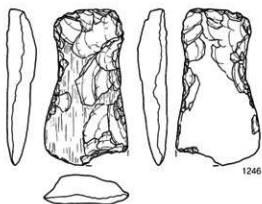
1251・1252はB類に属する。1251は扁平な安山岩製である。1252はハリ質安山岩製である。礫皮面を残し、粗い大きめの剥離が切り合っている。この中でも、剥片の鋭利な部分に小さな剥離を施して刃部を形成しているようである。

⑦磨石類 (第212図1253～第213図1262)

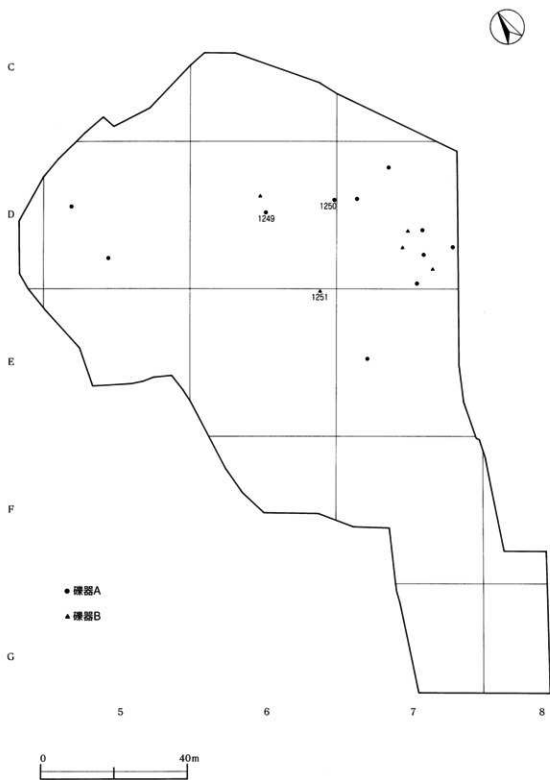
磨石類もⅦ層以下の石器と同様に、方形状のものをA類、小型のものをB類、円形や楕円形などのものをC類として細分した。D-7区に比較的集中して出土しているが2・3地点に広範囲に見られⅦ層出土の石器の中では最も出土量が多い。A類は2点、B類は5点、C類は34点出土した。



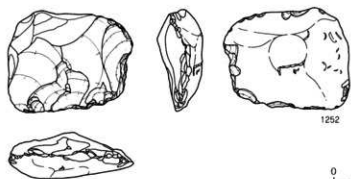
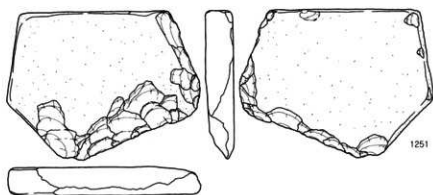
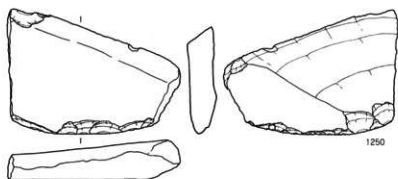
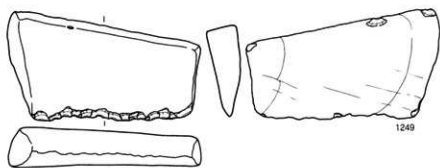
第207图 石器出土状况图 (12)



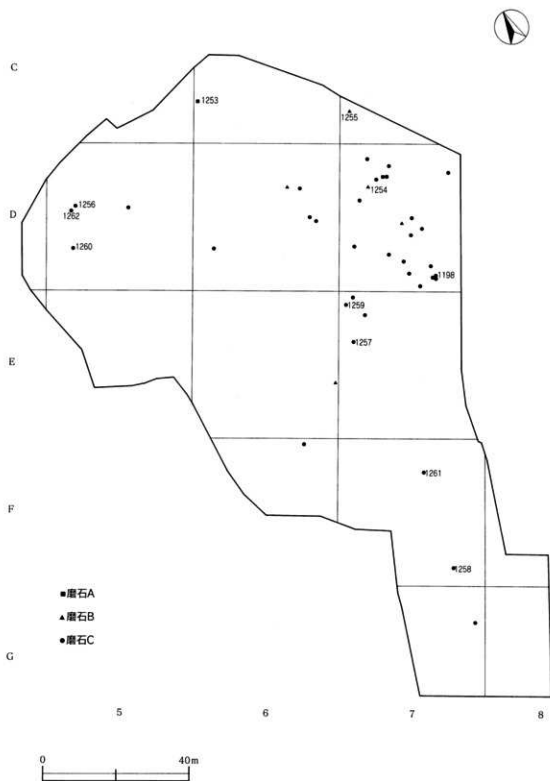
第208图 石器 (40)



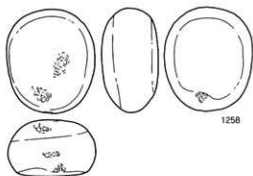
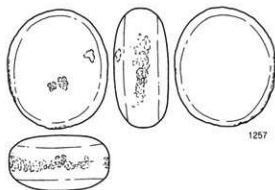
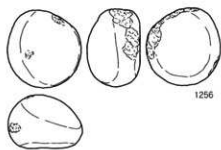
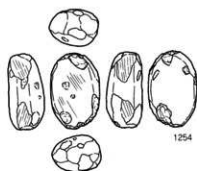
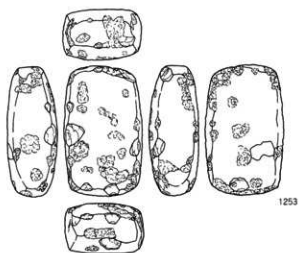
第209图 石器出土状况图 (13)



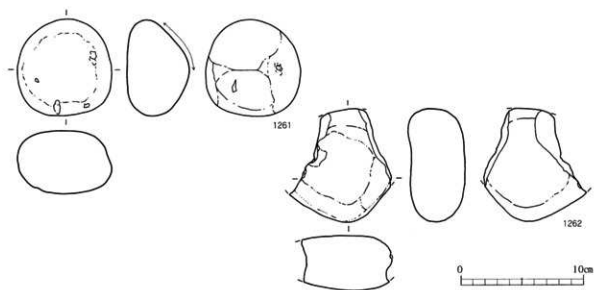
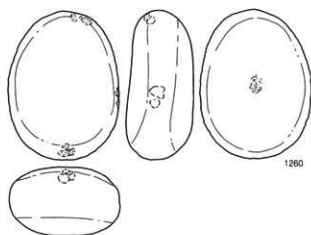
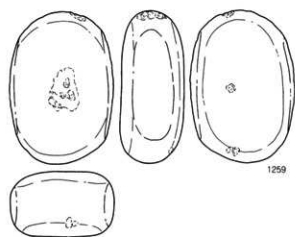
第210図 石器 (41)



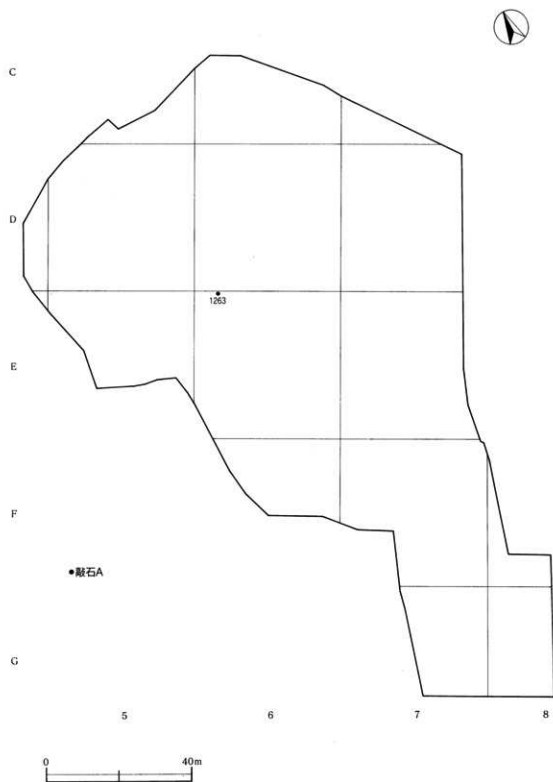
第211图 石器出土状况图 (14)



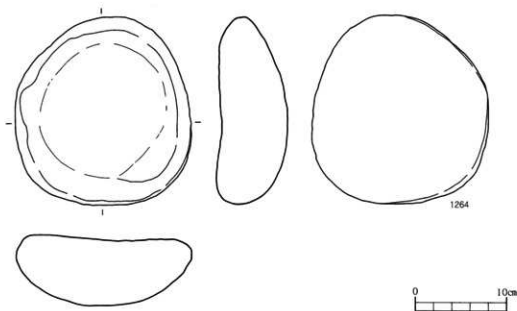
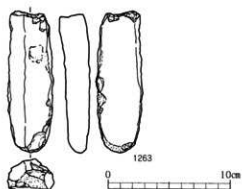
第212図 石器 (42)



第213図 石器 (43)



第214図 石器出土状況図 (15)



第215図 石器 (44)

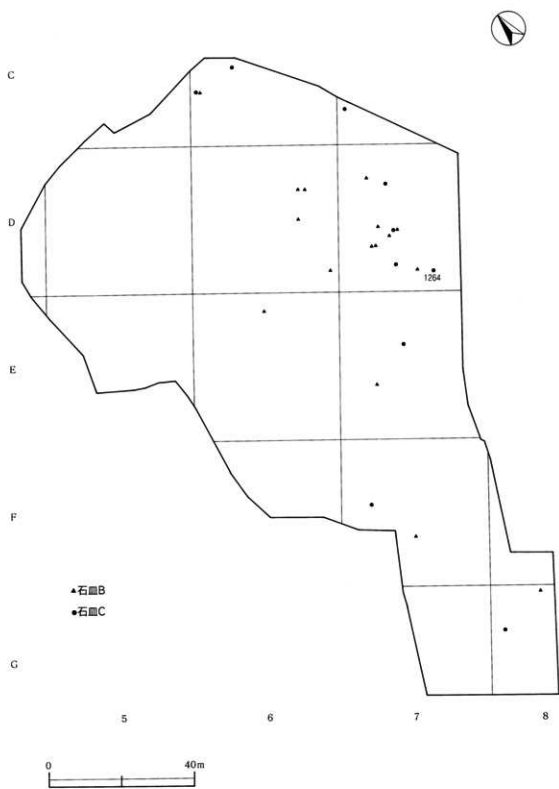
A類は1点図化した。1253は敲痕や磨痕が観察される。

B類は1254・1255の2点を図化した。1254は側面の磨痕が激しく面を形成している。

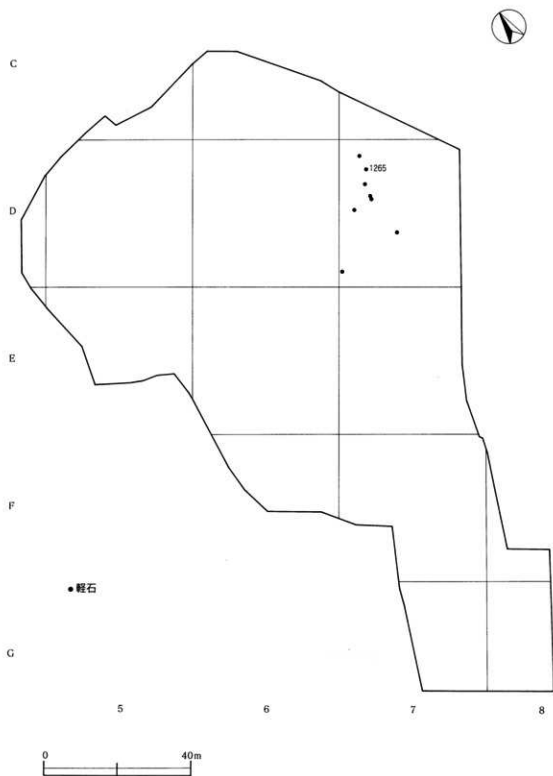
C類は1257～1262である。1257・1258は円形のものである。1257は側面に明瞭な敲打痕が認められる。1259・1260は楕円形のものである。1259は表面の中央部に窪みが見られる。1262はやや不定形の円礫を素材としている。

⑧敲石類

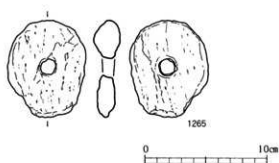
1点のみの出土である。D・E-6区境で出土した。先端部に敲打痕が認められる。



第216図 石器出土状況図 (16)



第217図 石器出土状況図 (17)



第218図 石器 (45)

⑨石皿

Ⅶ層以下の石器では3類に細分したが、Ⅶ層中においてこの内の面取りを施したA類の出土は見られなかった。B類とC類のみの出土であり、分布は、道跡2以西からは出土していない。B類が16点、C類は10点出土している。1点のみ図化した。1264は肉厚の円磔を素材として用いている。使用は1面のみで、この面は中央部がわずかに窪んでいる。

⑩軽石

軽石はD-7区にのみ8点出土した。出土地点はさらに道跡1の上部に該当するものが多く、Ⅶ層中の調査時には道跡の存在は判明していなかったが、やはりわずかな谷状の地形を呈していた可能性が考えられる状況である。製品と判断したものは1点のみであった。だが、Ⅶ層以下の石器の項でも述べたように、本来存在しない物質のため人為的な持ち込みであり、また、円形や楕円形のものも加工された結果の状態であるのかもしれない。

1265は扁平な円形の軽石の中央部に穴を穿っているものである。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(41)

国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

上野原遺跡

(第2～7地点) 縄文時代早期編(第2分冊)

発行日 平成14年3月29日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地
☎(0995)65-8787

印刷所 斯文堂株式会社
〒892-0838 鹿児島市新屋敷町14-16
☎(099)226-3747

